女鑑

第十六年

第貳號



眞正無毒
皮膚艶美

クイーン白粉(おしろい)
クイーン水

本品(ほんぴん)は我同盟國(わがどうめいこく)より輸入(ゆにふ)せる最新(さいしん)最優(さいいう)の原料(げんれう)に貴重(きちやう)なる芳香(はうかう)を加(くは)へ精製(せいせい)したる他(た)に比類(ひるい)なき化粧料(けしやうれう)なり

東京日本橋新和泉町

本舖 三井花陽堂

阿多廣介先生
園田竹熊先生 編纂◎明治卅八年二月 文部省檢定濟

再刊 女子補習讀本

上下二冊
定價 上 金貳拾五錢 下 金貳拾錢
郵税壹冊金四錢
郵券代用壹割增

本書は高等小學校卒業後更に補習科に修業年限二個年の高等女學校技藝專修科に修せんが爲め編纂せるものにして力めて國定の小學讀本に連絡を求め其の材料は家事家政女工等を始め實業に關する事項國家公衆に對する必要なる心得及び美文和歌等の趣味を涵養するに足るべきものを選擇したれば●實用的並に文學的興味を兼有せる完全の讀本として學校は勿論家庭に於ても必須のものなり

重要目次

上巻 ●わが國の染織●京染の色●衣服の取扱●衣服着用の注意●思ひやり●萩原直女●心のきゝになるならぬ●こゝろ●佐藤つる●嫁に送りし手紙●往來の米作●青年に望む●樹の栽培●苦樂●勤儉貯蓄●甘藷●砂糖●食鹽●衛生に關する心得●運動を勉むべき事●飲食を節すべき事●清潔を保つべき事●西洋洗濯法●空氣●住居の撰擇●ナイチンゲール●赤十字●慈善を行ふべき事

下巻 ●國土と生業●商業の發達●主人の眼識●古今交通の變遷●電氣世界●四季折々●千代女●都と田舎●森林の變遷●女子の服装●工女の飾●身の飾●英國の婦人の●紡績業の進歩●陶器●母のつとめ●家庭の樂しみ●人の遷動●田舎の夕ぞ●出征軍人の妻に送る手紙●實家に對する心得●右返事●歐米人の公共心（以上）

發兌元 東京築地二丁目 株式會社國光社

女鑑第十六年第貳號目次

小畠幾次郎先生著

三版

體力增進論

重要目次

第一編 體力增進論

第一章 體力增進とは何ぞや　第二章 體力增進の目的

第二編 體力增進本論

第三章 體力の本源　第四章 鍛練と體力增進

劍道と體力增進●柔術と體力增進●捨法より得たる體力增進新法●柔道と體力增進●弓術と體力增進●乘馬と體力增進●相撲と體力增進●日本體育會の事業●鍛練的體力增進の總括

第五章 精神修養と體力增進　第六章 攝生と體力增進

第七章 無病長生法の直價を論ず

菊判洋裝
定價金四拾錢
郵稅金八錢
郵券代用壹割增

第三版

高評嘖々

小畠幾次郎先生著

腦力增進論

重要目次

緒言

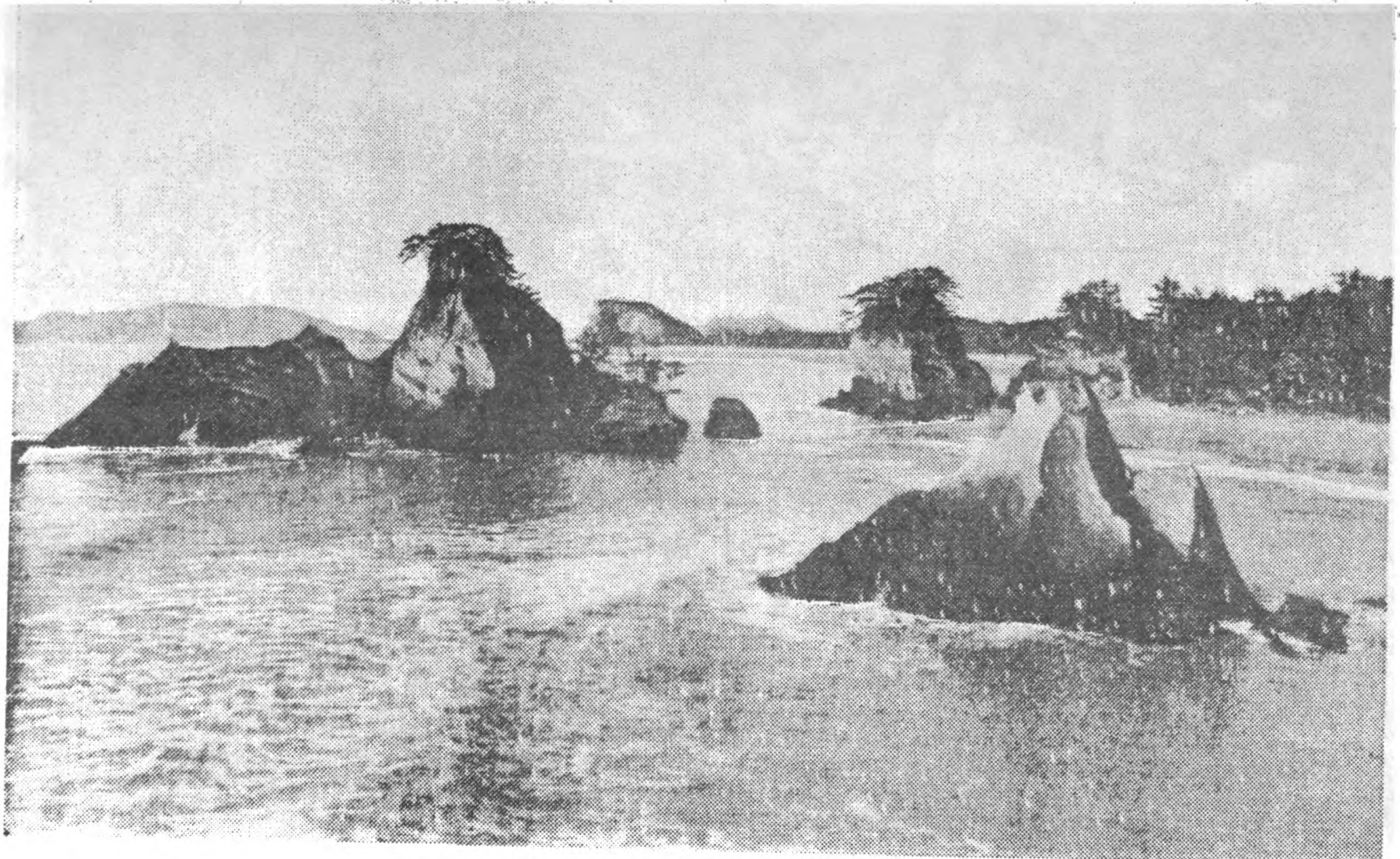
總論

第一章 大勇猛心と腦力增進
第二章 神經衰弱とは何ぞや
第三章 大氣力家と神經衰弱
第四章 腦力の障害に對する醫術大家の意見
第五章 自發心の靈力
第六章 苦樂の觀
第七章 腦力增進と王陽明
第八章 自發的增進と注入的增進

菊判洋裝
定價金三十五錢
郵稅金六錢
郵券代用一割增

發兌元　東京市築地　國光社

松島



The view of Matsushima.

柳原伯爵の家庭



秋元子爵の家庭

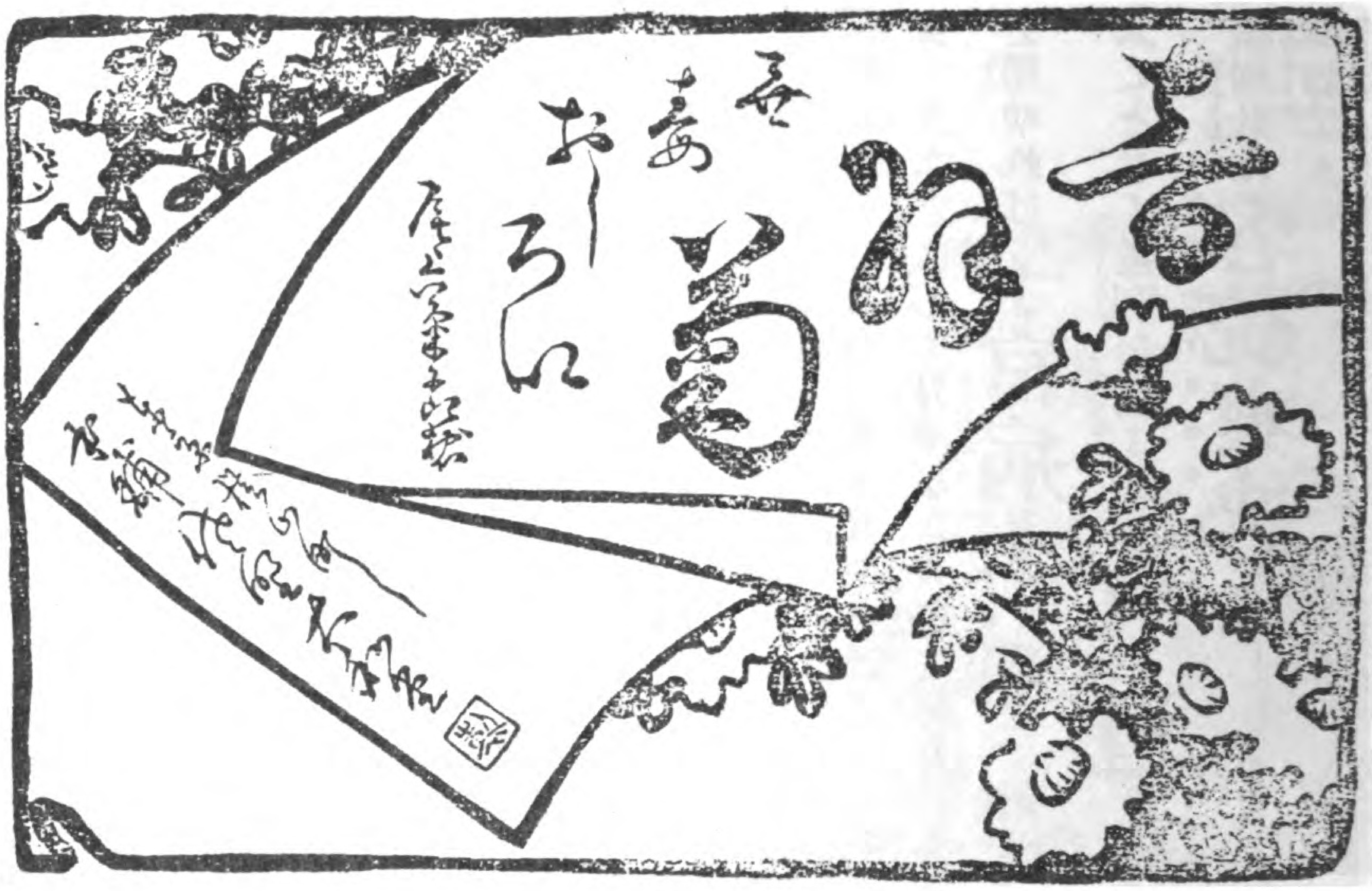


蕾の花



一人二態　淺野桃藏氏令孃

一人三相　廣田眞氏令息



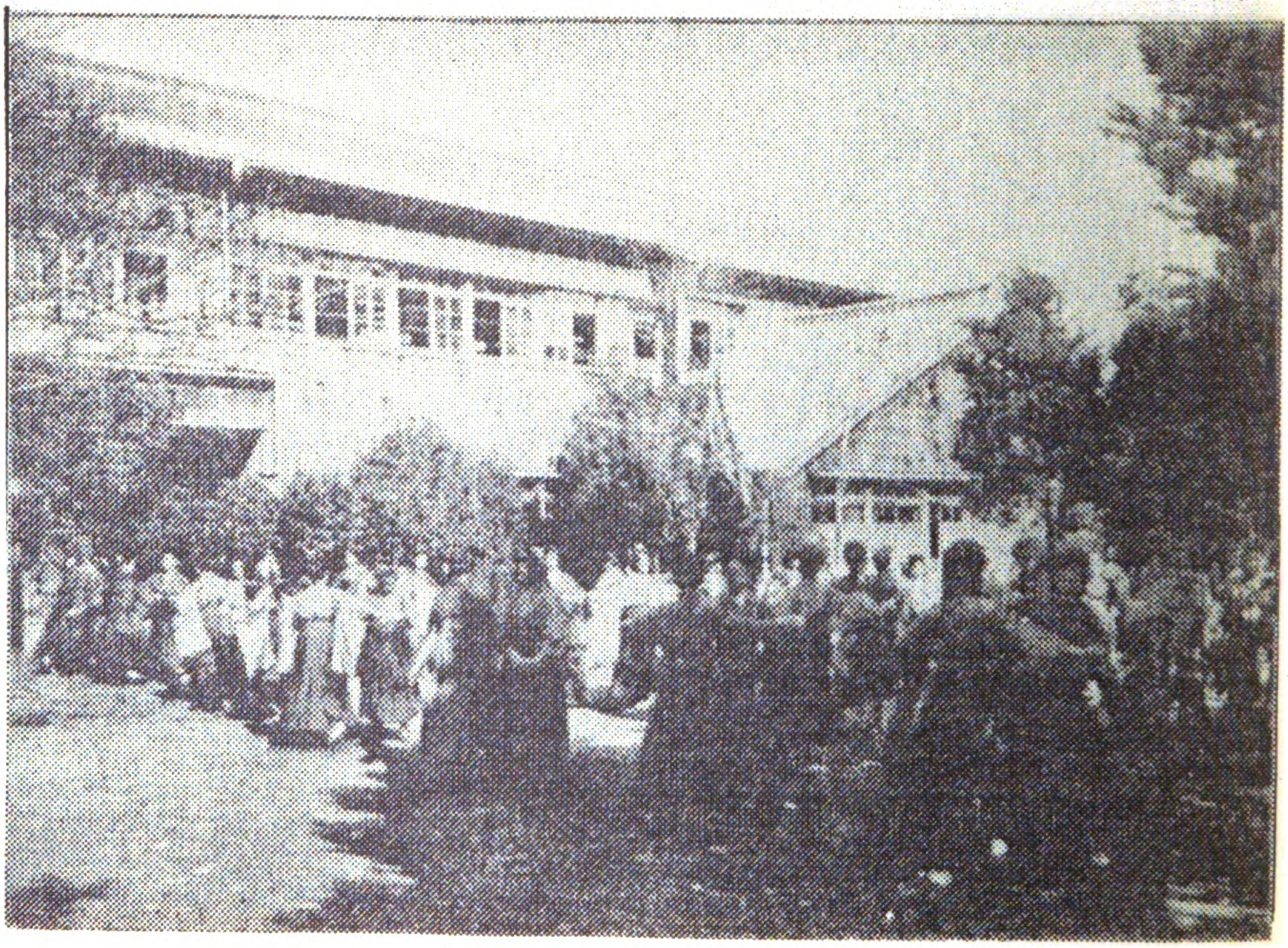


定價●金五十錢●金廿五錢●金十五錢●金二十錢

三輪田高等女學校



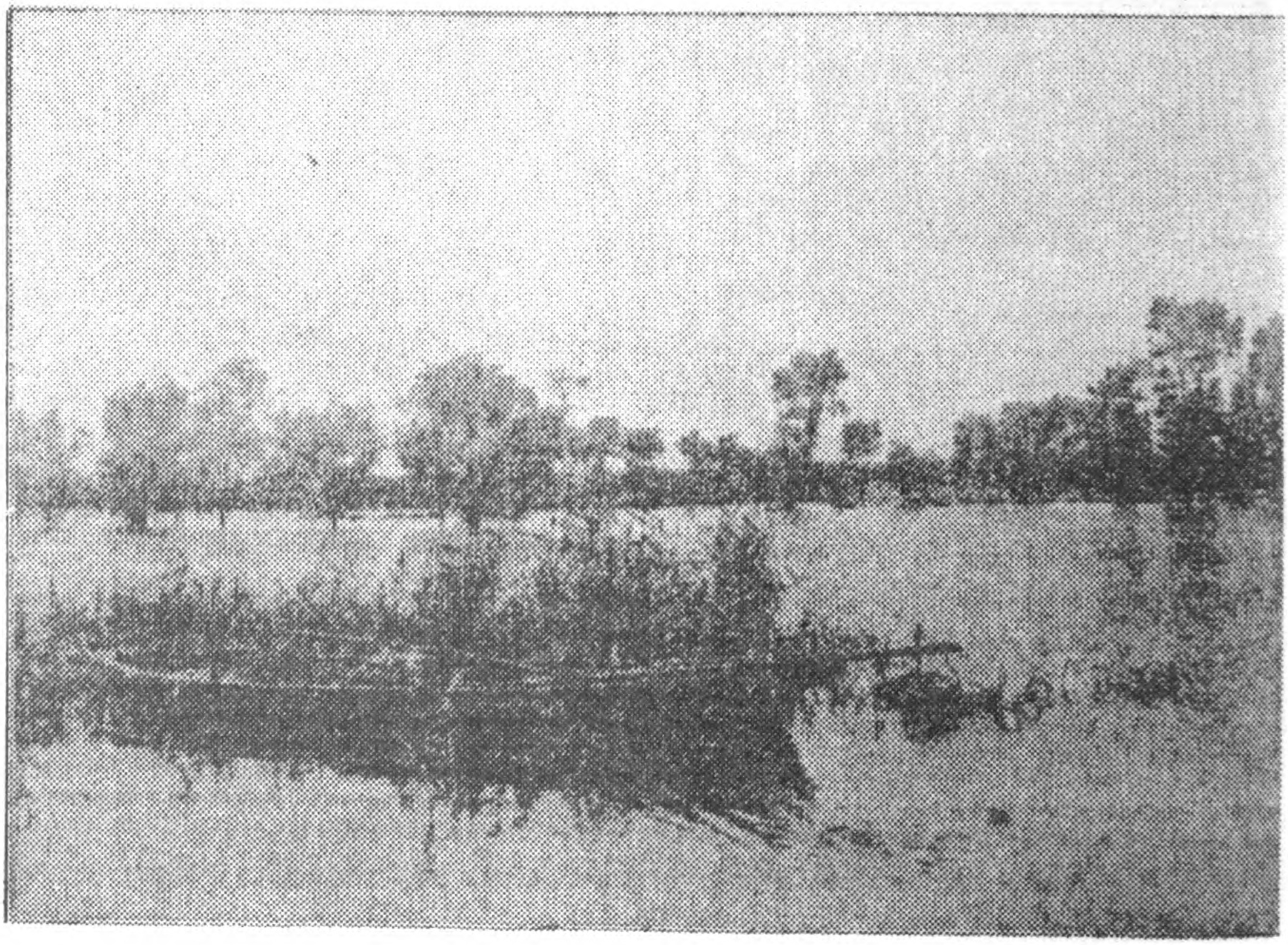
（其一）



（其二）

馬と舟





徳川男爵撮影

愛國婦人會



愛國婦人會京都支部

經木眞田講習卒業式

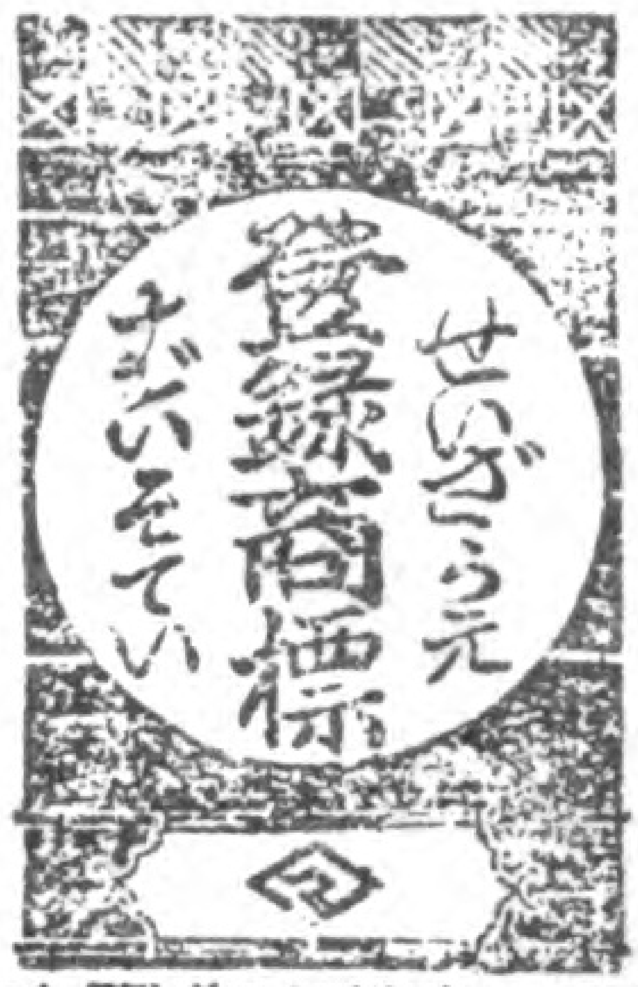


第五回博覽會褒賞受領



定價 壹袋壱錢 罐詰五錢

此名題洗粉は皆々様の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舗製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登錄商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覧の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也



東京淺草區黑船町 梅素亭謹製

電話 下谷 二三四

東京銀座一丁目河岸通り

帝國貯蓄銀行

（電話新橋 八一六 二八〇八）

本郷一丁目 本郷支店
飯倉三丁目 飯倉支店
赤坂表一丁目 赤坂支店
四谷大通り 四谷支店
南品川一丁目 品川支店
横濱吉田町 横濱支店

牛込神樂坂 神樂坂支店
神田須田町 須田町支店
兩國米澤町 米澤町支店
淺草雷門前 吾妻橋支店

代理店 日本橋坂本町 田中銀行

◎一錢以上何程にても御預り最も御便利に取扱申候
◎毎月五日迄の御預け金は全月分の利子を付け申候





第十六年 女鑑 第二號

二月

年の二月は年に於ける平凡なる月なり、働き疲れたる前年を受けて遊び疲れたる一月を受けたる月也、一月の計は元旦にありといふは、兎角に行はれぬ言にて一月は遊ぶ爲に作り、二月は呆然自失する月となれり、されど事實は一年の仕事は二月に始まり、十二月に句切り、一月は慰勞するものとなれり、故に二月は決して平凡なる月にあらず、最も多望なる月にてあるなり、然るを二月を平凡にする人、呆然自失する人は、一生を通じて平凡に呆然自失せればならぬ也、時は平和克復の春、世界各國より羨まるゝ我日本は其裏面に於て父子を戰場に失ひたる數萬の家族、農作穰らずして飢餓に迫る幾萬の人、今や涙盡きて呆然自失せる也、手足の勞せらるゝ餘地ある人にして、豈齊に呆然自失する時ならんや、各其職分に勵みて多くの餘力を如上同胞の爲に頒ちて、彼等を慰安救濟するに力めよ本年の二月は決して平凡に過すべからざるなり。



將來の婦人に望む

子爵　秋元興朝

婦人としては、如何なる婦人が最も價値あるか、如何なる婦人に仕立てるが必要であるが、大にその境遇によることであつて、一概にも云へぬが、大體に於て其方針を定めて置かねばならぬ、そこで東洋流道德を基礎とするか、或一方では受はよいが、今日の時勢には合はぬ、然らば西洋流に依らんか、それも實際に一から十までよいと云はれぬ、折衷すれば何うなる、それは面白い注文も出ぬではないが、注文ばかりで實行が出來ねば、何の役にも立たぬものである、家庭に於けることも、一般に對して今の程度であればどうすれば物になるといふことが、實行する上に於ては六かしいことである、それ故に先づ將來の日本婦人に就ての希望を述べることにしたい、

日本の婦人が維新前迄に受けた敎育は、書物の上では女大學位なもので、實に幼稚なものであつたが、實行上の敎育は、弊もあつたが、よいこともあつた、併し、その當時よい事であつたのが、今もよい事とすべきか、その當時あしい事としたものが、今考へて悉くあしいことであるか、それ等は大に疑問である、

書物の教育上から來た事ならば、道理主義を基本と立てることが出來るが、右の如く唯實行上のみから來た教育であるから、今日の時代に甚だ合はぬものがある、

譬へば維新前の、所謂武士的教育がよいとしても、その時のよい事とした一例を擧げて見ると、自分の良人たるものが君の御馬前で討死をすることが、平生の覺悟であつて、而も女子は政體の機密に與からぬものとして、此點に於ては一家に於ける門外漢であつた、さういふことが妻たるもの丶美事として、實地に教育されて居つたものであるが、それがよいとしても、今の時世には適合すまい、さういふ事が數へ切れぬほどある、

その歴史を閲して來た日本婦人に、今突飛に西洋流に搗替やうとしても、明治三十九年、四十年に適するものが出來るであらうか、即ち新日本の婦人に就て、實行に適する道を考へるが、急務であらうと思ふ、

婦人の辿り行く道は、隨分多樣多端であるが、その中一つの注文を提出したいのである、それは外でもない、婦人が廣く交際をすることである、何うしても男子は、或は政府に或は民間にあつて、大に働かねばならぬ、忙がしい身を持つて居るから、女子は交際の方を受持つて行かねばならぬ、

日本の婦人は、これ迄の習慣上家庭に引込んで居るものが多い所から、交際といふことには誠に不馴である、そこで多數の人が引込んで居る時に、少數の人が交際場裡に働くとなると、甚しく目立つて、やれハイカラとか、はね上りだとか、種々の惡名をつけられる、國の東西に拘はらず、女子は極めて感情に強いものであるが、日本の婦人は誠に男子より感情に走り易く、ハイカラがることも、はね上ることも、隨分目立つ所まで行き、それに伴ふ弊害もないではないが、從來の交際に心掛のないから見ると、少し位の弊害はあつても、外に出て交際場裡の花たらんことを希望するのである、

茲に集會があるとしても、男子ばかりであると、すぐに議論でもする、打解けたとなつても、中流以上の人の口にすべからざる猥褻な事が平氣で話題になる、實に面白からぬ事が多い、かゝる場合にも婦人が其間に加はれば、醜業婦にあらざる限りは、その弊も取除かるゝ譯である、大分世間の人もその點に注目するやうになり、其緒に就て居るやうであるが、甚だ交際の區域が狹い、今少し一般に廣く成るやうになりたいと思ふ、さうすれば、婦人が男子に對して、談話の材料が多くなる、隨つて子供の教育にも、萬事都合がよくなる、

これが從來のまゝであれば、妻が夫と對坐しても、夫の話とは所謂桁が違ふから、その間に興味が乏しい妻は夫を慰むるものであるとかないとか、そのやうな理屈は別にして、相互平常の談話に興味があつて、家庭が圓滿に治まるといふことになれば、相互の利益である、

音樂が何うとか、すみれが何うとかと云ふ話になると、少し小說的になつて、三百六十五日、さういふ譯には行かぬが、家事に差支ない限りは、家政を助ける考を以て、交際場裡に出で、他も知らぬ、自分も知らぬ、廣い智識を得、深くなくとも政治、實業の事より、旅行の事に至るまで、專門的智識は得られぬが大體に就ては會得するやう、普通のコンモンセンスを得たいものである、さすれば夫婦相互の間に興味を得て、子供の教育上、家政の上に於て大なる稗益を得るもので、交際場裡の花は家庭に於ける花ともならねばならぬ、自分の交際場裡に出ることを勸むるは、衣服を着飾つてはね上り、お饒舌をして歩くことでなく、一は家政を助ける爲に、一は社會的智識を得る爲めであつて、家を忘れて飛歩くことを奬勵するのではない、家を忘れて飛歩く交際夫人は、あり過ぎて困る位であるから、（文責在記者）

妻として必要の條件（三）

女子特有の美德

法學博士 松崎藏之助

私は女子教育に經驗もなく、考もない、一般の妻女に向つて、必要の條件など丶、注文を提出するほどエライ、完全無缺の人とも思はぬ、隨つて其資格もない譯であるが、いさゝか云ふことのないでもない、從來東洋にて、女子の社會上に於ける地位は零であつたもので、これが最も將來に向つて考へなければならぬことであらうと思ふ、近頃日本に於ても、女子教育が進み、其他政治上、社會上の關係も變つて來て女子の活動すべき範圍も、大分廣くなつて、大に喜ぶべきことになつた、これから女子の社會上の地位を認識せられるやうになるであらう、併し女子の社會上存在を認識せらるゝやうになつて、それが直に女權の擴張と見るは宜しくないことであらうと思ふ、

それに就て一言せんか、從來日本の女子、殊に一家族内に於ける妻女なるものは、男子即ち夫に對して、義務ばかり負はせられたものである、これは男子の方から見れば誠に都合のよいことであつて、都合のよいのみならず、或點或意味から見ると、寧ろ其方が宜しいかも知れぬが、それに伴ふ弊害も非常であらうと思ふ、勿論從來通り妻女たるものは、夫に對して多大の義務を負はねばならぬもので、社會の事業が複雜となるにつれ、男子の事業は多大になる譯であるから、妻女の義務の大なるべきは言ふまでもないことである、そこでたゞ普通の食物を調理する衣類を裁縫する、起居動作に注意する位で、完全に妻女たる義務を果したとは言へぬ、

素より前述の如く、外形に現はれたる義務を果すべきは當然であるが、一家内に於ける妻女の執るべき道は、皆義務として勵行せねばならぬ、
一歩進んで、妻女は絕對に精神的服從の義務を負はされたものが、我國では古來の習慣となつて居るが、將來もさうあつて然るべき事であらう、その義務に伴うて、權利をも與へねばならぬ、妻女たるものも、其權利を行使する丈の考と行使する丈の資格を有つて貰ひたいものである、
その權利と稱するものは外でもない、妻女が夫の一生に於ける歷史に、いつでもその伴侶になつて、よかれあしかれ、必ずその喜を共にし、その憂を分ち、緩急事あるに當つて、妻たるものは、意見の夫に尊重せらるゝ域に進まねばならぬ、
私は妻女の意見を輕視する奴隷の如くであつたならば、それは一家のみならず、社會の組織を不完全にし、諸般の弊害を胚胎することゝ思ふ、
從來東洋の妻女の境遇を見ると、男子とは同等に見なされぬ傾きがある、勿論女子と男子と絕對的に同等でない、その同等でない所が同等である所以を男子に於ても女子から見ても

學校教育と家庭教育

此間ある人が、女兒は學校に通學させないで、家庭で教育した方が善いといふ說があるが如何でせうと、問はれましたから、私は答へて其れはやはり一得一失です、純粹な家庭教育は非常に贅澤です、大層金がかゝります、其得失長短を比べたら、學校教育よりも女兒には宜う御座いませうが、先に申した通り、一得一失です、なぜと申すに、先づ普通の子であつて見れば、大勢の仲間と一所に學ぶ程氣がかゝりませぬ、倦みが來ます、そしてどうしても切磋の力が足りませぬ、すべてに就いて面白みを感じませぬ、どちらかといふと活潑になりませぬ、其代りに、惡い風に染みませぬ、生意氣になり、お轉婆になる嫌ひは少ない、奥床しい人が出來る傾きです、學校教育は全く前者と反對の結果を顯はして來ます、で贅澤を申せば十五人か二十人、大抵同等位の生活の程度の同年齡位の女兒を一所にして、極善い教師を聘して教へるのです、さうすれば屹度程よい人が出來る勘定です、けれども

心得なければならぬ、そてで近來のやうに、女子が妙に日進とか、文明とかの教育を受けて、天文學者になる、物理學者になる、など、希望して居るものも聞及んで居るが、これ等は男子と同等に行かんと欲しても、同等になるべき道を知らぬ人としか思へぬ女子の才智、藝能は決して男子に劣らぬ、といふ考へから男子と同じ事をしやうとするのは、却つて女子の☆不幸を招く所以であらうと思ふ、女子は女子として、各適する職分がある、その適當なる職分に向つて發揮することを心掛けて貰ひたいものである、女子は女子で、自分に最も適當する職分を完全に盡して、男子に到底及ぶことの出來ぬ方面に向つて一家族又は社會上×

×に於る權利を伸張して貰ひたい所謂女權、即ち威張ることではない、この權利は神聖なもので、小は一家より一國に及び、大きく云はば社會道徳の根底となるやうにならねばならぬ、故に決して威張るのではない、道義の觀念を持たねばならぬのである、これは女子に於て常に注意すべきことであるが、男子の方からも更によく注意して尊敬を拂ふべき權利に到着するやうにしたいものである、

同窓の友といふ者は大きくなつても、誠に親しい賴もしいものですから、今後女子も多少社會の表面にも立つて、種々の働きをせねばならぬといふ世の中になつては、どうも大數に勢力を得らろゝ傾向を免がれませぬから、大數の同學校出身の生徒の方が勢ひ力があり、從て物事がしやすいやうな工合になります、其他心の置けぬ友達の多いのは何かにつけて益がありますから、先づやはり女子も學校教育をして、そして家庭で夫を補ふべく、十二分の注意を與へるやうにせられたいと思ひます、殊に精神の修養は家庭に於る母の力に待つ事が、極めて多いものです、何でもマアそんなものでせうが、教育は殊に精神と智識と、そして金力と所謂三位一體でなければ好結果を得られないものでありますから、要は猶其根本に歸して良教師を作り出すべく、財力も十分にして貰ひたい、精神の强固な有識の人が、教育界に續々身を投じて戴きたいと希ひます、法と云ひ規といふも、詮ずる所人です、と申すも猶我田引水の嗤笑を免かれませんでせうが其れは私の甘んじて受くる所です(下田歌子氏談)

そこで東西兩洋婦人の品評をすれば、由來日本の女子は、愛らしいといふことが、萬國の輿論となつて居つて、藝者なる言葉が世界普通の評語となり、各國に於ける立派な劇場に於ても演ぜらるゝ程になつたが、併し褒めた事であらうか、有難いことであらうか、私の目から見たら、更に感服した話ではないと思ふ、併し西洋の遊歷者は、日本の女子を愛らしい、同情に富む、柔よく剛を制する、この諸點に付て大に讃美して居るが、その同情に富むといふごときは、その躰裁をのみ備へて、その振をするに上手な方が多いやうであるが、一家の妻女たるものは、この諸點に就て、大に注意して貰ひたいものである、

西洋の婦人は前述のやうな譯には行かぬ、男子に對して負けて居らぬ、獨逸などはツアンケンなどいふ言葉まであつて、夫婦間の物爭ひをして騷ぐなどは、朝飯前の出來事であつて、これは妻女の不從順から起るのであるから、西洋人の眼から見ると、日本の女子の、をとなしい、やさしい、同情に富んで居る柔克く剛を制すると云ふ行動が、天女の樣にも思はれるのである、これが日本の女子の長所であるから、この美質を發揮すべきである、昔から賢夫人と稱せられた人は、愛があつても、それを夫に見せぬ、困難があつてもそれを顏に現さぬ、温情を以て夫の心を慰める、或は挫けた夫を勵まして勇氣をつける、といふ風であつて、かゝるものを今後ともに理想の妻女として、歡迎してよからうと思ふ、

前述の如く、妻女たる人は、夫の一生に於ける伴侶とならねばならぬものであるから、女子は男子を了解するだけの教育と、智識は受けたいもので、昔の諺に釣合はぬは、不緣の基といひて、この語は通常男女貧富の懸隔して居る婚姻の場合に用ひて居るが、これを轉用して、智識の釣合はぬのも不緣の基と言ひたいのである、物質上のみ釣合うて智識の釣合が保てねば、兩者の話も疎通せず、不愉快にもあり、進んで不幸をも生ずるに至るのである、

例へば夫は高尚の哲理を考へる、文學の趣味を有つて居る、これに配する妻女が、下ざまの世間話か、少し下つて餘り襃められぬやうな話でなければ相槌が打てぬとなつたらば、決して苦樂を共にすることは出來ぬであらう、

それから女子は男子に比して感情が強く、細かな點によく氣の付くものであつて、想像力にも富んで居るが、その想像が空想でなくて、一家の整理上必要なる丈に逞くし、細かな點に氣の付く性質を、秩序的に實行するやうに修養したいものである、

次に女子のたしなみといふことであるが、これは男子から云へば、近來流行語となつて居る武士道とは軌道を異にして居るやうであるが、武士道といへばえらいやうで、直に畠山重忠、楠正成を聯想する如く、婦人のたしなみといふことも、紅白粉をつけるといふことのみでなく、楠正行の母であるとか、或は山内一豐の妻であるとか、明智光秀の室、細川忠興の夫人などを聯想して貰ひたいのである、

猶細かい事に立入つて言へば、人を訪ねて玄關から座敷に通れば、大抵其家々の模様が分るもので、これ等は妻女のたしなみに基くもので、一體衣服、飲食、起居、動作といへば、家族的生活に必要なる部分を網羅して居るが、この諸點の注意は、これで直に妻女たる職分を盡し得たとはいへぬにしても、この注意は夫をして多大の利益を感ぜしむるのみならず、その行ひが規矩に合ひ、雅致があるとすれば、この模様を見て快感を覺えぬものはなく、小兒の教育上にも、至大の影響を與へるもので、小兒の性質を善くし、道德心を涵養するも、以上の諸點の注意に待つべきである、近時青年の邪路に走るもの丶多きは畢竟家庭の無秩序不規律に基くもので、これを完全にすべきは妻女の務である、

近時戀愛小說の流行につれ、蝦茶式部の弊風が起る、或は華嚴瀧とか、淺間山とか、折々新聞の種になる

ことが聞ゆるが、これ等は實に野蠻な事であつて、女子は家庭にあつて、男子の氣性を雄大にするやう柁を採つて、それ等の戀愛小說の材料ともなる事柄、失望、落膽、薄志、弱行などの家庭から出ぬやうに、妻女が男子の及ばぬ特質を發揮して、かゝる弊風を社會より一掃することを希望するいゞである、

人體の自然免病

醫學博士　岡田國太郎

妻として必要の條件は、一にして止まらぬであらうが、自分は自分の研究したことに就て、家庭の中心たる妻なる人に向つて、いさゝか注意したいと思ふ、

近年傳染病の原因に付ては、學者の熱心なる研究によつて、是まで原因の不明であつたものが、次第に分かつて來て、或は病毒が如何に人體を冒すか、或は人體が如何なる場合に於て病に罹かり易きか、即ち人體の病に罹る徑路が稍委しく尋ぬることを得るやうになつた、諸君は定めて此等の事に就て、御聞及びでもあらうが、中には御了知でない方もあらうから、其方々の御參考にもと、左に一二を申述べよう、

本來人體には生れ來ると同時に、病毒に抵抗して偶々彼のものが體中に入る時には此者が之に抵抗して、容易に其毒を逞しうせぬ樣にするものがある、此免病素とでも云ふべき者が、健全なる人體には常に全身に充滿してある、所で一朝體に何か申分が出來ると、例へば怪我の爲に體が弱るとか、或は風を引とか、又は腸胃が惡るいとか云ふ樣な場合には、忽ちに彼の者の働きが弱くなるか、或は全然働かぬ樣になる、而してかゝる場合に折惡しく、何かの傳染病毒が其體に侵入したならば、此者が容易に其毒を逞ふし得らるゝが故に、忽ち重い病人となる、其故に傳染病流行の折には、感冒に罹り又は腸胃に申分のある者がよ

くそれに冐さるゝのである、而して又、精神の異常と哺乳の方法とは、大に兇病素に關係を及ぼすものであるが此事柄は稍新しい實驗說であるので、特に左に述べて置かう、

一　精神は常に安穩に保つべし、

精神安穩にして全身に申分なき時は先に申述べたる如く、兇病素が充分に働いて、偶々病毒が侵入しても能く之を打ち消すを以て病毒には冐されぬ、けれども急に精神に異常を來たした場合、例へばひどく心を痛むる樣な不時の精神感動のあつた時は、病毒に侵され易い、其故は精神感動の爲に、腸胃の作用を損ひ腸胃一度病む時は、即ち兇病素をして其働きを不十分ならしめる故である、故に決心の確固たらざる時、又は極端に物を憂ふる場合は、兎角胃病とか腸の疾患とかに陷り易い、されば人たる者は、平常事に臨むて、容易に精神の感動を來たさない樣に心掛くることと肝要である、世間兎角養生家の名ある人にして、極めて攝生に注意しつゝあるにも係はらず、傳染病流行時に、偶々此の不幸に陷りて他人をしてかく迄も養生を愼しむ人なるに、如何なる工合で傳染せしやと疑はしめることがある、此は上にも申す通り、餘り極端に氣を使ひ、一寸としてもうつりはせぬかと心配して、此が爲に知らず識らず腸胃を害せし結果である

二　哺乳

近頃中流以上の方々には、自己の身體に申分のないにも係はらず、兎角に牛乳等にて其子を育つるの傾がある、所で母乳を飲ましつゝある子供の體中には、兇病素が常に充實してあるが、異種の乳、又は其他の方法にて養はるゝ子供の體中には、之なきにはあらざれども、之を母乳を以て養ひし子供と比較する時は兇病素の働き甚だ微弱である、即ち自然的哺乳兒は完全なる兇病素を保有し、人工的哺乳兒には其性全く備はらないのである、されば妻君たるものにして、自體に申分なき方々は、止むを得ざるの外は、勉めて

自己の乳汁を以て、其兒を哺乳せなければならぬと心掛けられたいのである、

雲のうへ

内親王の御芳志

麻布御殿に在らせらるゝ、富美宮、泰宮兩内親王殿下には御幼少に渡らせられながらも、諸科の學術を嗜ませられ、殊に和歌の道を好ませ給ひ、大日本歌道奨勵會にて毎月發行する歌集の如きは、頗る御玩賞遊ばせらるゝ由に承りたるが、去る二十六日林御養育主任を以て、奨勵會々長鍋島侯爵に金一萬疋を下賜相成り、且つ「其會發行の歌集は、毎月献納の處、兩殿下に於ては時々御賞翫遊ばされ候に付、別紙目錄の通り下賜相成り候」との御沙汰書を達せられたりと、

山階宮兩殿下

山階宮同妃殿下の御平素に就き某近侍の談

ろ所を掲げまつらんに、殿下は御幼時より御好學に居らせられ、まして語學等も獨逸語、英語、佛語等皆御堪能に渡らせられます。從つて外國人との御交際も中々多く入らせられますものですから、外國人は宮様を交際家の日本の宮様と申上げて居るさうで御座います、其れに誠に恐れ多い事は殿下は至つて平民主義で何事も上下の隔てを遊ばさぬ事でございます、其れ故何んな下等者にでも、決して尊大な御容子を以て御對に成るなどの事があらせられず、御服装なども軍服の外は、決して立派な衣服を御誂製に成るなぞの事は全然あらせられませぬので、存じ上げぬものは、皇族の御方様とは氣付き奉らぬ位で入らせられます殿下は又御幼時から、規律と云ふ事を御守りに成ります事が御嚴重で御座いますので軍籍に御身を措かせられますやうに成つてからは少尉の御時代から、今日迄他の將校達と少しも御職務の上には變つた事なく、御從事遊ばしまして、宿直なぞも御缺かしに成つた事は殆ど有らせられませぬ、今度の戰爭にも、隨分永い間御從軍遊ばして入らつしやいましたが、此の前の日清戰爭の折なども、砲煙彈雨の間に御奮闘遊ばされ、又北清事變の時などは御召艦の吉野が坐礁致したので、艦長は非常に御心配申し上げせめては殿下丈けなりとも安全の地に御移し申上げたいと苦慮して、其旨をお附武官に申傳へました、すると、武官は直ちに御手廻りの物を取り片附けにかゝりましたを殿下は遮はして「イヤ其れには及ばぬ若し死ぬのなら皆一緒に死するが本望だ」と仰せられて、少しも御動きに成らなかつたので、艦中皆感泣いたしたと申すことで御座います、其れから今回の戰爭に當りましても、殿下は八雲艦に御坐乘遊ばしてお出に成りましたが、未だ艦が佐世保に居ります當時殿下は數次演習に赴かせられましたが或時御風邪に罹らせられて御養生中俄に實

彈射擊演習のため艦が出港する事に成りました、乃で軍醫長から、殿下に御病中故御上陸遊ばすやうにと言上致しましたすると殿下は自若と遊ばして「イヤこれしきの事に其れには及ばぬ」と仰せられて、推して御乘艦の儘御出港に成らせられたと申す事で御座いまして、之れも其筋の人々が感泣して私に話された事柄で御座います、妃殿下は人も知る如く、島津公爵の御姉君に渡らせられまして、御名を常子の方と申上げます、當宮家へ御入輿遊ばされましたのは、一昨々年の事で御座いますが、元來當宮家にては、先妃範子殿下が去る三十四年に若宮姫宮をお遺しに成つて、御薨去遊ばされましたので、其三方の御子樣のお爲めには、今の御息所は繼母樣に當つて居らせられますが妃殿下には非常にお優さしいお慈悲深い方で居らせられますので、此お子樣を眞の御親子よりも、御大切に遊ばしますのですから、自然お子樣もお懷きに成つて、他から見上げましても、少も隔てある間柄の樣には御座いませぬ、之丈は誠に有り難い事でございます。

軒の雫

百三歲の嫗

鶴は千年の齡を保ち龜は萬年の壽を成すといふが松の翠の千代かくる御世の惠みをさながらに、齡百を越えて尙ほ三歲といふ世にも目出度き嫗がある、所は麴町區有樂町二丁目三番地で、家には母子只二人で、いとも平和なる家庭を作つてゐる、嫗は石田セイとて、元は旗本の娘であつたが、緣あつて赤羽の鹽商石田某に嫁し、六人の兒をなしたが、不幸にも五人までを亡くし、僅に末子勘吉本年(五十四)を亡夫の忘れ形見と愛育し、味氣なき月日を送つて居つたが勘吉漸くもの心の附く頃より孝心深く、未だ浮世の風に慣れない少年の身を以て、早くも母を負ふて世に立つた樣は、誠に健氣であつた、勘吉は今帝國ホテルの食事掛を勤め、いと安らかに嫗の老餘を慰めて居るさて嫗は如何にして斯く健かに、かゝる高齡に達せしか、今親しく嫗に就て其の平生の養生法を聞くと、嫗は孝心なる勘吉の勸めに從ひ、常に肉食のみなして居る、殊に牛乳は至つて好物とて每日三四合は缺かさず飲み、氣に向いた時は六七合も飲むとのことである、入浴は殆んど缺かしたことがない、家は六疊の間一間を麗しく飾り炊事一切を嫗自らして居る、是れは勘吉は嫗に孝養をなすに急なる爲め、未だ獨身で居るので、其の留守中は嫗が一家を支配して居るのである、運動は老人としては炊事だけで十分なので、餘り屋外の運動はしない、最も驚くのは嫗の健康なので、眼はランプの光で縫物に差支なく、齒は悉く揃つて居る、唯僅かに昨年になつて二本脫けたゞけである、歩くのに杖などは用ゐることは固よりないとのことである、

●菊池大麓氏の貧民學校　本郷森川町四十七番地に狹少なる一の小學校あり、森川小學校と稱し、菊池大麓氏を校長に戴き、現在生徒は各級を通じて九十六名、敎授の方法は單級の組織にて、午前と午後に半數宛一敎室にて敎授しつゝあり、校中諸般の設備は區內貧民學校中其右に出るものなしと、



生活狀態の改良

伯爵 柳澤保惠

上流社會の狀態に關し、改良すべき點蓋し少からず、我華族社會に於て殊に改良すべきは、第一着として、生活狀態の改良此なり、生は信ず、華族生活狀態の改良は、家政改革の唯一の動機なりと、世人能く華族社會の家政改革を唱導す、しかも其多くは皮想の考察に止まり、其眞意を盡したるものと云ふべからず、而して世人華族生活狀態の改良に至りては割合に唱導せざるが如き觀あり、生の所謂華族生活狀態の改良とは、一言以て之を蔽へば、生活の有樣を最も簡易になすにあり、所謂貴族的なるを廢し、平民的に改むるにあり、生は華族を以て皆富者なりとは云はず、概して之を言へば、舊公卿華族の大部分及び舊小藩大名華族の過半は、比較上富者と云ふよりも、寧ろ貧者に近しと云ふを以て適當なりとす、此等の輩に就ては、家族生活狀態の簡易なるを認め得べし、否簡易は或は簡易ならんと雖、これとて多くは形式の簡易に止まり、實質の簡易は實行せらるゝもの甚少なし、又其中藩以上の大名華族の全體及び所謂新華族の過半、又舊公卿華族の一部分に至りては、相當の財產を有し、今日の本邦生活程度より觀察する時は、先づ富者と云ふべき地位を占め居る事なるが、それ等の輩殊に舊大藩の大名華族に至りては今日猶諸事に關して、形式に重きを措き、實質的の改良は、或は蓋し見ざるの觀あり、概言せば華族社會中相當の資產を有するものは、今日、尙家族生活狀態の改良甚だ不完全なるを見る生の歸朝するや、先づ世上富豪家或は我同族社會に於ける弊風を目擊し、其生活狀態の實に憂ふべきも

のあるを知りき、父子兄弟姉妹は、殊更に形式を貴び、虚禮を重んずる事甚しく、實際の相互親愛の感情よりも、虛禮虛法の中間に多く横はるの外觀を呈す朝は各自隨意の時に起き隨意の時に食し、隨意の時に飲み、隨意の時に遊び、隨意の物を食し、隨意の時に眠る、自由意志の發動として、或は其放任的行爲を贊するものあらん、成年者にありては、それ或は可ならん、然れども未成年者殊に十五歳未滿の輩にありて此の如き不規律の行爲は、精神教養上最も避けざるべからざるなり、俗語の所謂我儘なる行爲は、幼年者の教育上最も戒むべき事とす、



夫れ健全なる幼年者は、比較的富者に少くして、貧者に多きは隱れもなき事實なり、又華族社會に比較的不健全不健康なる多數の子女を見る、亦疑なき事實ならずや、一言以て盡せば、是等皆家庭的教養の不備なるに基く、否不備なるに非ず、却つて完全及充實に失したる極、形式の増加となり、教育をして其目的を達するに至らざらしむ、生は此點に留意し、歸朝後我家庭教育改良の第一着として、先づ附屬者の出來得べき丈けの無干渉主義を取り、女子の自然發育を養成すると共に、規律的行爲を重んぜしめ、學校に關する時間の制限等の外

は、常に閑暇を以て一堂の下に會し、自由に談話を交へしめ、又日曜日には同行して散歩を試み、時に戸外運動をなし、以て親族的關係を益々密ならしめんとせり、食事の如きは、從來形式に流れ、裝飾として無益なる食品さへ陳列せられ、滋養を專一とせずして體裁を專らとなすの恐れあり、此等は次第に改良し、飲食の主意の了解さるゝと共に、一定の時に一定の物を食さしめ以て嗜好の偏するを避けしめたり、又女兒の衣服の如き、世上の奢侈的風潮に伴はれて多少の感化を受けたりしが、此等も生の注意能く効を奏し、外出の際亦風采に意を留めさるに至りき、而して彼等平素の衣服は從前より木綿服に甘んじたる一事は、最も生の喜びて世人に吹聴せんと欲する者なり、白粉付用の如き亦戒めおきたれば、次第に効果を奏すべし、否現今殆んど白粉を用ふること實に罕になれり、要するに、スウイートホームの完全なるを期せしに外ならず、右の結果として今日既に現はれたるものを記さば、

第一　徒食の全廢せられたること、
第二　食物嗜好の普通的となりし事、
第三　家族團欒の愉快を感せし事、
第四　附屬者に依賴せる習慣の消滅せし事、
第五　戸外運動を好むに至りたる事、
第六　衣服に注意せざるに至りし事、

等は其重なる好成績と謂ふべし、

世人多く圓滿なる家庭、及家庭の快樂なるものを說く、然れども同族社會皆スウイトホームを以て滿たさるゝや否、生蓋し疑なき能はず、

家庭の快樂の缺乏は、家族間の不和を生じ、家族の不和は其の極父子兄弟姉妹をして其意を内に向けずして外に向けしむ、一家にして已に一家に非ず、生は此の如き形跡の我華族社會に皆無ならざるを慨歎する者の一人なり、生は此等を改革し、以て華族の體面を維持せんことを期す、

◎鍋島侯爵夫人近詠

大御代のひかりもそひて富士の山いよ〳〵高く見る年哉

下女下男に對する注意

衆議院副議長
麻布中學校々長　江原素六

世の中の進歩につれて、交際の有樣なども種々に換るもので有まして、たとへば海軍でも、陸軍でも、外國人に軍艦または兵營などを見せますには、艦内又は兵舍の清潔にして、萬事秩序正しく整理してをることを矜り顔に見せ、またその參觀人もよくそれらの邊に注目して、或は之を賞賛し、或は自己の參考にいたすので有ます、これと同じく西洋にては、主婦即ち妻君方の交際中にも、どうか押入戸棚の拜見を願ひたいと申すことが有ます、主婦は答へて、い丶へ私共未熟で御座いまして、甚だ面目が御ざいませんと申しながら案内するもので有ます、さて其の有樣を申しますれば、夜具を始め整然とた丶みて積み重ね、その他洗濯したるものとせざるもの丶始末など、少しも亂雜なることなく、能く片付いてをり、臺所の戸棚など注意よく行屆きをりまして、一日に數回入用の器具をば屈がまず伸びずして出し入れする所に排列して、日々幾度も入用でなき品は、或は少しく膝を屈め、若しくは脊を伸して、取り得る所へ載せおくなど、暗夜手探りでも器物を出し得る如くにいたし、流し下の清潔、薪炭の置場等甚だよく片付きてをることなどを見せることが、一の交際になつてをるので有ります、

今日我等の家屋は、多く亂雜で有まして、なか〱人に見せる所では有ませぬ、若し人に見せられ得るやうに片付てをりましたなら、甚だ愉快で有ます、少しく極端なる言語で有ますが、英國の諺に婦人の化學は薪炭を節して煮燒を上手にすることを主とし婦人の地理學は家内の隅々までを知るを始めとすべし、とは多少の主意あることゝ存じます、かゝる家内の整理につき、下男下女に對する主婦の心得を要するので有ます、

△第一撰擇　男子が得ます所の金錢は、妻君の手を經て外に出づるので有ますが、更に下男下女の手

を經へますもので有ます、故に下男下女の人物如何によりては、經濟上に大なる影響で有ます、尤も大なるものは、子供との關係であります、抑主人は用務のため不在勝であり、また妻君とても或は交際に、又は家事の用務に多くの時を要し、また敎育ある若き婦人のうちには、近傍學校の敎師となり、又は郵便電信局の技手となりて通勤することもありませうこれらの家庭に於ては、子供と一番長き時間を共にするは奉公人で有ます、子供は模倣の盛なるもので有ます、故にその多く親しむ所のものに、深く化するものであります、故に下男下女の撰擇は甚だ大問題で有ます、

▽第二使ひ方　　如何によく撰擇いたしましても、使ひ方があしければ、或は去りて出で丶行き、或は不平を懷きて充分に用をなしませぬことは皆さんの御實驗あること丶存じます、

▽第三取締　　金錢物品ともに適宜の取締をなし仕舞ふべきものは、常に之を仕舞ひ、錠を卸す所は怠らず錠を卸すなど、能く之を實行することが肝要であります、然らずして之を放慢にしておいて、たま〳〵多少の金錢物品の紛失を生ずるや、囂々喧々するごときは、徒らに感情を害するのみならず、時として無實の嫌疑を人に負はすることさへありまして主婦の品位を卑下するやうになるので有ます、

▽第四信任　　一寸の蟲にも五分の魂といふことが有ますが、凡そ人間といふものは賢愚の差別なく必ず有してをるものは名譽心で有ます、信任は名譽の生ずる所で有ます、故に人を使ふに給料の高きと、食料の饒なるを以て充分なりとは申しませぬ、これは犬馬を養ふと同じことで有ます、人を待つには信任と名譽と自由を奪ふ事は、甚だ間違であります、信任を與へますれば彼は名譽を感じます、名譽を感じますれば責任を重んずる樣になります、責任を重んずる樣になりますと同時に、更に必用なることは多少の自由を彼れに與ふることで有ます、凡百微細の用務を一々指揮命令することなく、彼れの働き方

に自由を與へますれば、銘々工夫して働きの捷徑を考へて、事務を敏活になし得るやうに進歩するもので有ます、然るに今日の妻君方は、餘り小さきことまで一々指圖いたします故、下男下女もその煩に堪へずして、且つ責任を盡すことが出來ませぬ、故に幾人人をつかふも家事の整理はつかぬもので有ます

▽第五下男下女と子供との關係　子供が僕婢を打擲したり、罵つたりいたしますと、僕婢はいかにも、喜んで打擲又は罵りを受けてをりますのみならず、その親たちが甚だ面白がつて、今一つ打つてやれなどゝ申すと、下男下女はおゝ痛い／＼などゝ、子供の打つのを眞實喜んでをる如くいたします、子供は無邪氣に之を打ちますが、直ちに習慣となりまして子供は下男下女は自分の恣心を滿たすの器械の如くに考へまして、種々なる自儘の擧動をなします、下男下女ともに主人の前には、その子の爲に柔順に忍耐いたしてをりますが、一旦主人の不在となりますや僕婢は直ちに變じて虛主となりまして、子供を壓伏もするもので有ります、

子供が子守の脊におつて己の往かんとする方へ往くことが出來ぬと、だゝを申しますると、子守は遠慮なく尻をつねります、或は丁稚などが主人のをらざるときは、子供には殘酷な、鐵拳を與まして、子供を震慄せしめます、それゆゑ金滿家の家庭に育ちました青年は、尊者長者の前には頗る慇懃且優美で有りまして、流石に金滿家の子弟は自づからちがつた者だと讃美いたしますが、その尊者長者の前に丁重なる青年が尊者長者不在のとき、弱きもの、卑きものを侮辱し毆打することは、甚しいので有ます、全く曾て僕婢が己になしたることを反覆するので有ます、學校などでストライキの張本人は、かゝる青年が弱きものに向ひ、同意せねば鐵拳などいふ暴力に壓せらるゝ結果が多いので有ます、故にたとひ僕婢といへども、徒らに毆打し、嘲罵することをせざる樣に注意することは、己の子弟後來の利益であります、概して金滿家の青年は自儘にして、衆と共にす

るの謹徳を缺きをる傾がある様であります、

▽第六下男下女に對する輕蔑の行爲を愼む事　有ります、抑僕婢なるものは、家政上全く必用があつて傭ふもので有りまして、固よりかれの飢渇を憐んで養つてやるのではありませぬ、然るに動もすると、彼れ貧人なり、家に在つて生活することが出來ぬ故に食ふために、奉公に來たのである故に、之をつかふてやるのだとのみ思ふ人もあります、去りながら奉公人なるものは必用あつて傭ふものにして、恤れまんとして養ふものではありませぬ、然らばその給料の如きも慈善的惠恤の金ではなく、大工左官の手間賃の如く、約束上その勞に酬ゆる所のもので有ます故に我も人、彼も人でありますれば、自づから適當に人を待つの方を失はざる様注意せねばなりませぬ第一は僕婢を待つに慈悲の情を有することで有ますさすれば子供は直ちに見習うて僕婢にやさしくいたします、子供の僕婢にやさしきは、特別に優美を現はすもので有まして、僕婢も眞實に子供を尊敬いたしまして、子供生涯の幸福の基となるので有ます、第二僕婢に對するに柔和なる言葉を用ゐ、屢々その勞をいたはり、其功を賞して、かれの心を樂しましむることで有ます、元來日本の家庭には、尊者が賤者に對するに、餘り傲慢すぎたる様であります、西洋などでは、妻君が茶を持ちまゐりましても、夫は妻君に對して極く輕くサンクユーと謝する意を表はしますが、日本では夫が妻に對し、妻が僕婢に對しその自己に對する好意的行爲につきて謝するといふ意が甚だ少くあります、若しも子供が僕婢に對し柔和の言語を用ひ、時として慰勞し、賞賛し、謝する如きの行爲をいたしましたならば、實に人品を髙くするものであります、

▽第七子供の爲に徒に僕婢を使用せしめぬ事　子供は複雑なる用務を有する者では有ませぬ、さすれば出來得る限り子供自身に、自己の用務を辨ずる様にせねばなりませぬ、今日中以上の子供は甚だ柔弱に養育する様で有ます、十一二歳にもなる子女など

が、もう寐るよ、といふと、それ寐卷、それ帶、それ枕と、足袋の紐まで解いてやり、而して翌朝起るときも、もうおきるよ、といふと、同じく何から何まで悉く奉公人の手を煩はし、夫より面を洗ふことより、食事に至り、學校へ持參すべきものなど、その手のかゝること夥しく、幾人奉公人が有つてもなか〳〵足りぬといふ有樣で有ます、かゝる家庭に成長いたしましたものは、長官となり、社長となり、技師となりますと、何もかも人のみを使ひまして、自分では何一つ敏活に處置することはできませぬ、故に子供には出來る丈け自分の身につくことは、自から辨じさせ、尙ほ年の長ずるに隨つてたゞに自分のものゝみならず、父母長者の夜具をも片付けさせ、座敷及び庭園の掃除までも、分擔させることが甚だ宜敷あります、

此の如く、家內一同老壯とも手を分ちて働きますれば、家內の整理も早くして、其の得る所の利益は、實に莫大でありませう、而してかゝる習慣ある青年が、他日官吏となり、商人となるも、必らず自から敏活に事務を處理することを得るでありませう、而して更に注意すべきことは、下男下女ともに一日中に多少自由の時間を與へて、自己の用務をなさしめ或は主從團座して、興味ある浮世の談話をなして、主從の親みをなし、また感化解脫の助けとしまして下男下女の智德を進むることを、心掛けるやうにいたしたいもので有ます、先年佛蘭西の議會では、國家及び公私の傭人には、皆各に一週一日の休暇を與へしめ、之を犯すものは罰金五十法に處し、再犯以上に渉るものは百法を課することに決したといふ事さへ有ります、

▽第八奉公人をして忿怒せしめざること　貝原益軒先生は甚だ牡丹を愛されました、その塾生が先生の留守中隣家の青年と角觝をとりまして、先生の最も愛する牡丹の樹を折りました、塾生は非常に狼狽いたしまして、漸く隣家の主人をたのんで詫びて貰ひましたら、先生は笑ひてその人に向ひ、余が牡丹

を愛するは樂しまんが爲なり、怒らんが爲にあらずと申されました、眞に味ふべきことで有ます、今日一家の主婦たるもの、或ひは朋友故舊を招きて相樂まんといたし、または來客抔を欵待せんとして、僕夫を怒らせ、下婢を怒らせるものが有ます、朋友と樂まんとして、家眷を悲ましむるの愚をなすもの甚だ少なからざる樣で有ます、

柳原伯爵の家庭

中川愛氷

本誌の讀者諸孃は、柳原伯爵が『妻となるに就て』また『家庭に於ける文藝趣味』の二高說に於て、且つ本號口繪の一頁を見て、同伯爵家庭を想像し得らるゝであらう、否この二高話と、四小照は、伯の家庭を語盡して居るものであつて、わが云ふところのものは、蛇足的に伯の家庭として、一項を作つたものたるに過ぎない、

予の見たる同家は、室內は何れも美裝され、庭園も廣くして雅致に富んで居る、これに當世貴紳のモデルとも稱せらるゝ伯が主人となつて、貴族邸たるに寸分の缺くる所もないが、伯はすべて平民的方針をとられて、夜店に書籍をひやかして居らるゝ人の、誰かと見れば伯であつたといふ事などもある、

上の令孃は、昨年四月學齡に達せられたので、小學校へ入學せられたが、同家あたりでは定めて華族女學校であらうと誰しも思はるゝであらうが、ツイ邸を去る四五丁ほどの所の小學校へ、徒步で通學されて居らるゝ、それは華族女學校が惡いといふのではない、路が遠いからである、路が遠いと自然車に乘せて通はせる、往々車上で居眠りして、風邪の種をつくつて居るのを見受ける、步かぬから運動が出來ぬ、步かぬ迄も遠いと、朝も早くから起なければならぬから時には缺席をする、そこで身體の爲、學問の爲に近い學校へ通はされることになつて居る、併し一得一失で、伯も初めは、

言葉つかひから、擧動からが、そのあたりの學校では野卑になりはすまいかと心配せられたそうであるが、存外その方に於ても申分がないので、よいことをしたと今では大に喜んで居らるゝのである、

その喜ばれた一話を取次がんに、今年の元旦學校で兩陛下の尊影を拜し奉るといふので、令孃が八時すぎに邸を出られた、その時は元日の事ではあり、尊影を拜するのであるから紋付を着せて出さうとせられたのであつた、然る所令孃はこんな美しい衣服を着ては眼立つからとて、不斷着で出掛けられたとの事である、これは中以下の人が多い所から、美服を纏ふを喜ばれさうなものであらうが、却てそれを目に立つとして捨てられたのは、不用意の間に自發的に、節儉の德性を涵養されたものであつて、多くの華族はこの味を知つて居らるゝであらうか、そこで學友のうちには、いろ〳〵の身分の人もあるが、それを邸へ連れて歸られたり、又出掛けられたり、平等に交際をせられて、素よりその間に注意を屆かして居らるゝ事であらうが、まことにそれで好結果であるとのことである、次の令孃は今年よりこの例に習うて、小學校時代は、矢張り同じく手近の學校へ通はされるそうである、

衣服は或場合の外は、あまり構はれぬ方で、一月であるから美服を着けるの、何處へ伺う着飾つて行かねばならぬなどいふことをせられぬ、又食物も朝は一家族皆パンで、晝と夕は時節のものを甘く食うと云ふにとゞめて、それ以上贅澤はせられぬ、又間食は餡のものを用ゐられずして、日に一度午後三時頃多くは西洋菓子を食せられることになつて居る、起臥時間は令孃がたは學校の始業前一時間半位に夜は七時半、伯は大抵七時半に床を出られて夜は十一時位とのこと、令夫人も勿論同樣である、

旅行はその時の都合次第であるが、伯は七月中旬より避暑に行かるゝが例になつて、それには海邊よりは山を撰ばれる、昨年は鹽原へ行かれたさうであるが、本年は何地であるか、

そこで伯が家庭に於ける理想を聞くに、伯は今の邸宅は親讓りで、此家此庭を忽ち何うするといふ事も出來ぬが、衣食住は成るべく簡單にし、出來得る丈け文明の利器を用うるやうにして、召使などの數を減じ、家を狹くして勝手をよくする方が、住よくて却つて愉快を感ずるであらうと思ふ、段々すべての物價が高くなる、また國運が發展するに隨つて、各自の負擔が重くなる故、廣い家に多くの人を使ふことはむつかしくなる、といふて俄に今の家屋を西洋流に改造しやうといふことも出來ぬが追々理想に近づくやうにしたい、全體庭なども、一人で廣い庭を占領するなどはよくないことで、狹められる限りは狹め、電車等の交通機關によつて公園にでも行くやうにし、家屋も趣味から云へば日本間が二間か三間かあればよい、取次も小女位で澤山で用もない大きな男に袴を穿かして置く必要もあるまいと思ふ、すべて成るべく下らぬ手數と費用を省きたいものである、と語られたのであつた、

母親の責任

石川殘月

舊幕府時代頃の敎育または德義上のことは素より今日の社會にそのまゝ應用するを得ざるは勿論なれど社會の百事なにごとも、西洋化せられんとする今日に於て、德川時代の『敎育上の母の責任』に關する實話をものして、明治今代の敎育ある母親方へ箴となすも亦無用の業にあらざる可し、

予が古鄕は仙臺にて、家は代々微祿の小臣なれど、予が祖父なる人は、多少文筆の能もありし人にて、家に傳はれる遺稿などもありて、特に兒女の敎育に深く心を用ひられしと聞く、されば老年に至りて、孫共の敎育につき予が母をして心を用ゐしむる事また甚だ嚴しく、予が母親は予を育る際に、敎育上の責任を問はれて、實家に還されし事一次、將に還されんとしたる事一次なりしと云ふ、

祖父は老年に至りて殊の外盆栽を愛でられ、邸内に

牡丹の花壇を作り、紅白の蕾少しく其色を見せたる頃、當年に五歳のわんぱく盛りの予は、花壇の靑竹の埒の下より入りて、祖父の丹精せる牡丹の蕾を殘り少なに捥ぎ取り、其蕾を以て遊び居たりといふ、此事を知りたる予が父母の驚きはいかばかりなりけん、然る所に祖父が外より歸り來りて、此始末を聞き予が頭を撫でながら一言二言なに事か言はれ、居間に母親を招きて、左の事を申渡されたり、『兒女をして過失なからしめ、之を敎育るは特に母親の責任なり、人の母たる者は終日終夜深く此事のみを念頭に置くべきは、かねても言ふ所なり、孫に牡丹の蕾を取らしめたるは、汝の不屆にて、斯る事にさへ敎育の行き屆かざる者は、一家の家督たる者を敎育するの見込もなければ直に實家に歸るべし』と、予が母親は涙を以て、其不行屆をわび僅に事なきを得たりしといふ、

又或時、予は母親に連れられて、廣瀨川といへる河の畔に遊びし事ありしと云ふ其時、予は過つて川の流れにはまり、急流に押流されんとしたるを母の懸命の急助によりて救はれたり、此事端なくも祖父の耳に入りしかば、祖父は大に憤りて近く母親を招き寄せ、『兒女を育つる責ある母たる者に、過失にも事こそあれ、親ら附添へる其兒が流れに陷るに氣がつかざる如きは不行屆のかぎりなり、行末の事も思束なければ、直に實家に還る可し』と斯くて母親は人を附けて實家へかへされしも、後に人をして詫をなして、歸家を許されしと云ふ、

是れ、予が母親が『汝をそだてるに此のやうな心配をしたり』とて度々話されし事柄なりき、舊幕府時代の母親は、其兒女を敎育するに斯の如き責任を負はせられしなり、これ素より、兒女の過失に關する責任に過ぎざれば、さまで注意するに足らざる程の事なれど、責任と云ふ意味は昔時も今も異なるなし、若し今日の母親たる者が、其兒女の品性を養ふに當りて、同じく這般の責任を感せずんば、其心がけ或は舊幕時代の女子にだも若かざるの憾みなしとせず



米國の女大學生氣質

伯爵　柳原義光

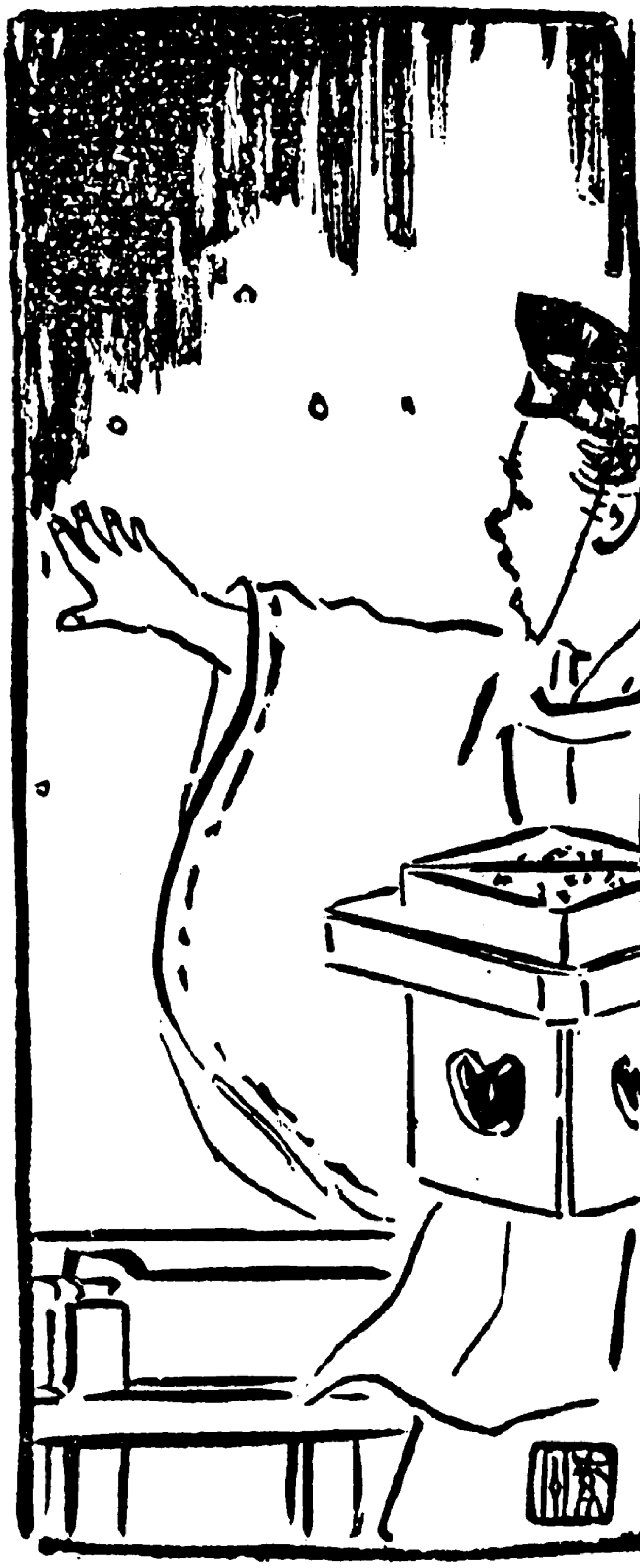
先年歐米漫遊の時、米國の費府に程近き、プリンモアの女子大學を觀るの機會を得たが、同校は米國に於ても、設備教育ともに見るべき、有數の女子大學である、(嘗て津田梅子女史も留學せられたとの事)されば我國の教育家で、此地方に來たものは、決して素通りすることが出來ぬが例になつて居る、自分が紐育から道連になつた三井銀行員の某氏の知己でマガボーイといふ紐育の銀行員が、此女子大學に居るミスハーベンと云ふ女學生とは豫て許婚になつて居るので・面會に行く序であるから　我々も同行して、學校を參觀しては何うかといふのが話の初まりである、

出掛けたのは二月の十五日で、嚴しく寒い日であつた、朝の間は雨が降つて、その寒氣は一通りでなかつたが、雨は降る側から凍る、野も山も一面の銀世界水晶界となつた所で、雨は止んで日の光がその銀世界や水晶界を薄紅に彩るといふ有樣で、折から甚だ快感を覺えつゝ學校を訪ねた、

この女子大學の女學生は、皆校内に寄宿して居るので、その寄宿舍は幾舍にも小棟が分れて、一つの寄宿舍には二三十人位宛、家族的生活をして居るのである、マカボーイが刺を通ずると、程なくミスハーベン孃が出て來て、一同を應接所に導くと、マカボーイは孃に我々を紹介して、その厚意で學校を一通り觀せて呉れた、それから茶でもさし上げますから私の部屋へお出下さいと云ふことになつた、併し此やうに男女の交際は許してあるが、その女學生の部屋へは寮監の許可がなくては猥りに通されぬので

ミスハーペンは寮監の許可を得て、そして自分の部屋へ三人を案内した、

部屋の廣さは十四、五疊位でもあらう、茶などを入れて待遇して居ると、日本の紳士が來たといふので他の女學生共は物稀らしさうに二三十人も此處へやつて來た、これがどうでせう、日本のお孃樣などであつたならば、自分の許婚の良人が尋ねて來たのに、初めて會つた男の客があつたり、多勢の友達が傍に居たならは、含羞んで碌々口も利け得ないでせうが、流石は男女の交際の開けて居る土地柄丈けに、ミスハーペンは一向平氣でヤカポーイと睦まじく頻りに話をして居る、また他の友達の女學生も、之を見て揶揄するものもなければ、嫉妬するものもなく、互に打興じて話し合ひ、多勢詰めかけたことゆゑ、椅子が足りぬので、床の上に座るものもあつたりして、我々に向ひ、日本の事など尋ねて無邪氣に話して居る、斯うして一時頃から三時頃までも遊んで居つたのである、が、キャンデーでも御馳走するから、まあ悠り話しておいでなさいと、ミスハーペンは世辭よく引留める、しかし此の時に困つたのは小便に行きたくなつたけれど、彼の國の習慣として、婦人に向つて小便所をきくなどいふのは甚だ失禮に當るので、何處にあるか聞くこともならず、これには少



なからぬ當惑したが、仕方なく停車場の便所にでも行つて來やうと、ミスハーペンには鳥渡買物をして來るからと斷つて座を立つと、先でもそれと以心傳心に察したと見えて、そんならお早く行つておいでなさいと云ふので、三人は停車場の便所まで駆付けたが、停車場迄は八丁もあるので、それこそ小便八丁などいふ洒落どころではない、實に苦しい思ひであつた、それからまた引返して晩餐の御馳走になつて歸つたが、マカポーイは二十三歳、ミスハーペンは十八ださうで、六月頃には卒業して愈々結婚するのであるさうな、二人の樂しさはどんなであらうかそれで必らず毎週一回は紐育から此處まで面會に來るので、直行滊車に乘つても三時間半はかゝるのである、寄宿舍で別れる時にも、ハーペン孃は我々には握手をしたが、マカポーイは接吻をして別れた、接吻といつても決して猥褻なものではないので、つまり愛情の濃やかなるを表するのである、そうして歸る途次も、マカポーイは是迄は獨り住みであつたけれども、六月には結婚して家を持たねばならぬゆゑ、今より經費を節約して、貯蓄の準備をして置かねばならぬなどゝ語り、近き將來に新しき家庭を作ることの、いかばかり愉快に待たれつゝあるか、喜びの情は言外にほの見えて、寧ろ我々を羨望に堪へざらしむるのであつた、兎も角も彼國の男女交際振が、是等の事でもその一斑は分明ると思ふ（文責在記者）

衣服と皮膚

理學博士　坪井正五郎

皆様御承知の通り、衣服と言ひますものは、身體を蔽ふ所のものであつて、我日本の國に於ても、又は隣國の支那、朝鮮或は西洋諸國等に於きましても顔と手の先きは出して居るけれども、跡は悉く蔽ふて居る、衣服と云ふものは何であるかと廣く知らない人に聞きますると、身體を蔽うものである、又人

ケ間敷い理屈を言ふ人は、衣服と云ふものは、寒さ暑さを凌げば宜いものだ、其他のものは奢りである美しい物を着ると云ふことは、是は餘計な話である斯様な事を言ふ人も、隨分あるものであります、果して衣服と云ふものは、身體を蔽う爲のものである又寒暑を防ぐ爲のものである、それだけが目的であるならば、唯日本の着物、支那朝鮮の着物と云ふことだけでは狹いのでありまして、一體人間と着物と云ふものとは、どう云ふ關係を有つて居るか、又着物と云ふものはどう云ふ事から起つたか、それを知りますると、我日本の着物と云ふものは、其中のどういふ役を勤めて居る、重に何に用ゐられて居るけれども、他にもどう云ふ用ゐがある、是等の事も悟れるのであります、能く人の言ひます衣食住、是は人間に缺くべからざるものである抔と云ふことは誤であると云ふことも、直ぐに察することも出來るのであります、裁縫學校抔でも、今迄は或は日本の着物、又は西洋の着物に限つて敎へて居りませうし、又御學びでありませうけれども、それは普通に人が學び、人に敎へるにはそれでも宜いのでありますが尙廣く考へて見ると、今日では日本は世界の日本と云ふことを能く人が言つて居る、是は啻に日本人獨りが高慢して、世界に對して日本の地位を認めて貰ふと云ふやうに言つて居る許りでなく、事實に於て世界を相手にして居るやうなことになつたのであります、して見ますると日本及び日本近傍の事に就ては、當然の話、苟も一つの裁縫學校或は衣服に付ての研究を爲す場所では、平生用は左程になくつても即ち人間の着物はどう云ふ役を爲すものであるか、諸人種に付てどんな服裝があるものであるかと云ふことは調べて置いて然るべきものと考へる、

そこで日本支那朝鮮の衣服を見ると、顏の部分、手の部分を出す外、悉く匿して居るのでありますが、是れだけ匿せば跡匿す所は無いかと云ふと、決してさうで無い、國に依つてはもつと匿す所があるのであります、肌を出すと失禮であると云ふのでありま

すけれども、若し肌を出すことが失禮であるならば顔も手も肌でありますから、顔や手を出して居るのは失禮である、けれども是は習慣で、顔ならば宜い手ならば宜いと云ふだけの話で、肌を出すのは惡いと云ふのは、平生匿すべき所を出すのが惡いと云ふので、日本や支那朝鮮に於ては顔や手は出しても差支ないと認められて居る、決して天然自然に肌を出してはならぬと極まつて居るのでは無い、全く其國々の習慣である、それ故に顔を出すことを即ち失禮と見て居る處もあれば、又手も足も出して居ることを失禮と見て居る處も隨分ある、日本抔では以前からの習慣は、手足を出すことは格別失禮として居らなかつたのでありますが、歐羅巴各國と交るやうになつてからは、足袋を穿かないのでさへ失禮と思ふ樣になつたのであります、公の場所に於ては、足も匿すのみならず、顔も唯だ目だけを出して居りますからして、往來で人に逢うても、唯だ目が光つて居るだけで、誰であるか一向分らない格別に脊が高い、とか低いとか云ふものは、其點で見別けは付きますけれども、左もなければ一向分らない、斯樣な處の人が日本や、支那朝鮮の人を見ました時には、鼻も口も耳も皆剝出しにして居るから、如何にも無作法であるやうに見える、斯の如く一方に於ては、身體を悉く匿す處がありますが、又他方に於て即ち日本や支那朝鮮の如く、顔や手足を出すのみでなく、外の部分を出しても、格別恥としてない處もある、或は亞非利加の內地であるとか、又南の方の島々に行くと、腋の下の所に布を捲いて、上の肩から先きは現はして居ると云ふ處もある、是等の處に於ては、それだけを匿して置けば、それで充分禮義を滿たして居ると思つて居る、又暹羅マレー地方の島々に行くと、下半身だけは布で以つて蔽うて居りますが、上の方は出して居る、半分裸體で居るのであります是は其土地の風俗でありますから、如何なる高貴の人と雖も、斯の如き風をして居る、暹羅に於ては、近頃佛蘭西の風が段々流行つて來て、上半分丈は佛

蘭西風になつて、婦人も例の肩に瘤のあるやうな着物を被て居りますが、下半身は布で捲付けて居る、暹羅マレー邊りの風俗は、均しく風呂敷のやうなものを捲いて居りますが、暹羅に於ては捲いた風呂敷の一部分を取つて、足の間から潜らせて挾んで置く態々仕立たので無いけれども、自から股引になつて形は袴のやうな形を成して居る、之に反して瓜哇ボルチオ抔に於ては、下半身だけも匿さないで、僅かに腰の周りに布を纏つたに過ぎない、是も必ずしも布とは限らない、或は莚とか木の葉とか、草の葉とかを纏ふ處もあります、又は丁度注連のやうな物を腰の周りに附けて居る、又太甚しきは濠太利、極く南の端の方の地方でありますが、其地方に於てはそれさへもしない、即ち子供が生れたならば、其儘の有様で、唯身體が大きくなると云ふ處さへもあります、一方の極端を言ふと、頭から布を被つて仕舞う處もあり、又一方の極端を言ふと、何も身に着けない處もあります、斯樣なものを比較して、何處を境として之を衣服と名づけ、何處を境として之を衣服と名づけないと云ふ譯には行かない、唯衣服は肌を蔽うものと言ふけれども、どれだけの部分を蔽へば衣服と言へるか、一尺を蔽へば着物か、五寸丈け蔽うのは着物でないか、其區別は分らない、世界諸地方の物を見ると、僅かに腰の周りを蔽うものから、又頭から足の先き迄蔽うものでも、衣服の部類にしなければならぬ、或處では澤山の物を着ける、又或處では少しの物を着ける、其多い少い、又丈が長い短いの別はあるけれども、皆之を衣服と言はなければならぬ、斯樣に考へて見ると、衣服と云ふものは如何なる用をして居るかと云ふと、決して多くの人が常に考へて居るやうに、寒さ暑さを凌ぐ爲ばかりのものではない、又肌を匿すのが禮であると言ふけれども、一旦肌を蔽うことが出來た後に於て、之を取るのは無禮であるが、元來衣服を着けない處に於ては、着物を着けないことが決して無禮ではない、それは習慣と見なければならぬ、發達した國に於て

美しき話の種

めでたき話の種

注意すべき事

丙午の三賢婦

丙午の生れにて最も世に知られたるは、曰く長谷伯爵夫人淳子、曰く前田子爵夫人祉子、曰く堤子爵夫人賢子、曰く加藤弘之氏夫人鈴子、曰く石黒忠悳氏夫人くか子、曰く第八師團長中將立見尚文氏夫人美濃子等にして、今茲に三賢婦と稱するは、加藤夫人、石黒夫人、立見夫人を指すなり、花に顧み月に顧みて、春秋四十年の往時に遡り、三賢婦が各々其夫に嫁ぎし頃を想へば、加藤博士、石黒軍醫總監及び立見中將は、皆是布衣の白面の一生、書劍飄然として江湖に放浪し一日として安處せず赤貧洗ふが如き中に、唯だ一つ覺束なくも前途微けき光明を頼みて、今の世の書生輩が夢にも知る能はざる苦惱を嘗めつゝ、今日の位置にまで進みしにて、其間に於ける夫人の苦心經營は、殆ど言語に絶するものあり、委しく記しなば、好個一篇の立志篇、所謂庇髮黨をして赧然として愧死せしむべき物ある也、加藤夫人鈴子は江戸の人、市川兼恭氏の女にして石黒夫人くか子は新潟の人、安達甚一郎の女なり、立見夫人美濃子は桑名の藩士、立見作十郎氏の長女にて、夫中將は實に其入婿たるなり、加藤夫人は品格高き瀟洒たる上流的貴夫人にて、石黒夫人は更に修飾に構はず働く一方の賢夫人にて、一寸の買物にも下婢の手を借ることをなさず、六十路に餘る今日にも霜を踏み月を戴きつゝ徒歩して神樂坂あたりへ大松閣にさへ行きたまふは珍らしき事にあらず、而して立見中將夫人に至りては、夫中將が他の二氏に比較して、雲泥も只ならぬ苦勞をなし、維新の役には賊軍に加はりし爲め、六十餘州身を置く所なきまでに落魄し、轗軻數奇久しく逆境に沈淪せしかば、夫人の痛心は一方ならず、かくて明治十年西南の變起るに至り、中將風雲に乘じて初めて陸軍に出仕せり、舊幕の片割賊軍の敗將たるの故を以て、常に同僚に侮蔑され、身邊の冷笑殆んど居るに堪へず、されば昇進思ふに委せねば、中將快々として樂ます、或時は憤慨の餘自ら決せんとせし事さへもありけるを、夫人獨り暖き同情を以て中將を慰め其苦つゝ、遂に今日の大成を得たるにて、心大方ならざりし、實に立見夫人の如きは日本武士の模範的主婦にして其嚴格正肅なること古賢婦の俤あり、子女教育の如き最も夫人の意を用ふる所なりといふ、

新網の孝行夫婦

濱風荒ぶ芝浦の汽車工場の煤煙棟割長屋の一軒に、先頃掃溜に鶴が下りた樣な孝子こそ其處に現はれたり、茲に同町北八番地の渡邊銀吉(五十五)といふは、十餘年前病歿りし女房きくの中に市太郎(廿九)妻およし(廿四)銀次郎(二十)等あり、日々蛎を取つて鰥身とし微に其の日の煙を立て居たる

が、去る三十年の頃より、左の股に痛みを生じ、買藥の効なく、去る人の世話にて慈惠醫院に施療を受け、終に左足を切斷して全癒したるが、此の間市太郎は折から冬の最中なるが、寒垢離取りて父の病氣の平癒を祈り、肌は裂けて血を流すまでなりし、其の誠心の神を動かしたるなるべしと、斯くて兼吉出院後は圓に上るに違て行くといふ有樣に、其の不自由いふばかりなきを、市太郎夙く起て家事を働き、稼業より歸つて後は、傍を去らず介抱し、心優しく孝養を盡す中、世話する人ありて鐵道作業局の製罐工となりたれば、生計も稍、豐になりたるが、己が身には一錢も着けず、餘れる金あれば、父の衣服家具調度など買ひ整へ、九尺二間のながら、其の住居も手綺麗に、一向老を慰め居るを、誰れ一人譽めぬ人なかりしが、昨年召集されて出征したれば、兼吉は俄かに稼人を失ひて驚きしかど、嫁のおよしも子に似たる孝行者にて甲斐々々しく家計を處理し、日々他人の衣類の洗張りし、其賃錢と兵事義會より受る金とにて、兎も角も生活を立て足らぬは、惜氣なく我が衣類頭の物を質に入れ、只管、良人の凱旋を待ち居るとぞ、

目出たき一族

別格官幣大社靖國神社禰宜從七位[illegible]の兄弟は、男女合して七人あり、長兄山本金木八十一歳、長姉忠内光世七十九歳、次姉日置周七十五歳、次兄中村東海七十二歳、賀茂水穗六十七歳、妹賀茂波知六十五歳、末弟菅沼兼次郎六十二歳にして、是を合すれば五百一歳の多きに達し、又山本金木氏は子孫五十二名あり、同氏の山本家に養子となりてより、今年に至る六十八年間に只一人の死亡者を出したるのみなりと、猶山本氏の子孫を初め、七八の兄弟の子孫を合算すれば、實に百九十二人の多きに達するとぞ、目出度き一族になん、

目出度き一家

此に芽出度一家こそあれ、所は攝津國有馬郡三田町の内屋敷町にて、長兄は村木守武と云ひ、本年八十二歳、妻ゆきは八十歳、長男齊は六十八歳、其妻りつは六十一歳、次男謙吉三十九歳、妻ゆう三十四歳にて、孫四人あり、次兄は西村源六郎と云ひて七十二歳、妻とき六十九歳、其長男兵之助四十二歳、其妻いく三十七歳、次男正人三十三歳・妻たか廿八歳にて、孫十四人あり、最後は今村良治と云ひ、本年六十九歳、妻ふき六十歳、長男老之助四十三歳、妻ちよう三十六歳、次男勇之助三十六歳、妻千代三十六歳等、三兄弟の全家何れも健全に此新春を迎へたる事にて、同地方にては稀有の芽出度兄弟と持囃し居れりといふ、

婦人内職者の注意

開戰以來生計の不足と否とを問はず、婦人の内職といふもの大に行はれ、平和克復後も衰へず、隨つて綺麗なる自宅内職ありなど、看板を掲げてレース編物花簪等の内職を授る者増加したり、然るに其多くの中には、保證金或は束修を前納せしめ、而も其製品に就ては、未だ出來榮惡しとて工賃を拂はず、甚しきは工賃を値切るは扨置き皆無此を仕拂はざるもあり大に注意すべし

は、着物と云ふものは、寒さ暑さの凌ぎ、或は禮儀になると云ふこともありますが、開けない國、或は古くから着物を身體に着ける風の無い處に於ては、是は寒暑を防ぐと云ふ役はしない、然らば衣服と云ふものが、段々に發達した其極く始に於ては、何が本である、どう云ふ必要から始まつたかと云ふと、世界諸地方の人種を見ると、丁度一國に於て、又一軒の家に於て、大人もあり、子供もあり、赤子もあると云ふ時分に、一人の赤子が成長して大人になる迄見屆けなくても、夫が何年經つたならば、此位な子供になる、其子供が何年經つたならば大人になる年を取つたならば斯う云ふ風になるだらうと云ふことは分る、大抵是れから斯うなると察することが出來るのであります。

梅さくやそろ〳〵のぼる寒暖計
梅か香をいつ摺込みて墨匂ふ

三絃の稽古所

豫見道人

三絃の稽古所は、近來西洋樂の稽古所に、幾分か其領分を荒らされ、三絃の稽古所が、從來下層社會の風俗を紊して居つたのが、段々に西洋樂の稽古所が中等社會の風俗を紊して來るやうになつた、いづれにしても音樂そのものに罪はないが、何と美名は付くにしても、畢竟音樂は遊藝に相違ないのであるから之を學ぶ人も兎角眞面目なのが少く、新聞の三面を賑はすべき材料をつくることになる、それに今日迄の所、多くは野卑の根性を持つて、音樂の美妙を喜び、心情を優雅にするのではなく、音樂を知つた顔をして、音樂をあらゆる香ばしからぬ場所に賣り物且見せ物にするのが多いのであるから、試に三絃樂の稽古所、又西洋樂の稽古所から、ゾロ〳〵と出て來る人たちの、其風俗を統計したらんには、鼻持のならぬ方が其八分以上を占めて居るであらう、畢

覺學ぶ人がゐるいから、音樂が巾を利かすことを得せぬやうになつたので、自然一般の家庭が甚だ寂寥を極めるやうになる譯である、

閑話休題、女師匠の三絃稽古所なるものの消息を傳へんに、所謂一から十まである、それは物と藝と人氣によるのである、物とは三絃樂の種類で、數へれば隨分あるが、東京で先づ重なるものを云へば、長唄、義太夫、常盤津、清元、歌澤、一中、富本位で誰でも知つて居る新内などは、稽古所には出て居ない、藝を以て生活する人を除いて、以上諸科目を學ぶ人を分類すれば、近來中流以上には用ひられぬことになつて居るが、長唄は良家の娘に學ぶものが多い、義太夫は紳士に語る人もあつて、一般に入り易い所から、學ぶ人の區域が廣い、女には學ぶものが少い、常盤津、清元となつては、商家の手代、職人下層の娘たちに唄はれ、歌澤は少し品よくなつて居るが、所謂粋人向で、葉唄としては兎に角、歌澤と改まつては、女に學ぶ人が少い、富本一中はそれに辶をかけたものである、藝とは云ふまでもなく、その巧拙で、人氣は師匠の評判で、強ち藝の巧拙による譯でない、

以上の如く、單に三絃樂の稽古所として、十把一からげに云ふことは出來ぬが、大躰は斯うである、稽古所は所謂新道の格子づくりで、二間か三間かのが多い、格子戸をがらりとあくれば、看版の提灯がぶら下つて居る、これは少々文明がつて、ガラス燈を下げて居るのもある、又半分位は下げて居ぬのもある、言ひ合したやうに、入口二疊の敷居際に、座敷に向つて長火鉢を置き、これに師匠なり、內弟子なり、茶汲女なりが坐つて、受附的に坐り込んで弟子即ち客を待つ、長唄は學ぶものが學ぶもの故、朝早く初め、日の中に切上げるが、其他のは夜稽古が多いから、此仲間の朝は午前十時前後である、長唄を除いては、小娘などの藝を習ひに來るものよりは男客の遊びに來る方を歡迎する、それは師匠の收入の點からである、

月謝はおしなべて上一圓、中五十錢、下三十錢位で束修はこれと同額で、何か一品添へる位が氣の利いたものとなつて居る、それの上下は例外である、で十人の弟子があれば、普通何うにか斯うにか生計が立つ、感心に柔らか物の一組づゝ位は持つて、三絃の三四挺は吊して、それ相當に體面を保つて居る、上の部一圓の弟子のみとして、十圓の收入で、家賃と米代にも足らぬ譯であるが、月謝だけ持つて來る弟子は、あまり面白からぬ方で、折々所謂心付なるものを貰ふ、それに月さらひと稱して、毎月一回床をつくつて、弟子の小演藝會を開き、一人何程かの會費を徴收する、これが彼是月謝位の收入になる、その外師匠の餘祿としては、糸代なるものを取るのがあれば、疊代、冬は炭代を取るのもある、無論實費の數倍を得るのであるから、これも收入の部に入り、折々は弟子の紹介にて、宴席に招かれその人々の藝を助けて藝妓の代理をし、その禮金をうける、これも收入豫算中に加はつて居る、

斯の如く、種々の方面から收入があつて、衣類道具なども、よい師匠になると、弟子客が月謝以外に、心配することになつて居る、自然師匠は頭を下げることが多くて、見識も何もあつたものではない、月さらひの外に、春秋二回に二季浚ひと稱するものがあつて、これは貸席へ擔出し、仲間の師匠を呼合ふ仲間の師匠は互に弟子客をつれて、その會を賑はし月ざらひよりは大仕掛になる、自然師匠の收入も多い譯になる、この外に彈初、又納ざらひなどゝ名をつけて、弟子客から賽錢を集むる事になか〳〵拔目がないのである、而も要するに以上の如き諸手段をして、月謝の幾倍にもなる譯ではないから、初めより月謝を高くすれば世話の無い筈であるが、多くの弟子客は月謝の安い所から思付いて入門し、入門すれば餘儀なく餘計の散財をし、師匠に頭を下げさせる事を喜ぶやうになる、これが附いて廻つて諸種の弊害が生ずる、三絃樂は音樂中の上乘なるものであるに拘らず、かゝる消息中に汚されるのである、

師匠が收入を講ずる演藝會として、以上の外に、大さらひなる、大演藝會が開かれる、この催しによつて、師匠が晴衣をつくるとか、床をつくるとか、幕をつくるとか、樂器をつくるとか、纒つた財産をつくるのである、大ざらひは開業して幾年が經つて、師匠仲間の交際も廣くなつた所で、その師匠の存在を一般に認めしむべく、名弘會なるものをする、名弘と稱するのは、藝人となれば、その流派々々の總長、即ち家元と稱するものより、藝名を貰ふ、その藝名を披露するのである、仲間の師匠に、凡そ其會に出席し



得らる丶弟子客の數を聞きて、その數だけ手拭に口上書を添えて廻る、會の當日になると、この手拭に對して、一人五十錢なり一圓なりの祝儀を持參するそれに茶菓子なり辨當なり、酒なりを供して、其剩餘が收入となる、か丶る所には、多く弟子客を連れて行くほど、その師匠の顏はよくなる、自然この仲間に巾を利かすことになるのである、同じ名では名弘といふ譯にも行かぬと、わざ〳〵改名して、名弘を仕直すのもあり、たゞ三年が四年に大會を催すのもあれば一世一代など丶稱して、出來得る丈け大仕掛にする

のもある、この大仕掛のものは、今の所長唄が第一のやうである、

長唄は弟子客に財産家の娘が多い所から、親と當人との騒ぎになる、例へば何月何日長唄の大ざらひがある、稽古娘の親たちは、その日當人の大喝采を得させたく、藝をよく聞かせること丶、その場所に巾を利かせることに苦心經營する、長唄はこれを賑やかに聞かせやうと思へば、師匠以外によき立三味線をつける、下方と稱して皷、太皷、笛の名人を頼むそれが大會に於ける多くの注文であるから、猶引立つやうにといふので、それ〳〵關係者に少からぬ謝金と、少し親たちのぼせたのになると、一枚づ丶絹の仕着せを出すのもある、又其場に巾を利かせる手段としては、當日出入の者に揃ひの法被であるとか、夏ならば浴衣を着せ、何十人と云ふものを狩出し、そこからも此處からもお嬢さま〳〵で應接に遑あらざらしめ、當日來會者には幾千人あらうとも、一々辨當なり、自分の唄ひ物に因んで造らせた花かんざしなり、又手拭なり、を悉く配つて、人の出揃うて、まだ聞く人の耳の飽きない所で、唄はさうと思へば、苦情の起らぬやうに少からぬ金を蒔く、斯くて小娘一日の榮華と、半時の唄に數千金を散じて惜まぬなど、折々見受けることである、か丶る弟子客を持つた師匠は、勢ひ師匠仲間に評判がよく、随つて大なる收入がある譯である、

稽古は大抵一節を五六度繰返す位であるから、はかの行かぬ夥しく、一寸聞かれるやうな藝を覺えるには十年を要する、休みは所謂盆正月歳暮に二三週間と、月に三度位が普通である、然も前記の如き有様で、多く藝を學ぶといふより、それを遊ぶ方が多いのである、三味線音樂が風俗をよくしないのは當然の仕掛になつて居る、然れども近來西洋音樂にても、稽古所より風俗上諸種の弊害が起り、某音樂學校は閉校を取沙汰せらる丶ほどになつたから、却つて三絃音樂を風俗上顧みざりし方面より、大に改良されて、品格をよくする稽古所も出來、家庭に

採用して更に差支ない歌と曲によつて、盛んになるべき氣運を迎へて居る、田中理學博士の如きは、數年それに多大の力を盡され、其他早稻田の學者連にも、熱心にこれが改善の策を立てゝ居る事であつて自分は更に數年の後大に見るべき成蹟を現はし、今の稽古所風俗が歷史中のものになることを信じて疑はぬのである、

世界のいろ／＼

◎結婚を奬勵する主人　紐育市で有名な料理店カフエー、マルチンに雇使せられて居る四百人の勞働者は、先頃主人から從來一ケ年繼續して勤勞せるものには、二百圓の賞與を與ふべしとの注意の外に彼等が結婚して子供を產んだ時は、同じく二百圓の賞與金を與ふべしとの通告を受取つた、斯くて此店に雇使せらるゝ男女は、一年の勤勞と結婚して子を擧ぐることに由つて、四百圓の賞金を得、以て獨立の一店を開くことが出來ると云うて喜んで居るさうだ、此店の主人の意見では、此の方法は國家を利すると共に、自分にも利益だ何となれば人口增殖は國家を繁盛ならしめ、而して自分の所にて人を使ふには、未婚者より既婚者の方が萬事好都合だからと云ふ事である、

◎世界で一番金持ちの女　評判によると、南米のシグノラ、クーウノと云ふ女は、先づ世界で一番の金持ちだろうと云ふ事である、彼女の所有の金山銅山石炭坑からの收入は一年に四百八十萬圓で、田地よりりの收入は之に過ぎ、就中其所有の船舶からの收入と云ふものは、一層巨額に上ると云ふ事である、

◎米國小兒の減少　米國統計局に於て調査したる所に據れば、衞生の進步したる結果として、小兒の死亡率は著しく減少したるも、之が爲め虛弱なる小兒の生長者を增加したるを以て、同時に出產數を減ずるの傾向ありて、十九世紀の始めには、十歲以下の小兒の數全國民の三分の一なりしが、其終りには四分の一は減じたる由なり又出產年齡乃ち十五歲より四十九歲までの婦人千人に對し、五歲以下の小兒の數は今より四十五年前に六百三十四人なりしが、五年前には四百七十四人に減じたり、又米國に於て生れたる婦人千人と國外に生れて米國に移住したる婦人千人とに就きて、其小兒の數を比較するに、前者は僅に四百六十二人にして、後者は七百十人なり即ち國外に生れたる婦人は遙に多產なりと云ふ、

文藝

越路の旅（三）

文學博士　横井時冬

四月一日

朝とく出て、輪島崎に趣むき、海邊を散歩し、それより輪島町役所、並に鳳至郡役所に至り、漆業に關する事を調査し、宿に歸れば、きのふ穴水より乘り來りし所の車夫、この地にやどりて、穴水へ行く人をのせんとて、この宿に來れるよしをきゝ、匆々旅裝を整へ、十時といふに其車にのりて、水穴へといでたつ、例の山道を急ぎつゝ、午後二時三十分頃穴水につきしかど、一六の日は、七尾ゆきの船寄港せざることゝきゝて、又空しくこゝに半日を費すことゝなりぬ、

　公の旅は日數に限りあれば
　　暫しといこふほどもつらけれ

廣谷某方にやどることを約し、午餐を喫し、それより鵜島わたりへそゞろありきす、途次に神さびたるみやしろありければ、立よりてぬさ奉りけるに、こは穴水郷の内、大町村となんいふ所のよしにて、邊津比咩神社なり、さればとりあへず歌よみ奉りける

　この浦をうしはき給ふ神ならば
　　わがのる船になみなたゝせそ

穴水は、元郷名にて、今は川島村、大町村の二村よりなれるものをさして、穴水町となんいふ、舊藩の時には、長谷部信連の苗裔なる、長家の城下にて、城あとは町の東の海へいづる山の尾にあり、又信連を祭る社も山そひにありなどきけど、案内する人なくしてえゆかでやみぬ、けふ輪島より穴水へいづる途中にて、白楊を根こじに引來りたるをもて、小包につくり、郵便に托して東京に送りぬ、東京近郷の

川邊にてみるものと違ひ、枝幹綠色にしてうるはしければなり、穴水は僅に三百餘戸の町なれども、輪島よりは鮮魚ありて、やゝ枯腸を慰することを得たりとて笑ひぬ、

四月二日

朝八時、穴水の川尻よりはしげをいだしゝに、ふたゝびまた淺洲にのりあげ、船動かずなりぬ、やがて他より一隻の船をもてきて、やう〳〵鵜島沖に待つ所の、第三能登丸にのりぬ、このところよりきのふぬさ奉りし邊津比咩神社を、はるかにおろがみ奉りて、海路の無事を祈りけるかひありて、大口より寄せくる浪にて、いつも船



動搖するといふに、けふは疊の上をゆくが如く、少しも動搖せずしてすぎぬるは、こゝを度々往來する人もいと珍しゝとて喜びあへり、やがて猿島も過ぎ和倉沖に至りぬ、こゝも風吹き浪たつ所なるに、穩にて微風のそよ〳〵吹くのみ、和倉はのり下りする人ありて、二十分間ばかり船をとゞめぬ、おのが湯あみしける家はいづこぞと問ふ暇もあらで、船は烟を出してははや屛風岩のあたりを過ぎゆきけり、それより小口を横に見て、七尾につきぬるが、港口甚だあしく、辛うじてはしけより陸に上りぬ、時辰儀をみれば、十

一時頃なりき直に車を備ふて停車場に趣きぬ、きのふより汽車の時間改正ありて、十二時五分發のもの一回增加せしことゝて、まもなくそれにのり、金澤の人某より處々の說明を聞きつゝ、寶達の停車場につきぬ、

かの前田家にて、金鑛の發見せられし山の名と同じことなれば、寶達山もこのあたりならんとおもひて同車の人々に尋ねければ、おのれと相對して腰かけたる一人の男、窓より指さしつゝ、あの頭に雪をいたゞきて、高く立てる山なん、寶達にぞありけるといふ、又寶達は、加越能三州に跨りたる大山にて、過半は能州なり、此山は藥草、金銀其他產物多き山なれば、寶達の名あり、又寶達村は西平にあり、金を掘りし頃は、諸國より山師集り來りて繁昌せしが金山敷潰れし時、人多く死して、其後は衰へたるなりとぞ、いと懇にかたりきかせける、この物語了るころ、年たけたる一人の翁進みいでゝいへらく、金山の敷潰れしとき、死したる人々の魂、今に消えうせぬにや、雨の夜は多くの人の泣く聲すとぞ、されば土人はその所をさして金泣谷といふとて、其谷の方角を指して敎へけるも、いとをかし、これらの物語はさておき、寶達の金鑛は、天正十二年よりほり初め、殆ど四十五年間ほりとりしといへば、かの加州金の料となりしものも多かりしなるべし、

やがて二時間過津幡につきしかば、冷泉爲廣卿の墓を吊はんかとおもひしかどえゆかず、空しく一時間餘をすごし、三時二十分發の汽車に乘り、小松までといでたつ、されど金澤停車場に至りては、しばし汽車もとゞまることゝて、なにとなく往年來遊せしとき、兼六苑、帝慶山、臥龍山あたりを徘徊せしことなどもおもひつゞけゝる、そも〳〵金澤城は元尾山といひし地にて、(石川郡、山崎村の尾崎にある故なりといへり、)曆應康永のころ、本願寺の覺如(親鸞三世)が北國行脚のとき小刹を建てし地にて、其後文明三年本願寺の蓮如江州大津より越前に來り、朝倉敏景に乞うて、吉崎に一道場をたて、ついで尾

山にも來りしかば、其後本願寺宗徒のよる所となれり、さるを天正三年織田信長公の將、佐久間盛政攻め來りて、これをぬきとり、この城に居住せしが同じき十一年政盛の柳瀬の役に擒となるや、豐臣秀吉公この城を前田利家に與へらる、これによりて利家七尾城よりこの城に移り住せられき、其子利長のとき、尾山を攻めて金澤城と稱せらる、金澤の名は古莊名よりいでたりと云ひ、又今の公園中にむかし沸水あり、金洗澤といひしを、後人略して金澤といひしより起れりともいふ、そはともかくも百萬石の城郭にて、山上に高く聳ゆるさま、おのづから北陸の重鎭とやいはまし、加賀蒔繪、加賀象眼など云ふ名をきくだになつかしく覺ゆるを、況してや其城下を見て車中すぎ行くは、いと口をしき限りにこそ、それより松任、みかはをすぎ、四時四十二分小松につきぬ、停車場の傍なる淺井屋某方にやどりをとれり、小松も往年金澤へ行くとき、こゝに立寄て午餐を喫し、陶器を視察せしがけふも、亦松雲堂、酢屋久平わたりの陶器をみ、杯やうのもの數個を購ひて旅宿にかへれり、この地の陶器は、元蓮代寺窯にて陶器に從事せし今の松雲堂の父松屋菊三郎の開きし所にて、專ら古九谷靑畵の法をとりて描きしかば、世に靑九谷と呼びなしたるものなりき、されど今は靑九谷少くして、錦欄樣のもの多し、小松は寛永十五年より萬治元年まで前田利常(微妙院)の養老せられし處にて、むかしより商工業開けし土地柄なれば、今も陶器、羽二重など產すること多し、

水海のほとり

佐々木信綱

靜かなるわが夢のせていつしかも
　ふねははてたり湖そひのむら
紺靑のみづうみわかく日は落ちて
　われひとりたつ老まつのもと
水うみの岸の木かげにたゝずみて

しづかに思ふあめつちのうた

日はゆふべ水うみのほとり山の上
　友ものいはずわれもかたらず
岩をいでゝまた岩に入る翡翠一つ
　みづうみさむし三日月のかげ
つばめ一つはてなき空に消行きて
　物おともなしみづうみのうへ
青淵のふかきそこひにわがこゝろ
　さそひもてゆく水のおとかな
山をこえ湖をこえきてうみぎはに
　やせ畑つくるしづの男やたれ

あはれの子

大和田建樹

汽車の廣島に着きたる時、十ばかりの女の子、父らしき人に手を引かれつゝ、他の五十ばかりの男と共に入り來りぬ、父のしきりに頼む〳〵といふを慰めて、氣遣ひ給ふな受け合ひたりといふを思へば、父の家貧しくて遠き處へ奉公にやるを、かの男連れ歸るなどにやあらん、其の子の顏の躑躅よりも赤く泣き腫したるに、露なす涙は目に滿ち頬に流れて、ともすればすゝりなく聲、いと悲し、父は一たび別れて出で行きしが、發車の時間まだ來らざれば、又立ち歸りて、袂の金米糖は如何に、なくば買うてやらんかなどゝいひて、ひそかに別れを惜むさまなり、子はたゞうなづくのみ物をもいはず、彼の男しば〳〵安心して歸れ〳〵と勸む、汽笛は鳴りぬ、父は車を出でゝかなたに立ちぬ、車は動きぬ、子は窓をのぞきてしく〳〵泣きぬ、之を見る人、誰かはあはれと思はざらん、室の内うちしめりて語る人もなし、さらでだに涙もろきおのれなるに、胸せまり心あふれて、雨なす雫のこぼれ落つるも恥かしければ、窓に向ひてまぎらはす程に、廣島も見えずなりぬ、次の驛一つ二つ來りて後、かの子を見れば、泣き疲れた

るにや、首かたぶけて寢入りたり、夢に見る者母か父か、過ぎゆく村には、よき着物きて重箱提げたる娘など、たんぽゝ咲きたる畑の中道を行く、

いまはた魂はかはらざりけり

赤心報國

三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子

葦原のみづほの國に、天降りしろしめしける、天皇の神のみことの、御代重ねあまの日嗣と、しらしくる君の御代々々、海ゆかば水沈かばね、山ゆかば草むすかばね、大君のへにこそしなめ、かへりみはせじとことだて、仕へ來し人の魂かも、うつそみの是のますらを、いきかはり死かはりつゝ、天皇の御たてとなりて、世に出し人の魂かも、眼のあたりわが皇國の書籍みればふみ見るごとに、紅葉の過ぎにし人も魂、へばあひぬるものか日本魂、

反歌

いにしへも大和ごゝろの人なれや

近江のゆき

麹町女學校學監　小川直子

おのれ幼き時より、名所を尋ねて昔の跡をしたふ性質ありけれど、今は勤ある身にしあれば、心に任せず、されどきさらぎの頃、暫しのいとまを得たれば友だち二人三人打連て、近江の海のほとりなる名所見むとて、同じ月十日餘り、三日の朝まだきより霞と共に立出ぬ、汽車にてゆかましなどいふ人もあれど、志賀の山邊もなつかしく、今日は空の氣色もうらゝかなればとて、小車はしらせて白河さして出てけり、やがて彼里にかゝる程山のかけ道けはしくて車をめぐらすべうもあらねば、すべなくておりぬ、志賀の山越なれど、櫻はまだけしきばかりも匂はぬ程なれば、見る物もなき山のいよゝ高くおぼゆるに足のたかさもいとゞ苦しうおぼえて、などか滊車に

てはこざりけむと悔ゆれど甲斐なし、斯くなやみながらたどる〳〵のぼる程に、辛うじて峠にのぼり果て、不圖向ふを見やれば、近江の海の目の下に見えつれば驚かれぬ、いみじう面白くて、身のいたつきも打忘れつ、これより下る坂道には、櫻の木ともあまたあり、花の盛ならましかばと思ふも口をし、越え果てぬれば先づ唐崎の方にとてゆきて見れば、聞きしに增る老松なり、

志賀のうらやふりし昔をことゝへば
　松かぜのみぞこたへ顔なる

社はいとちひさくてあり、かたはらに木馬屋あれば晝げたうべつ、これより舟にて湖をわたるに、霞の間より比良のね遠く見ゆ、

矢はせふねかよふ波路は霞めども
　ひらの高ねは雪ぞさやけき

など詠じつゝ漕行くほどに舟はてぬ、岸におりて長等の社にまうづ、石の段いと高く聳えたるが、左り右りに梅の花咲みちたれば、薫れる雲を分のぼる心地す、山の上には森の木だち物ふりて、いみじう神さびたる氣色えもいはず、聞き傳ふる事ども思ひ出られて、しのぶかた〳〵繁きが中に、持統天皇の御幸まし〳〵て、玉もひにくませさせ給ひて、めしけむ眞清水のあと先づしのばしうて尋ぬれど、さだかならず、只大なる一つの井あり、屋形造りてかこひしたりければ、水の面もさだかには見えず、

みさびゐて影だに見えぬ眞清水も
　昔をくめば袖ぞぬれける

朝露と消えにし人のあと問へば
　春猶さむしあはづ野の原

また兼平の果たりしところとて、石文のしるしをたてたり、

粟津野に名のみとゞめてはかなくも
　朝日のかげに消えし露はも

皆打しめりて俄に旅の衣手もうすき心地せらる、斯くて行程に頓て石山につきぬ、こゝも亦きゝしに增る所にて、石どものたゝずまいは、言の葉に盡すべ

うもあらず、觀世音の尊とさはたいふもさらなれば
はぶきつ、彼の紫のおもとが源氏物語をかゝれたる
所とて、殘れるを見るにつけてもいにしへ戀しう、
なつかしうて袂もうるほひぬ、月見堂などは荒はて
たれどいとゆかし、

　さゝ波のかへる家路をいそがずば
　　木の間の月も見てましものを

そこより下り來て瀬田の橋を渡りつゝ

　君が世のさかりしられて小車の
　　とゞろきわたる瀬田の長はし

渡り果てたる所の右の方に、藤原秀郷の君の社とて
ちひさきほこらあり、立寄りて臥拜めばすゞろに思
ひ出らるゝ事ども多きを、あとに殘して左の方より
荒たる道をめぐり〳〵て、義仲寺に至りぬ、寺はい
たうこぼれてむぐらの生ひ茂りたる中に、石碑あり
いみじう哀におぼえて、

　かゝやきし朝日のひかりしばしにて
　　雲にかくれし昔をぞおもふ

傍に芭蕉翁の庵とて、かたばかり、殘れり又此寺に
彼兼平が果にける時、さしつらぬけりといふ劍をひ
めおけりと、聞傳ふるまゝに法師にこひて見るに、
例のなみだもろきさがなれば、

　あはれ世に玉とくだけてちりにしも
　　光はあきの霜にのこれり

と口すさび、ほしあへぬ旅の衣うらかなしくて、心
もかきみだりぬ、今宵は大津の驛にやどりぬ、
十五日今日も昨日のごと、空には塵ばかりの雲もな
く、風さへいと長閑なり、また見まほしき所多かれ
ど、勤ある身なれば此日は必ず歸らんと、家人にも
契り置たる事にしあれば、名殘をしくもとく起き出
でうながしたてつゝ、こたびは眞金路の事なれば、
またゝくうちに家路にこそは歸りたりしか、

旅中春月　　　岩倉　久子

なつかしくかすめる月にいとゞしく
　みやここひしき旅の空かな

糸竹のちぎり

橘　綏子

櫻岡の琵琶

すさましかりしとなん聞きつる、そのかみの屋島のたゝかひのさまをしも、立て渡せるふりにし屏風にゑがきたるを見るさへ、に、ものすごきかぎりなるをまいて、かすかにくゆるそらだきの香のかをり床しう淋しけなるわたりに、琵琶法師、紫の衣ゆたかにまとひて、雲隠れ給ひしに、大后の宮に手向まゐらせんとて、平家物語、灌頂巻をなん奏でつる、其さやかなる調、其あはれなる物語のふし〳〵、うや〳〵しう聞くからに、心も頓に澄みわたりぬ、これやこの、古きためしになん従ひしとかや、猶奏でつる中に、征夷將軍院宣のふつにおごそかなる、熢合戰のいみじういさましかる、實にやわりし世のさまの、さだかにおもはるゝ心地ぞすなる、雪いたう降りにしまたの日、東叡山のかなたに、此のみやびなる調のむしろ開かるゝにさもらひ、默もえわらずてよめる、

くゆる香のけふりにかよふ四つの緒の
　聲するかたに君もますらむ

そのかみのふりにしことの忍ばれて
　かきならす糸にあはれをぞ知る

雪ふかみいりにし山の松かぜに
　かよふもゆかし上つ代のこゑ

北條衣子の君、この曲聞かまほしう望みたまひしかば、誘ひまゐらせしに、昔忍ばれていと樂しかりけりとて、衣子の君

いにしへを忍ぶか岡の松かげに
　あはれむかしのしらべをぞきく

ゆら〳〵となびくけふりに上つ代の
　しらべゆかしくひゞく四の緒

水上の篳篥

おしなべて、うまゐせるをりに、思はぬことなかりしことなど顯はして、現實のやう見する夢てふもの

は、たつにおもしろきを、まいて、思ふこと、戀ふること、かくあれかしとねかふことの、しばしだにまことならんやう顯はるゝは、あやしうも嬉しきかぎりにこそ、其一つなるを管絃の數にもかぞへなんとて、筆のすさびに書いつく、

それのあした、そこはかとなくさまよひ出づれば、繁みたてる木影に、狹からぬ流ありけり、底ひの見ゆるばかりに清く澄みわたりて、より〳〵靜波の、くまみの岸に打ちよするさま、さすがに捨てがてにおもほえて、しばし汀のほとりに佇みつゝありし折しも、浪のまに〳〵漾ひくる、美はしのものありけり、いぶかしみ見れば、これなんなにがしの君がたぐひなう愛で給ふなる篳篥にてぞありける、あな心なや、などかばかりの貴き寶をば、此の流れには任せ給ひたる、あなあはれ、いづこにか流れゆくらんはてはわら浪にゆられて、海の藻屑とやなりなんとせちに心あせりけりしを、かたへなる沖すに、らうたげなる處女等三人、手携さへて、いたう睦びやかなるが、こも同じ心にやありけむ、目離あらせずてそを見送りつ、兄の君が、今しもかなたの岸の邊をそゝろありきし給ふと見けるに、あなうれし、篳篥はたやすうすくひあけられて、そかぬしには返されつ、面白さの限りなかりければ、覺めて後よめる、

世にしるき音を流しつゝふえ竹を
浪まによせてすきし君かな

はかなしや消をあらそふうたかたに
漾ふふえのゆくへしらずも

さゝれ浪しく〳〵よする岩かとに
ふえのえにしのたえずもあるかな

薔中の吹笙

いさゝめに笙のしらべ聞きてしは、十あまりも昔なる、ふりわけ髮の頃にやありけむ、西東をだに知らざりけるいはけなき童仲らに、物好みするさがのまさりたりしか、此のしらべのみは、おほつかなくもこよなう心には適ひぬ、年長くるまゝに、いとゝ思のすゝみて、雪白きあした、月清きゆふべはい

はずもがな、いづれの日いづれの夜にかは思ひいでざらん、折しものどやかなる春の日のつれ〴〵に、印函ひもときて、歴代の君が遺し給ひしくさ〴〵の印ども、所せく打ち並めて、わがこたび造らんものは、いづれの君のにか似せまゐらせんなど、心あてに見わけつゝあるに、思はずも手にふれたるは、誰か君の遺物にや、さだかならねど、徑三寸許なる圓形の古墨の半わまりすりたるなりき、めづらしと裏かへし見つれば、そもいかに、そかおき揚の圖には貞白先生陶弘景の君が、六十あまりなる翁と葉しげき木の下にゐて、笙なん吹かせ給ふなる、嬉しさいふべくもあらず、さきにはゆくりもなう、小やかなる笙の、たやすうわが手に入りけるが、今はたこをなん見出でたる、いかでいたづらことならましやは

わかために深きちぎりやこもるらん
　　磨りもはたさぬ墨のおもかげ
わが戀ふと知りてや人の遺しけん
　　墨の綸解きをきくよしもかな

わなゆかししげき木かげに昔人
　　世をしのふねをふきならすらむ

管絃のすさびのいみじうおもしろきは、いかでさやけき調を聞くのみかは、いやしからぬそが形を擧なき畫中に見、はたいづれをそれと執へんすべもなき夢まぼろしに見るさへも、をさ〴〵劣りまさりはあらずかし、あやしうもわきてめづる三つの管絃を、さだかに聞ける、正眼に見つる、おぼろにあらはれたるは、奇しきちぎりなりとて、ありしまゝをなんかい記しつ、

すゞめ（ツルゲエ子フ小品）

夏葉女史

余は獵からの歸來り、庭の並木道に差掛つた、犬は先になつて走り行く、
時に犬は遽に其歩を徐ならしめ、何か目前に獲物を感じたやうに、軀を屈める、

余は並木道を胸ずと、道端に、喙の未だ黄い、頭に初毛のある小雀を見た、巣より落ちたなり——强い風に、並木の樺の木が動揺たので——身動を爲ず、僅に生え初めた小さい翼を哀に開いて縮んだまゝ、犬は靜に其れに接近かんとするや、近き邊の梢から恰も石でも落ちたるやうに、胸の黒い老いた雀、犬の鼻前に飛下りさま、形も取次に、軀を丸くして、絶體絶命の哀な一聲、牙の鋭い開いた口に對つて、二度も身を躍らしたのである、

雀は救はんが爲に我が身を此に投じた、慥くて身にて我が子を掩護らんとした、……其小さき體はさすがに、恐怖によつて顫へ、聲は潰れ、嗄れて、宛然死したかのやう、身一つを犧牲と爲たのであつた、犬は其眼に如何に巨大の怪物に見えたか？、然も猶己が安全なる樹上に、留つてゐる事は出來ぬのであつた、……意思よりも强い力は、彼を其處から投下したので、

余がツレゾル（犬の名）は立止る、逡巡する、……尤も亦瞭然と此の力を認めたのである、

余は躊躇うてゐる犬を急いで呼び、敬意を表して立去つた、

笑ふ勿れ、余は此の小豪傑の鳥に對して、其愛の熱情に對して、敬意を懷かざるを得ぬのであつた、愛こそは死の恐怖よりも强い、と、余は思うた——唯是のみを以て、唯愛のみを以て、人の世は、且つ活き且つ動く、

吉野山

簪花女史

笠置の山を出でしより　天が下にはかくれ家の
なしと喞たせ給ひしを　過しむかしの夢とのみ
思ひゐしかど此ごろの　憂にくらべん由もなし
よしのゝ山に春くれど　花見てくらす春も來ず
さくらかざしゝ宮人も　太刀鉾とりて守りたる
くろ木の御所は端近く　散る來る花の影あはれ

此花のごといさぎよく　我も去なん左はあれど
君のためぞと偲びつゝ　甲斐なき命をしむなり
あさな〳〵に女御更衣　よそほひ飾りし弘徽殿
翡翠のすたれ中絶えて　むなしく掛る月のふね
船の上やまに名を擧て　勇みし人のこゝろにも
哀れの色やまさりけん　鎧のそでを濡らしぬと
聞しにまして悲しきは　ちる日みぢかき櫻井に
嫩きふたばのゆく末と　匂ふことばに諫めつゝ
最後のきはに七たびの、誓をたてゝゆく水の
みなとかは邊に楠木の　幹ふき折りし夕あらし
いつか都のはるに逢ひ　錦かざしてかへるとき
知らぬしら山見ぬ里の　たびのやどりの中々に
語り出さばかなしきも　憂かりし由も後の世の
わすれ形見と成なんと　身をなぐさめて越の國
越路のふゆのそら寒く　かぶとにかゝる山の雪
鎧のそでをひるがへし　面をあらふはげしさに
谷間に迷ふつはものゝ　暮るに借らん宿もなく
あるは木の下岩のかげ　しゞまりふせし哀さよ

いはなを集め魚を釣り　飢を助けて暮らせども
たのみと思ふ杣やまの　夕べのけむり影うすく
日々暖かに東風吹きて　山路の雪もむら消えつ
寄せてくはゝる金ケ崎　御幸のみかは人の身も
かはくまも無き我袖の　涙にやどるかげぞとも
知らで雲井に澄む月を　ながめ侘たるひとも亦
小雨まじりのゆふ霧に　ながるゝくひを藤島の
深田のぬまに埋みしが　埋れぬ名こそ哀れなれ
神路のやまに春來なば　ふたゝび花も開かなん
時し來ぬればいは清水　流れいつかすまなんと
待きし物を甲斐なくも　よしのゝ山の苔ふかく
大御かばねは埋むれど　みたまはいつか北の空
みかどの位いとたかく　つらなる星の臣つかさ
あれど黄泉の果までも　添奉るべき如何にして
吉野のやまの地盛りに　あつまるものは武士と
無情の敵のせめ來るを　ふせぎとゞめん力なし
御陵におふる草しげみ　置添ふつゆに風ふきて
しだれ〳〵し假ごろも　世に降雨もなみになり

ゆふべ寂しくなく鳥の　聲さへかなしよしの山
そゝぐなみだは盡ぬ共　うらみ盡なん時ぞなき
生てふたゝび歸らじと　おもひ定めしあづさ弓
亡數に入る名をとむる　如意輪堂のとびらの上
四條なはてのあさ風に　色勇ましくひらめかし
名を菊水のはたさへも　夕に見ればかげもなし
雲のかさなるよしの山　いかでこゝろの留らん
たゞ住馴しとしつきの　忍ばれてこそ戀しけれ
猶山ふかきゆくへこそ　住憂からめとおもへ共
いかに心にかなふらん　賀奈生の名のみ憑れて
何を叫ふぞ來て見れば　しばたく庵の怪しきに
のき洩る雨を防がせて　濡るゝ袖乾す間ぞなき
あるは木の下岩のかげ　松のあを葉を吹たてつ
こけのむしろを片敷て　これも身を置く假の宿
高嶺のあらし吹おちて　よるの衣をかへせども
露のたまくら寒ければ　昔を見するゆめもなし
たきゞを拾ふゆふ山に　雪をいたゞく肌さむく
清水をすくふたに底に　つきかげ荷ふ肩瘦せぬ
かくては一日かた時も　あり存へん甲斐もなく
有明近きやまの端に　名殘とゞむる月のかげ
空は消えんと見え乍ら　さすがに惜き露の身の
いのち在らばと思ふ世に　果敢なき事を賴みつゝ

梅　　麻生はる子

窓ちかくさすや朝日にさきそめて
　にほひもふかしゝらうめの花

鶯

ねぐらさへさだめかねたる黄鳥の
　まださとなれぬ聲ぞきこゆる

月前梅　　中山幸子

春の夜の月はおぼろにかすめども
　梅のにほひはかすまざりけり

月かげも梅のはやしもかすめども
　花のかをりはさやけかりけり

名所梅

はる〳〵とかすみはてたる梅の花
　そことも見えずにほふ月が瀬



胼輝凍瘡の注意

醫學博士　三島通良

胼、此は皮膚が乾燥致しますと出來るので所座います、夫れですから顔とか手足などの様な、外に露出れて居る部分には何處にも出來ます、又胼は濕氣を以て居る所の皮膚が寒い風に吹かれたり又は、火に暖つたりすると出來るのです、夫故成るべくは、手杯の濡れた時には能く手拭で水を拭いてから、暖める方が宜う御座います、

夫で之を豫防致しますには、油氣のものを皮膚に塗けて置くのが宜いです、普通人々の使用ひになる所の白粉下、小町水、はないかだ、へちまの水などゝ云ふものを塗けてお置きになれば、餘程其豫防になります、けれども極寒のころになつて、寒さの烈いころには之れ位の事では却々豫防が仕切れませぬ、で該疾に罹つた時には藥を塗けて治すより外に仕方がないのです、所が普通の賣藥店にある藥には能く効能のが無いのです、夫れで彼のベルッ氏が拵へて呉れました藥が只今の所で一番効能があるやうです然るに不幸にして、これには劇藥が少し混入ますのですから、自家で調合るのは不可けれども、藥種屋へお命じになれば直出來ます、又其價もそんなに高くはありませぬ、

ベルッ氏胼藥處方

一 苛性加里	一、〇グラム
一 酒精	各三〇、〇グラム
一 グリスリン	
一 餾水	四〇、〇グラム

此割合で調合致します、尤も此内餾水と云ふのは都合に依つて只の水でも宜敷い、夫れから其中へ香水

の少も混れますと、香氣もあつて大變好い藥が出來ます、此藥を一遍塗けると、どんな胼でも一度で治つて仕舞ます、で塗けます時には、夜分寢際に湯か何かで顏なり手なりを善く洗ひまして二三滴たらして、手にて揉んで局部へ塗けるのです、先今日の所では此の藥が一番効能がありますやうで、宮中などでも皆之を御使用になるそうです、

夫から皹は胼の卒業したのでありますから、先づ斯うして胼の内に治して仕舞へば、皹の出來る憂は御座いませぬ、

夫から今度は凍瘡で御座います、これも小供などには能く出來ますので殊に學校などへ通ひます小供は手足などへ多く出來たがります、尤も極寒い北海道などへ參りますと鼻や耳にも出來ますが、内地ではそんな事はあまり無い樣です、該疾は多く血液の循環の惡い所が、寒氣に遇ひますと出來るのです、夫故手の指とか足の先の部分の血液の循環の惡い所は、常々揉み軟げて血液の循環を助けるやうになさるが宜いです、殊に小供衆などには能く〳〵手を握つて御遣りに成る方が宜いのですで此の豫防の藥と云ふのは沃度丁幾で御座います、これを塗けて置きますと出來ませぬ、また少位出來かゝつたのも治つて仕舞ます、而しながら普通の沃度丁幾は濃いのです、夫故該藥を度々塗けますと皮膚があらびて參りますから、薄めて御使用になるのが宜い、其薄め方は、

一　沃度丁幾　五〇、〇グラム
一　酒精　五〇、〇グラム

丁度此の半々の割合で薄めますと工合よく成ります之を常々御使用になると豫防にも成りますし、又出來懸つて居る所が暖氣に成りますと、痒くなりますから其所へも之をお塗けになれば一遍で治ります、尤もこれは薄く仕たものだからと云ふて、餘り度々塗けると矢張皮膚が龜裂ますから、朝夕二度位お塗けに成るのが適度でありませう、夫から又愈々凍瘡が腫物の樣になつて夫が腐潰れて來る樣になりまし

ては迚も此藥は不可ぬから左樣なりましたのには、3%（三十倍）硼酸軟膏該藥を其局部に塗付けまして、其上からガーゼなり或は淸潔な紙の樣なものを上から覆せて、包んで置くです、左樣して凡每日一回位づゝ取替るのです、これも藥品は極廉價なもので、又少も毒になりませんから、何誰がお塗用になつても決して害になる樣な事はないのです、夫故素人が用ひますには之が一番安全で宜しう御座います、（文責在記者）

飮料水に就て

理學士　神谷樂石

病は口より生ずるもの多く、口に入るゝものは大に注意せざるべからず、然るに醫家すら不養生をして平氣なるの多きを見れば、兎角口の愛には、胃との衝突をも忘るゝぞ、淺ましき限りなる、而して口に入るゝもの、尤も多きものは水なり、乞ふ水に就て語らん、

水は飮料品中主なるものにして、人生保續に缺く可からざる要品たること勿論なり、然れども常に地上に存する水は多少混合物ありて、純粹の品は蒸餾水の外なしと云ふも可なるべし、雨水は蒸餾水と同じく良好のものなれども、雨となりて降る際、空氣を通過して空中の有機物を混ずるを以て濫りに飮むべからず、凡て純粹の水は却つて風味なし、之に反して多少他の成分を混ずる水、例へば山間より泉出する水、河の水、井戸の水等は味ひ良ろしく飮料にも亦適すべし、然れども是等の水は豫め先づ其試驗を行ひ、鑑定して後無害のものと認めたるものを用ふべし、若し塲合によりて良水を求め難きときは、漉水法に依りて淸水にするか、又は蒸餾して後飮用に爲すべし、

水の中に含めるもの種々あり安母尼亞、硝酸、格魯兒、有機質等なり、飮料に供せんとする水は、專門家に就て檢査を受け、飮料に適するや否を定む可し

水は人體中に入りたる後ち、血液循環によりて骨、筋肉、内臓等の組織に入り種々の作用を爲し、又身體諸部に柔軟彈力等を與へ、滑利にして運動を自由ならしむ、而して體中の水は汗となり、皮膚の蒸發氣となり、肺の呼氣となり尿となりて謝し去るもの也

生活保續に必要なる水は、或る場合に於て病毒を含み人體中に入りて其病毒を發育し、爲に危害を招くことあり、彼の傳染病の蔓延流行するは、水に因るもの最も多し、故に下水の流通を能くし、汚物に接近せる井戸の水は飲用せざるを可とす、

劇寒劇熱を受けたる水は、例ひ其の内に有機物或は



病毒ありと雖も、既に死滅するを以て害なし、故に日常飲料に供する水は、一旦煮沸して後用ふるを良とす、一旦沸騰せし後と雖も開放して冷却し、適宜の温度に至るときは、黴菌は好んで他より再び進入するを以て、豫め瓶の如きものに入れ固く栓を爲し、密閉し置くを良とす、凡そ黴菌は中等の温度を有する水中には、活潑なる棲息を營むものなり、故に温暖の候即ち春秋の時季に至れば、彼傳染病を發するものにして、殊に雨多き季節には其流行を逞くするを見ても知るべきなり、

沸湯及び氷などは黴菌の存する患へなしと雖も、直に之を飲用するときは、其刺戟甚しく爲に口内粘膜

に水泡を生じ、或は神經を刺戟して腹痛を發し、下痢症を起すことあり、劇熱劇寒の感作は獨り飲用のみならず、身體の外部に受くる刺戟も亦同一理にして、彼の沐浴の如き熱度強きに過ぎ、皮膚赤色となるが如きは、既に第一度の火傷を受けしと同じく、從て神經の刺戟甚だしく爲に腦神經の衰弱を起すものなり、故に通常温浴の度は攝氏三十四度より、四十度位を度とす、之を華氏の寒暖計にすれば、九十三度乃至百〇四度となるべし、然れども常に腦病なるか、或は神經過敏にして神經衰弱症あり、或は心悸亢進症あるものには、之より以下の微温浴に入るゝは、害なきのみならず、反つて病の療治なるべし虚弱の婦人及び小兒などには、浴湯の温度殊に注意すべきものとす、

蕨　　八幡貴與子

いざけふは山路をわけて家土產に
折りてかへらん春の早わらび

乳母の資格

醫學士　田中東洋

第一は年齢にして、概ね二十歳以上三十歳以下のものなるべし、已を得ずして其以上に及ぶ共、三十五歳を超ゆべからず、生母と產期を略同くし、年齢も成るべく生母に近きものを良とす、其分娩の期、生母と八週間以上の相違あるものは用ゐるべからず、是より以上の違ひあれば、乳汁の性質變りゐて、幼生兒に適當せぬなり、但し初回よりも二回以上分娩したるものを良とす、是其乳汁には替りなきも、小兒の取扱方に經驗あればなり、

第二は血統にして、乳母を雇ふには、婚嫁と同じく能く〳〵血統を調ぶべし、血統の不取調よりして、癩病又は結核、或は腺病などの恐るべき病毒の種子を小兒に傳ふること多く、意外の處より意外の血統を引受る事あり、最も注意すべし、

第三は體格及び性質にして、外貌强健血色好きもの

を撰ぶべし、痩せたるもの特に胸の狹くして痩せたるものは、病あるの徴なり、貧血のものも惡しく、又餘り肥滿に過ぎたるも良からず、顏面快濶にして唇赤く、眼中淸しくして齒白く、中肉にして殊に胸の幅廣く、乳房圓くして大なるものを良とす、病あるもの及び小瘡あるものは、一切採るべからず、第四は乳母の生みたる兒の生死を審にし、死したるものなれば、其病症を詳にすべし、若し生存する時は、其の兒の强弱及び乳兒の居ながら、乳母となるの事情を審にすべし、

第五は性質、品行、及び敎育の淺深等を吟味すべし、性質癡鈍なるもの、心情善からぬもの、行狀惡しきものは、如何ほど體格は良きも決して採用すべからず、元來乳母に雇はるゝものは、多くは中等以下のものなれば、假令敎育は少くとも寧ろ性行正直にして、氣象粗暴ならず、心意爽快なるものを撰ぶべし都人よりも寧ろ田舍人を良とす、凡て乳母の性行に注意するは肝要の一事なり、決して忽に爲すべからず、

第六、右の五項共に合格する時は、次に其乳汁を檢査する事肝要なり、良性の乳汁は輕く乳房を押す時は、忽ち迸り出で其色純白にして、味甘く、臭氣なくして能く水に混和す、惡質のものは水に入るゝも混らず、凝りて水底に澱む、又試に拇指の爪の上に點滴して透視するに水色を現はし、爪を傾くる時は忽ち流れ落て跡に靑白色を殘すものは、惡質の乳なり、善性のものは水色を爲さず、球狀を爲し爪を傾くるも流れ落ることなし、右等の試驗にて大抵は判別し得るも、其精しき檢査は、顯微鏡と、分析法とに依るに非ざれば、能はず。

以上第三、第四、及び第六中不明の廉は、猶醫師に依賴して精しく檢査すべし、歐洲各國にては、乳母に托し、又は牛乳にて小兒を養育すること、本邦よりは遙に多し、故に各國多くは、乳母鑑定局と稱するものあり、特に佛蘭西の如きは、官立にして官醫茲に出張し、乳母となるものは凡て其鑑査を爲して、

合格不合格を定むるといふ、

一家の平和策

竹街山人

今回は西洋にて、家内團欒の要件として認められて居る事を少しく申述べませう、勿論之は耳新しい説では御座いません、極々普通な事柄で、これからの男女は必ず實行しなければならぬ事で御座います、ですが悲しい事には此普通の事が、未だ今日の日本人には一般に行はれて居るとは申されません、男子の或る者は夫として妻を敬愛する事なく、家長として主婦に信任を置きませす、自分の妻を下女かなどの樣に思ひ、夫たるの職は即ち下女取締の役と心得て居る位で、それで社會へ出ては文明とか、開化とか口々に呼ばつて居るのです、なるほど口には開化の理を巧に解釋するでしよう、然し行に至つて一として文明らしい所はないのです、斯樣な人に何故妻として權利を認めないかと問ひますれば、必ずこんな答を致します『無智無學な今日の婦女に、重任を託する事は出來ぬ、何の相談相手にもならぬ』など申しますが、我等は之に反對致し度いと思ふのですが、どうも事實が其通りで反對することが出來ません、何と殘念では御座りませんか、それでこんな事を云はれない樣にするには、どうすればよいかと申しますに、先づ結婚する夫婦たるの要件を缺いて居るからだらうと思はれます、さて其要件とは次の樣な順序で起つて來るものでしよう、先第一に相見る事より初まつて、お互に見合つてそれから何處となしに高尚な所がある、あの方ならばと云ふ心を置いて、遇ふ度毎に極々細密に其人の擧動に心を留める樣になる、顔を見ても幾分か其人の心を判斷する事が出來る、又他人に聞合して其人の性質境遇等を知る事が出來る、さて斯く見たり聞いたりした處では自分の理想にかなひ、如何にも夫として、或は妻としてふさはしい人だと思へば、手づるを求めて交際

して見るもよい、然し其交際が當を得たるものでないといかん、嚴格な監督者の下に交際しなければならん、母親ならば至極適當である、母親がなければ姉でもいゝ、教師の奥さんでもいゝ、何にしろ理屈の分つた敬服すべき監督者が必要である、さて斯くして交際して居る間に、益々其人がなつかしくなりお互の心に適ふたなら初めて結婚に實があるのである、と云ふ順序だらうと思はれます、それで結婚してからどうすればよいと申しますと、第一の勤めは家内の團欒でしやう、故に逐次家内團欒中缺ぐべからざる事を申述べましよう、

一、自家に居る時も、交際場裡にあると同じ様に、目上の者に對しては禮譲を守り、目下の者に對しては思ひやりをよくし、深切を盡し何んな者へも愛想をよくし、其心を喜ばす様にするは、眞に必要の事と思ひます、

一、夫たる者は其妻及び家内の者達の、愉快を求める爲に金を吝んではなりません、何故と申しますに其爲に使はれた金は能く使用された物ですから、

一、主婦及び一家内の女子は家庭の和樂に心を用ひ常に夫或は其家族に愉快を與へる様に、勤めなければなりません、夫或は其家内の男子に家に居ても、面白くないと云はせるは、或點迄は婦人の罪でしやう、又男子の方でも辛苦心勞して與へてくれた愉快を、樂しく思はないと云ふ筈はないのです、さてかうして女子は男子に愉快を與へて喜び、男子は女子の與へてくれた愉快を受けて喜んだなら、其家内には喜が溢れるに違ひありません、之が隣家知人遂には社會全體に及ぼす影響は實に大なるものでしやう

一、客室は何處の家でも、比較的に能く飾られて掃除も行きとゞいて居りますが、他の部屋も其通りになるべく、家族の者皆んなの心にかなふ様に、飾つて置くのは必要です、そうして心もちよく住へば、從つて和樂を得る事が出來る筈です、

一、親しい友人が來て飯時になつたら、まごつかずに御飯を出す様に、常に用意して置くものです、又

之れは喜んでしなければならぬことで、然し思ひきつた御馳走をするには及ばんは勿論です、今一寸思付きましたから申上げて置ますが、西洋では妻は夫の知己を盡く知つて居ります、誰々とはどんな交際をして居るが、誰の家に行つては何んな話が出るか、あの人はどういふ待遇をしてよいか、ちやんと知つて居ります、日本では何うでしやう夫が役所で、日々顔を合して居る同僚をさへ、能くは知らない妻が隨分多い樣です、こんな事では夫の交際を助ける所か、反て障害になるでしやう、又西洋では夫も大概の友人には妻を紹介して、共に交際場裡に出る樣にして居ります、甚だしいのは夫だけへ宴會などの招待狀を出しても、妻が招待されんからと云つて宴會へ出席しない者がある位です、兎に角此點に付いては、西洋の方が優つて居ると思ひますから、我國でも夫は友人に妻を紹介し、妻は勤めて夫の交際を助けると云ふ樣にしたいものです、

一、客を厚く待遇しても、其報酬として、喜びの外何んにも望んではなりません、

一、和氣靄々たる家庭は偉大なる子女を作り出し、屢々遊びに來る友人も其芳しき空氣に觸れて、善にも進むものだといふことを忘れてはなりません、

一、飯時食卓をかこんだ時は、家人に不快な感を起さす樣な事を、なるべく云ひ出さないのがよいのです、長い月日には面白からざる意見の衝突も起るでしやうが、其時は互に議論をしあふもよいが、時と場所を撰んでしなければなりません、決して他の愉快を汚す樣な事があつてはなりません、

一、何事にも時を違へぬと云ふ事は、善良の家庭に缺くべからざる德の一つであると云ふ事を、忘れてはなりますまい、實に之は必要の事で御座いますが我國には家庭で時間をちやんと守らないのみならず社會でも時間に就て嚴正な人が、少くないとは悲しい事ではありませんか、

一、若い者は老人を、強い者は弱い者を助けて、心からの親切を盡せば、一家内の總ての禮讓は從つて

守らるゝもので御座いませう、

一、父、夫、兄たるものは、其家の主婦を敬愛し、禮讓を盡すは恰も交際社會へ出て、貴婦人に對する樣にするものです、殊には子供、下女等の居る前ではそうしなければなりません、

一、主婦の一家に於ける職業を、國に就て云ふて見ますれば内務大臣で、時には外務大臣をも、大藏大臣の職をも兼ねなければなりませんが、其權威は女王でなければ一家が整頓して、心もちよく暮す事はとては望まれない事を忘れてはなりません、

一、右に申しました樣に、一家の主婦が全權を握つて、萬事をきりもりすれば、此主婦は其家庭の善良なるも否らざるも、一つに自分の掌中にあるものであると云ふ事を、記憶して居なければなりません、

一、男子は若しクラブかなどで一夕を遊び、己れのみ快樂を盡したる時は、家に留守居をして居た者の親切なるを忘れずに、其御禮として何んぞ面白い話を持て歸る樣に心掛けるものです、女子には此時快く其話を受けて、共に笑ひ興ずるのがよいのです、

一、御飯の時は家内擧つて、一人も缺けずに同時に食卓に就き、御目出度い宴會の時の樣に、面白く樂しく而も禮儀正しく食を取るものです、そうすれば左迄の御馳走はなくとも、おいしく御飯がたべられ、又家庭の眞の面白味が出てまゐります（此迄申述べました事は行つてほしい事ですが、之よりはしてならない事を申述べましよう）

一、富貴の人のみが幸なる、樂しき家庭を作り得るものと思ふてはなりません、反て左迄に富んで居ない人の手に、善良の家庭が作り出されるもので、富は家庭を紊亂させるものと云ふてもよい位でしよう

一、晴服を着て御客にいつた時ばかり行儀正しくして、それを脱ぐと同時に禮儀をも捨去つてしまつてはなりません、禮儀は晴服とは違つて、うちに居てもそとに居ても、常に身につけて居なければなりません、

一、根も葉もない極々些細の事から、口爭ひを初め

る事がありますが、之が別に家庭の和樂上何の害にもならないと思ふのは、たいした間違ひです、之が度重なれば互の愛は消え去るものです、又しないでもすむ口論を初め、遂には互に意氣張りづくで火の手が擧り、二日も三日も面白くない顏付をして暮すなどは、實に愚の極です、家内に一人でもこんな人がある時は、餘程不愉快になりますが、主婦がこんな風であつたらどうでしやう、朝から晩まで嵐のなかに住んで居る樣な心持がするでしやう、

一、收入不相應に金錢を費してはなりません、然し又自分の爲に酒や煙草に、莫大の金圓を費す事の能る家長は、其妻や娘に着物や花を與へる事を、惜んでなりません、

一、家に居る時も衣服に注意しなければなりません勿論高價のものを身に着けるには及びませんが、自分によく似合ふものを撰び、みぎれいにして居るのは必要です、

一、如何なる事にでも冷かで我儘なるはよくない事です、冷談と專權は一家に不調和を、持來たす基と云ふてもよろしい位でしやう、

一、困しい思ひをして外貌を飾るの愚なるを忘れてなりますまい、

家庭理科

山下謙堂

理學とか化學とか云ひますと、よほど飛び離れて高尙な學問の事に聞こえて、普通の俗人などには迚も解りもせず、またさ程必要の事でも無いやうに思ふ人が多いやうでありますが、其の實は人間生活の上に於て一番大切な事で、又一番手近い事でありまして、何處の家でも毎朝起き出でゝ、まづ一番先きに取り懸る飯を炊く事から、晝の間の事は申すに及ばず、夜になりて燈火を消して寢るまで、否寢てから後でも、片時半刻も此の理化學作用は絶やす事は出來ぬのであります、さてそれほど人間に必要で手近

い日々の事でありながら、世の人が多く等閑に附して過ぎますのは何故かといひますと、唯むづかしい學問上の事で、迚も子女や婢僕などに解るものでないとして居るからでありますが、これはまだ考が足らぬのであらうと思ひます、

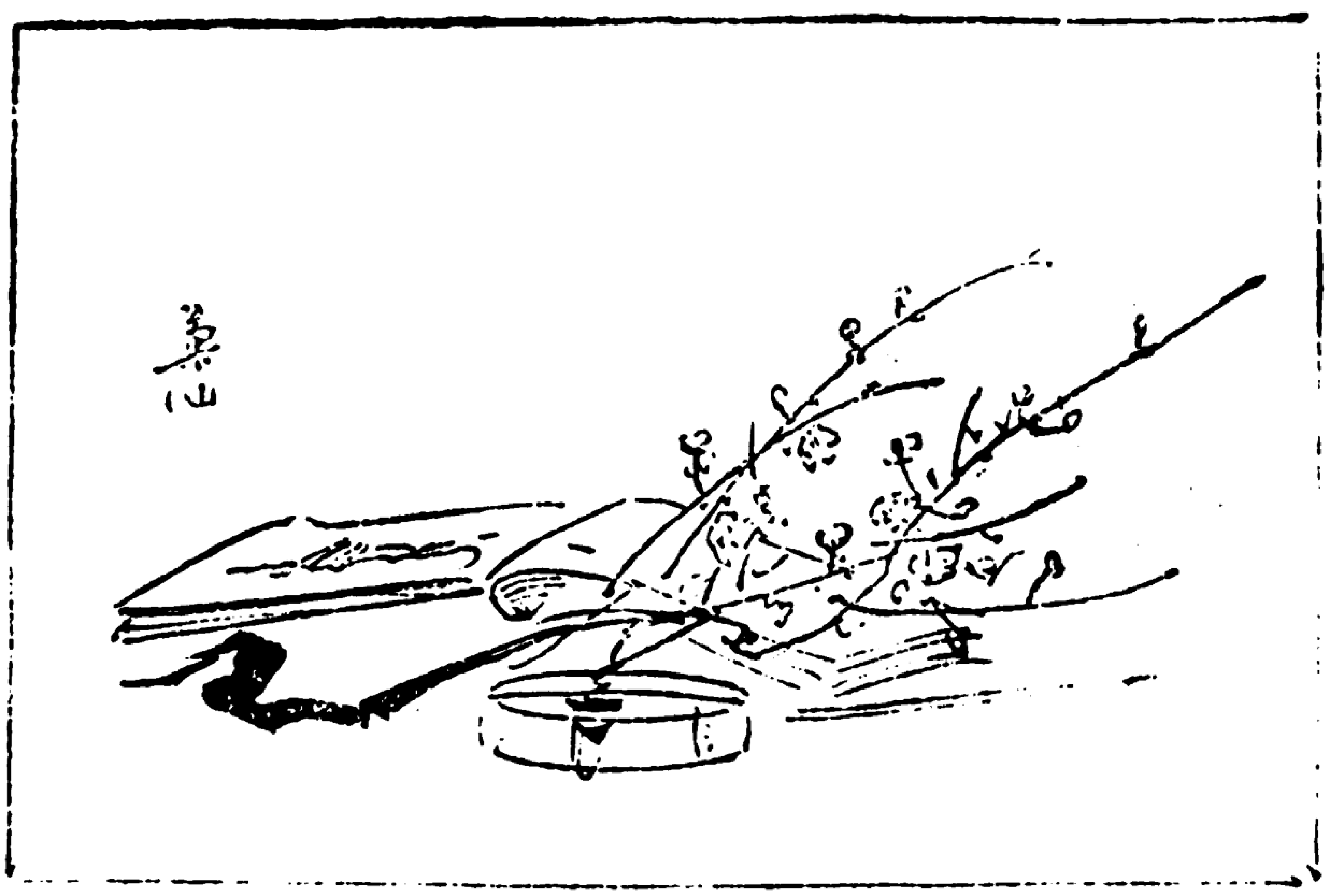
勿論高尚な學問でありますから、正當に研究するとなれば、段々研究の進むほど益々むづかしくなりて限りのないものでありますけれども、學問として研究するのでなく、實地の現象に就いて概略の説明を聞き、自然の規則も覺え、日用の上に注意すべき事項を心得る位はさして難しい事でもなく、而して實際上隨分益になる事は少なからぬ事と思ひますから卑近な事に就いて少々述べて見やうと思ひます、

まづ一番手近い勝手元の事について、化學に關する事を少し話して見たいと思ひますが、其の前にまづ大體に就いて一通り話して置かねばならぬ事があります、それは何かといひますと、一體此の世界中にある物は、地球其の物を始めとして、山でも石でも木でも水でも、又人でも獸でも何でも彼でも、物といふ總ての物は、皆それ〳〵の原料があつて、其の原料が唯一種で出來て居る物も少しはありますが、大體は原料の二種とか三種とか、或は四種五種、其以上も結合いて出來て居る物もあります、斯様に萬物の原料となつて居る物を元素といひまして、其の數が六十六種あります、此の世界にある物は實に千萬無量で、其の形なり其の性質なり皆夫れ〳〵違ひがあつて、迚も知り盡すことも數へ上ることも出來ぬ程多くありますが、皆此の六十六の元素中の彼と此と幾個かづゝが結び付いて出來て居る事は、種々研究した上で知られた事でありまして、一々目の前で其の試驗をして證據立てることが出來るのであります、其れには或は一つの物を分けて元素に還へしたり、或は元素幾種かを集めて新に一つの新物を造つたりします、此の物から分つて元素に還へす事を分析といひ、元素を集めて物を造ることを化合と云ひます、斯様に物の分析や元素の化合の事から其れ

に就いての種々な研究をする學問を化學といふのであります、さて茲で一寸斷つて置きますが、右の樣に申しますと、化學者といふ者は、何物でも分析して元素に還へしたり、元素を集めて隨意の物を造り出すことが出來るかといふに、さうはゆきません、勿論分析する方は何でも出來ますが、造り出す方となると、土、水、瓦斯等生活力のないものには出來る物がありますけれども、人間や鳥獸は無論の事草木等總て生活發育の機能あるものは全く造る事は出來ませぬ、併しながら造り出す事こそ出來ませぬけれども、如何なる元素から草木の幹が出來て居るとか、人間の肉や骨が出來て居るとか、又如何なる作用で生活するとか發育するとか云ふ事は知ることが出來ます、從つて斯うすれば養生に益があるとか、彼樣すれば健康に害があるとかいふ事が分りますから、何の道人間には必要な事であります、

さて冒頭が餘り長くなりましたから、先づ大體の話は此の位に止めて置いて、これから、少々事實に就いての話をしますが、まづ手近い水の成立から申し上ます、水は大抵種々な物が混り込んで居りまして純粹な水といふものは少ないものでありますが、水以外の混り物は別として、全く混り物の無い水は、水素といふ元素と酸素といふ元素と二種の元素の結び附いて出來て居る物であります、其れ故水を分析すると、元の水素と酸素との二元素に還へるのは當然の事であります、それで其の水素と酸素とは如何なる物であるかといふことを少し申し上げます、水素酸素は何れも無色の氣體、即ち透明な一種の瓦斯でありまして、目に見る事も手に取ることも出來ませぬが、水素は萬物中で一番に輕く、空氣より十四倍も輕い物でありますから、水素瓦斯を採つた時は透き目の無い袋に入るか、又硝子壜にでも入れるなら、其の口を下にして倒にして居らぬと、空氣より輕い水素は（水の中で水より輕い物が浮き上ると同じ道理で）皆上の方へ抜けて逃げて仕舞ひます、それで輕い物で出來た袋に水素瓦斯を入れて、口を堅

く括つて空氣中に放すと高く上に昇ります、緣日抔で賣つて居る玩弄具の風船玉は、此れから出來て居るのであります、又本當の風船も此を大仕掛けにして、多くの水素瓦斯を入れるのであります、それから其の水素は通常何處に在るものかといひますと、此れは自然に水素ばかり離れて有る事はまづありませぬけれども、他の元素と化合しては澤山にある物であります今申す通り水が水素から出來て居りますから、水氣の有る所には海にでも河にでも、人間の身體にでも草木の中にでも、必此の水素が入つて居る事は確なことであります、又一方酸素の方でありますが此れは至つて能く物を燃やす物で木片の燃えるのを其の焰を吹き消して、酸素瓦斯の



ある硝子壜の中へ入れると直に焰を上げて燃え、其の光も空氣中で燃える時よりは強くて鮮であります又酸素は人間を始めとして生命のある物の生活を保つに一刻も缺がれぬ最も大切な物であります、勿論生物の生活には酸素ばかりでなく、他の物も必要ではありますけれども、他の物は一日や半日間無いとて生命が切れるとも限りませぬが、此の酸素だけは呼吸をして血の循環を續けて行くものでありますから、それこそちよつとも缺ぐ事が出來ませぬ、それで其の所在地はといひますと、此れは多くの元素と化合して萬物の大切な部分をなして居るばかりでなく、化合せずに窒素といふ瓦斯の元素と混つて空氣といふ

物になつて世界中に擴がつて居りますゆゑ、其の所在は元素中で一番に廣い物であります、

此處で化合と混合の別を申し上げて置きますが、元素と元素が化合すると申しますのは、米の粉と麥の粉と合せて團子を拵へる樣なのとは違ひまして、元素と元素が合して一つの變化を起して、前とは全く性質の違つた新らしい一つの物が出來るのを化合といふのであります、唯混つたばかりで其の元素に變化がなく、矢張り元の色なり性質なりがあるのは混合といふのであります、今此の一例を申しますと、硫黃の粉にしたのと銅の粉にしたのとを一つ器に入れて能く攪き合せますと、一寸色も變りて見え、別に新物が出來たかのやうに思はれますが、之を水の中へ落しますと、銅の粉は重いから沈み黃硫の粉は輕いから浮いて、別々に分かれます、此れはまだ混合であつて化合でありませぬ、けれども此の混合物を強い火で熱しますと、それが火光を發して見るうちに變化を起こし、一つの新らしい物になります、此の新物は硫化銅と申して硫黃にも水に落しても何うしても元に分れませぬ、銅にも何ちらにも似て居らぬ全く別な物でありまして、斯樣なのを化合といふのであります、元素の化合する時には、大抵は熱が起こるとか、或は火光を發して燃えるとかするのが多くありまして、それと同時に變化が起ります、元素の化合するのは物によつてそれ〳〵違ひがありまして、中には元素と元素と出逢へば直に化合するのもありますし、又熱を加へるとか、電氣を通じるとか、其の媒介をして化合を助けねばならぬのもあります、又元素同志の間で相手に依つて化合力の強いのと弱いのがありまして、化合力の一番強い間柄が出逢ふと、折角今日まで化合して居る元素と離れて直に其の方と化合するものであります、

斯樣な事は學問に關係した事で、大分込み入つた話になりましたが、ざつと申し上げて置かぬと間違になる事がありますから、勢ひ深入をする樣になりた次第であります、

家庭遊戯

華族女學校教師　小野專太郎

桃　太　郎

幼稚の遊戯法の古來我國に行はれたるもの多し、然れど女兒家庭の遊戯とし云へば、概して活潑なる身體の運動を缺ぎ、隨つて精神の活動を稗益すること少し、洵に遺憾といふべし、女子は將來、女兒のみならず、男子をも養育薫陶せざるべからざるものなれば、或る程度に於て、男兒の爲すべき遊戯法をも豫め心得置かざるべからず、母の其子に對する感化力は至大なり、故に予は、所謂國民體育の發達を圖るに就ても、先づ女子に、運動を尙ぶ精神と、之を實行する習慣とを得しめんとし、斯の目的に依りて、男女皆行ひ得べき家庭的運動法を述べんとするに當り、玆に紹介すべき新種の遊戯法あり、即ち此『桃太郎』の類にして、『桃太郎』は其詞歌よりいはゞ固より男兒に最も適當なれど、女兒にも亦之を爲さしむることを得、今若し幼兒の爲にせるお伽話と、之を叙べたる唱歌と、又之に適へる動作と相關聯せる一種の遊戯法ありとせば、そは表出體操として趣味一層多方なるものと云ふべし、而して幼兒の能く聞ける、桃太郎の鬼ヶ島退治は有益の昔話なり玆に桃太郎遠征の遊戯を述べんとす、

然れども、之をして單に一種の物眞似ならしむることを望まざるなり、蓋し教育上或目的の爲には、物眞似の遊戯も相當の効用あるべしと雖も、予の表出體操を作るや主として、運動を可成十分に爲さしめ兼ねて、幼時にとりては無味なる、而も其必要なる彼の組識的體操の豫習を爲さしむるを目的とせり、即ち一擧一動皆、身體の如何なる部分を運動せしむべき乎に注意し、趣味津々の裡、多方多量にして而も正確なる體操を營み、決して、形式のみを得て滿足すべきものにあらざるなり、

『桃太郎』の歌詞及び樂譜は『幼年唱歌初編上卷』にあり、轉載の諾を乞はずば此處に之を揭げ難し、さ

れど其運動法のみを說明するも、決して無益の事にあらざるべし、況や其歌は、途上屢、學童の口より聞くことを得べきをや、（因に云ふ本運動法は或人の作を其需によりて予の改作したるものなり、而して當時世間に、唱歌これと同一にして運動異なる桃太郎の遊戯法ある由を聞けども、予は之れを知らず）

此の體操法は各個又は多人數合齊的に行ふことを得、人數多き時は、一列若くは內外二重の圓形を作り、內圓は外圓より小さくせん爲め人數を少くし、相隣生の間隔は兩臂を側平にしたるものより稍廣くし、圓周を側面行進する際には、內圓 外圓と反對の方向に巡るべし、

而して此體操を行ふに當りては、先づ表出體操の意義、唱歌と運動との關係、並に其實行法を知る必要あれども、そは略す、

第一法、停止の姿勢より始むるもの、

最初の用意は、直立不動の姿勢（衆人圓列を作り居らば圓列に向ひて）に在るものとす、

（一）も゜〇〇〇う゜〇〇〇、も゜〇〇〇う゜、

゜もにて兩臂を伸したるまゝ、側面より頭上に擧げ、次で肘を少し曲げ、兩掌を前に向け、左手の中央の三指に、右手の中央の三指を當てゝ、六指、斜狀に交叉する樣にし、゜うにて兩臂を伸しながら、側方より下げて掌を股側に附け。次に゜もにて兩臂を曲げ、臂を側方に張りて、兩手を腰側上にとり、拇指を後ろに、他の四指を前にし、次に゜うにて臂を伸し、兩手を股側に下す、（゜もは桃の形、゜うは其割れたること、次の゜も゜うは桃太郎の現はれたるを表意す）、

（二）き゜〇〇〇し゜〇〇〇、ち゜〇〇〇ち゜、

゜きにて兩前臂を上屈し、兩掌を左右相對せしめ、゜しにて之を舊位に復し、゜ちにて手を握りながら、兩前臂を上屈し、手甲を外に向けて、兩拳を左右相對せしめ、次の゜ちにて兩臂を其のまゝ突上並立せしむ（゜き゜し゜と、゜ち゜ちとは上下の關係により、溫柔にして而も勇猛なるを示す、

（三）お゜〇〇ー〇〇〇、う゜〇〇で゜、

°おにて兩臂を前平に下ろし、手甲を上に向け、食指を伸し、°しにて兩臂を上屈し、肘を側平に張り、食指も共に握りて、手甲を後に向け、°うにて兩臂を前平に伸しながら、手甲を上に向け、拳にて打つ如くし、°てにて兩臂を下ろし、拳を開きて、手を股側に在らしむ、(°おは目的物の想像、°しは次の運動の準備にして、°う°ては討つことを表意す、)

(四) °い○°ん○°い○°を、°で○°け○°り、

°いにて右方に側面しながら、左側より歩を起して、°りまでは六歩大圓形に(衆人圓列を作り居らば其列線上を)前む、但し終りの一拍子には歩を前むることなく、左足先にて圓心に向ひながら、右足を附けて停止す。(出立を表意す)

(五) °に○○°い○○、°き○°だ○°で、

°にて(一)の初めのもと同樣にし、°いにて兩臂を伸しながら、側平に下げて、掌を下に向け、°きにて兩上臂を下げ、前臂を凡そ直角に屈して、胸前に運び、左掌を上に右掌を下に向け、兩掌相對して其間に寸餘の空隙あらしめながら、左前臂を右方より左方に、右前臂を左方より右方に平回し、°だにて再び回はし、°でにて尚一度回はし終るや否や、臂を伸して兩手を股側に下ろす、(°に、°いは天高く地廣きこと、°き、°び、°だは團子を作れることを表意す)

(六) °な○○°つ○○○、°い○○○°る、

°なにて左足を一歩前め、右足を引き附け、上體を稍、前に傾けながら、兩臂を前に突出し、掌を上に向けて兩手を重ね、°つにて左足を一歩退け、右足を引き附け、上體を正直に復しながら、臂を下ろして兩手を股側にし、°いにて又上體を稍前に傾け、°るにて上體を正直に復す、(物を貰ひて扈從する事を表意す)

(七) °き○°も○○○、°お○○○°る、

總て、(六)に同じ、

(八) い○げ○の○も、°お○°る○°よ

(四)に同じ、(軍隊の出發を表意す)

(九) °は○°し○°い○°さ、°た○○°り、

°はにて兩手を輕く握り(衆人圓列を作り居らば、皆

手を繋ぎ）て前面斜上に擧げながら、左足を少しく振り出し、い゜にて左足を一歩踏み退け、さ゜にて右足を一歩退け、左足を引き附けながら、兩手を股側に下ろし、た゜にて兩臂を伸ばしたるまゝ前方より可及的高く擧げて、兩掌を相對せしめ、り゜にて兩臂を前方より舊位に復す、（進退動作の繁忙なることゝ歡喜することゝを表意す）

（十）お゜○ー゜○○○、せ゜○○○て゜、

お゜にて食指を伸したるまゝ、他の四指を握りながら兩臂を前平に擧げ、手甲を上に向け、ー゜、せ゜、て゜、にて（三）のー゜、う゜、て゜と同樣にす、（三）の過去を表意す）

（十一）と゜○た゜○○○、な゜○○○そ゜、

と゜にて（一）の二度目のし゜と同樣に兩手を腰側上にとりながら、頭を右下方に傾、た゜にて頭を起しながら左下方に傾け、な゜、そ゜にて以上の動作を再びす、（見廻はすことを表意す）

（十二）き゜○○○さ゜○○、あ゜○○○き゜、

き゜にて頭を正直に起しながら、十分後方に傾け、さ゜にて前に傾け、あ゜、き゜にて以上の動作を再びす、但しき゜にて頭を正直に止め、臂を伸し兩手を股側に下す、（計算することを表意す）

（十三）く゜○○○つ゜○○、た゜○○○の゜、

く゜にて兩臂を側平に上て掌を前に向け（衆人圓列を作り居らば皆手を繋ぎ）つ゜にて兩臂を其位置より（一）の初のも゜と同樣にし、た゜にて兩臂を伸しながら、側平に下げて掌を下に向け、の゜にて兩臂を側方より下げ、掌を股側に附かしむ、）く゜は車輪の形、つ゜は積み上ぐること、た゜、の゜は堆きことを表意す）

（十四）い゜○が゜ひ゜○だ゜○、え゜○や゜○や゜、

（十五）さ゜○が゜あ゜○お゜○、え゜○や゜○や゜、

（十六）き゜○が゜な゜○く゜、え゜○や゜○や゜、

此三段の間は斷へず行進す、其法、い゜にて左方に側面しながら、左側より歩を起して、二十四歩大圓形に、（衆人圓列を作り居らば其列線上を進む、但し（十四）の初め、い゜の時、手を握りながら、兩前臂を

前平に屈し、手甲を外に向けて兩拳を左右相對せしめ、(十五)の初め、さの時、右臂を十分上屈し、左前臂を左方に回はして胸前に横たへ、右拳と左拳と相重ならしめ、(十六)の初め、きの時、兩臂を前平に突き出し、腕部を上屈して掌を前に向け、(十六)最終の一拍子には、歩を進むることなく、左足にて圓心に向ひながら、右足を附けて停止し、臂を伸して兩手を股側に下ろし、これにて『桃太郎』の全運動終る、『凱旋を表意す、即ち(十四)の反對の方向に進むは歸路に就くこと、いは曳き、さは推し、きは先曳することを表意し、最終に正面するは全運動終りて、最初の位置形狀に復するなり』

第二法、行進しながら始むるもの、

最初の用意は、第一法に同じ、

先づ右方に側面しながら、左側より歩を起して、間斷なく大圓形に、(衆人圓形列を作り居らば其線列上を)、前み、(八)の終り一拍子の瞬時、歩を進むることなく、右足を左足に附けて停止し、(九)のだの時、又左足より歩を起し、(十三)の終り一拍子の瞬時、又歩を進むることなく、右足を左足に引附けながら左足先にて右轉回して、脊方に向き、直に又左足より歩を起し、斯の行進中、第一法に據りて、脚部以外の運動をも行ふ、尙左の各項を見よ、

(四)、(六)は其始めと終りとに、向き變ふることを要せず、又、(四)は其終りに停止することを要せず、

(六)のな、(七)の(き)には殊更に足を進むることなく、

(六)のつ(七)のもには足を退けず、續て歩を進む

(九)、(十三)の始めには列生互に手を繋ぐこと能はず、

(十四)の始めには殊更に左側面するとを要せず、

(四)、(八)、(九)、(十四)、(十五)、(十六)は以上記載の外、全然第一法に同じ、

教育のこと

慈善のこと

化粧のこと

親の愛と女子の教育

學校と家庭。云ふ迄もなく連絡が必要で御座ひます、併し其方法等は學校によりて異つて居り、又た當局者も夫々意見ある事で御座ひませう、此學校（跡見女學校）の方針と云ふ譯でありません、單に私一個の考へを一二申せば、第一に兩親が眞面目に

▽其女子を愛する事を望みます。そうしませんと、兎角學校と家庭とが矛盾する樣になりまして、女子の教育に少からぬ影響を與へます、要するに學校丈女子の教育に骨折つても、兩親も冷淡で學校に托したから、我々は心配しなくともよいといふ樣では、到底完全に仕立て丶行くことが出來んのです、併し愛すると云ふても、偏愛と云ふ意味ではありません、即ち眞正の愛です

私の見る所を以てすると、女子が學校に入るに際し、當人が單獨で、其校に至り、規則を一覽して、無造作に入學を求めることなどは、隨分ある樣子ですが、自分の事は自分で定めると云ふことから云へば、よいかも知れませんけれども、これから女子としての高等教育を修める樣とするものは、未だ斯る確かなる意思あるとは思はれません、どうしても兩親が責任ある世話人と共に來て定める樣にしなければならんと思ふのです、私の見聞する所によれば單獨で來る者は恰ど下宿屋でもきめる樣な心持でまあ是位の學科ならばと云ふ丈で夫れ以上は何の考へもない樣です、それから愈入學しても三四日にして來なくなると云ふ樣な、無責任極まることがあるのです、それですからどうしても兩親や保證人と共に來て將來のことまでも充分に調査して、而して後に定むる樣にして欲しいと思ひます處が其

▽保證人が充分に責任を負ふて居ないものがあると云ふことです、さて一女子が入學する時に、保證人が共に來ますから、校規の事を語り、之を守れまた守らしめよと申しますと、一々承諾するはしますが、兎角行はれぬものが多い、例へば入學して三日もたゝざるに外出せよ云て來る樣なことが隨分あると云ふことです、入學して僅か二三日ですものそんなに用事のある筈はありません、然るに事實斯樣な人の多いのは察するにまア「樣子見」と云ふた樣な工合であらうと思ふのです、そんなに心配があるならば一層の事手元に置けばよいではありませんか、兩親や保證人が斯樣な風ではとても眞正の教育は出來ないではありませんか、それから前も申た樣に保證人と云ふものは無責任なことは隨分多いと聞いて居ます、例へば「私は捺印した丈で、本人の事は少しも存じません、親と知り合ふて居る所から名義上の保證人となつた譯でと云ふ樣なのは實に困ります、保證人が斯樣に責任のない者であるですから、學校の方でも適當な教育が施し能はぬではありま

せんかどうしても女子の教育に就ては父兄或は保護人が學校の責任の半分否なそれ以上を持つて與れなければならんのです、此邊は家庭で充分注意せねばならない所だと思ひます……「まア〳〵」主義で、學校に預けつ放しては駄目です、

▽學校に於ける監督者を充分に信用せしむるといふことはまた必要なことで御座います、これは生徒丈ではいけません家庭に於て先づ信用せねばなりませぬ。そうでないと師弟間の關係は圓滿ではありませんし随つて教育する上に大なる影響があるのです、(跡見桃子女史談)

家庭保護に就て

從來慈善事業として、貧者弱者を救ふ場合の如き、その一個體、又は一家内の或る一部に限られ、病める父とか、傷きし小兒とか、其哀むべきものゝ中心とも見なすべきものに對する場合多かりしが、種々の經驗を積みし結果、さる慈善法は却つて將來に禍害を殘す事多く、所謂慈善の精神に背く事のなきにもあらねば、それらの弊を矯むる爲め貧者弱者を救ふ場合には、其一人を選出せずして、直に其家庭に及ばさんとする者、近來漸く勢力を占むるに至れり、かゝる制度は英國スコツトランドに於て夙に行はれなり、又エディンバラー市の如き昨今其勢力隆隆たるものあり、昨年白耳義博覧會舉行の時、同國内務大臣ルシマーヌ氏を會長として催されたる萬國保護會に於て決議されたる處によれば、第一小兒婦人の救護を目的とし、姙婦の保護、出産時の保護をなし、第二保助を要する全家庭の保護第三肺勞、精神病者の保護、第四弱者及び病者の保護の四ヶ條を根本となすべしといふに基き、我國の一部婦人界にも、其趣意に因り家庭保護會の設立内議あるやにきく、愛國婦人其他戰時中設けられたる婦人團體の如き、其戰時作業を平時作業に移して、是等慈善事業に斡旋せば、其効果計るべからざるものあらん、

皺と脂肪

皺と脂肪とは離るべからざる關係があるといふのは皺のよるのはだん〳〵寄る年波と共に脂肪が少なくなり、皮にゆるみが出てくるからであれば勢ひ、この脂肪の資料たる營養物を用ゐねばならぬ。彼の營養不足のものと營養十分なる人とを比ぶれば、明かである。それに又平生身體に樂をして居る、もの厚着をして居るもの、湯で顔を洗ふものなども皺のよること、それでない仕癖のものよりは早いさうであるから、日常運動を怠らぬこと、薄着に身體を慣れしむること、水で顔を洗ふことなどは、皺のより方を遅くするに必要なるばかりでなく、これが健康の爲めでもあり、健康が皺をよせつけぬことにも、なるのでもあるから、いつ迄も若々しき皮膚を保ちたくば、今の男女の化粧の多くは排斥すべきものと信ずる、佛蘭西の女子などには、橄欖油のクリームを顔や手に塗りつけて、皺の豫防をして居るものが多いさうであるが、それよりは、反つてその費用と時間とでスープか鳥肉、獸肉でも食し相當なる運動を怠らぬ方衛生、經濟美容の三拍子を併せ得らるべきではないか

家庭料理

梅園女史

鹽魚鹽物の鹽出し

鹽魚や鹽物の鹽を出して食する時には、椿の葉を大分切込で、水に入て置けば、いかなる鹽もぬける

自然薯の揚物

自然薯を、山葵おろしなどにて、摺おろして、擂盆に入てすりて、葛粉を少し入て、まぜて、胡麻の油にてあげます、丸く箸二本にて、くる〳〵と卷ながら取つて鍋の中へおとしなす、又細長くしす卷たやうにして揚ます、之を普茶料理では山藥卷といひます、やまいもの卷たのといふわけです、

さつまいも

さつまいもは、薄葛煮にいたします、新芋は煮まして、其汁へ煮立た所から葛粉のとかしたのを、つぎこみますのでさうしますと味がよくたべられます、煮方はいろ〳〵にして御覽なさい、

其の外には葱と共に煮ましたのを南蠻煮と申しますまだ油で細く切たのをいためても用ひます、又風呂吹にもつくります、湯煮して馬尾篩にてうらごしゝて茶ゆと申しますと、布巾で一かたまりを包みまして、捻りましてかためまして、捻りめを右の手にて押へまして、左の手の大指の腹で一寸下の方を押つけまして、茶巾の形にいたします、勿論味には砂糖と鹽がまぜてあります、

ひもかわ豆腐の拵へ方

豆腐の水氣を絞り、(これは豆腐屋に依賴すればよし)これを俎板の上に置き、刺身又は薄刃庖丁を以て能くねり付け、充分に豆腐のねれたる時、(豆腐のねれたるや否やを見るには、豆腐のうちに粗き粒の如きかたまりなくなればよし)蒲鉾板の如き小板に美濃紙をぬらして張り付け、尤も板巾だけの紙にてよきなり、この上に右の豆腐のねれたるを薄く五厘位の厚さに塗付け、厚薄なきやうに庖丁に水を付けて平かになでつくるべし、此の如くしたる上に、又

紙を敷きて又豆腐を塗り、といふやうに四度又は五度にして、一番終りに紙を張り置き、さて鍋に湯を沸し、蒸籠をかけ、其うちに小板に塗りたる豆腐を板に付きたるまゝを入れて蒸すべし、時間は大凡五分間位なり、但し指先にて豆腐の上部を押して見、堅き時は蒸し上りたるものならば、直に蒸籠のまゝおろして中より板を取出し、擂鉢の如き器に水を充分に張り、其中に板に付きたるまゝ浸し込み、少時して取出し、板より剝がし、俎の上に置きて、上の紙より靜かにはがし取り、豆腐を崩れぬやうに注意して重ね合すなり、然して小口より極細く蕎麥或は饂飩の如く切り、薄醬油にて下煮し、椀種につかふのである、

精進の椀盛なれば昆布煮汁を用ひて仕立るのである煮汁の取方は青板昆布を、表裏を一寸水で洗ひ、直ちに水に浸して置き、二十分位して後、其汁を煮立て用うるのである、採合せものには、小松菜を茹でたるを一寸位に切りたるものと、小椎茸を茹でたるものなどでよきなり、これ等はちよつと手輕になし得らるゝものなり、

鯖の練麴漬の拵へ方

鯖をひと鹽して、骨腸を去り、麴一鹽を酒の煮きりを入れ、ねかしおき、よくなれたる時鯖を漬けるなり、もつとも何の魚にても此法にて漬けるを得べし、

獨活味噌漬の拵へ方

獨活を二日三日陰乾にして、ぐな〳〵するやうになりたる時、三年味噌(赤味噌の三年越なり)に漬くべし、凡て百日ばかりにして風味佳なり、

魚肉よせあげ物の拵へ方

何の魚にても、骨と皮を取り去り、能くたゝき、扨てこれと同じ程の麵包の心とまぜ合せ、鷄卵を以て餅の如く製し、胡麻の油にて靜かにあぐべし、但しまぜる時に鹽を入るゝなり、

湯波卷法蓮草の拵へ方

法蓮草をゆで、醬油だしわりの露をふくませ置き、

中揚ゆばを、砂糖醤油すこしづゝ入れてざつと煮るべし、さて引あげて（かくの如く十枚位づゝ煮るなり）此ゆばを、板の上へのせて置き、法蓮草をざつと絞りて、其上にのせて卷くなり、巾は二枚をまき付くるなり、厚さ五六分位に小口切にして、鉢肴のつけ合せによろし、

さつま芋の拵へやう

さつま芋を長線に切り、水を入れてよくさらし、ざるへあげて水氣を去り、鍋に味淋、砂糖、鹽を入れて煮つめ、右の芋を、露のかぶる程づゝ入れて煮るべし、煮かげんは、火の通りたるを度として、鍋をとりおろし、團扇にて扇ぎ、さましながら器へとるべし、あまり多く入ればくづるゝなり、右の芋をゆばにて卷くこと、法蓮草の如くすべし、

芋のつみいれの拵へやう

薯蕷、又は松露芋（馬鈴薯のこと）又は甘諸等を湯煮して皮をむき、擂盆にて擂り、饂飩粉を少しませ、よくねり、組板の上にのばしおき、器に鹽水を拵へ、庖丁の先にてすくひとり、串にて鹽水に入るゝなりそれより鍋に入れ、湯煮して汁の實に用うべし、

牛肉吸物の拵へやう

牛肉を、庖丁刀にてよくたゝき、ちいさく丸め、三四、さゝがしうどすこし、是を薄鹽、したじに仕立、椀に盛りたる時、粉山椒を少し入るべし、

婦人の内職

◎レース編物　此頃方々で目に付くのは『自宅内職婦人募集』とか『編物教授』とか云ふ廣告であるが、此等は何れも皆絹糸又はレース糸の編物細工である、此の内職婦人募集には、元方と取次所の二種あるので、元方へ行けば正當の賃金が取れるが、若し取次所へ行けば、賃金の二割若しくば三割は之等の取次人に巧々とやられてしまふのである、ところが此取次所は僅の資本で巧いことが出來るから彼方にも此方にも廣告して人を集めて居るから、之等の内職をしようと思ふ人は、直接元方と取引するが宜しい、さて此内職は、年中間斷なくあるのと、仕事が綺麗なのとで、婦人の内職としては最も適當なものである、少しく針を動かす心得のある婦人なれば三日間も稽古すれば、銀貨入や手柄ぐらゐに差支なく出來るので、其他肩掛帽子チキタイ財布手袋などその込入た物でも、二三週間勉強すれば

出來る、此内職を初めるには、別に何の手續もないので、大抵何處の元方でも保證金として、一圓丈け預れば原料を渡してくれる、すると原料を受取つてから、五日以内に仕上げて、元方へ持て行けば、月末に賃金をくれるのである、收入は何程になるかと云ふに、廣告なぞには一日三四十錢になるとか、月收十四五圓になるとか吹聽して居れど、實驗した人の話では、最初は如何しても一日十二三錢程の收入だが、少しく慣れてくれば、二十錢から二十五六錢程にはなると云ふことで、尋常の者では到底一月十圓以上の收入にはならぬさうだ、目下の賃金相場を聞いたに、手提一錢二厘以上四錢迄、銀貨入一錢五厘以上七錢迄、肩掛五十錢以上一圓五十錢まで、帽子二十錢以上六十錢迄、ネクタイ五錢以上二十五錢迄、財布十錢以上三十錢迄、手袋七十五錢以上百十錢迄と云ふ事である、

◎モール飾 ▼凱旋リボン とは普通のリボンにモール玉と云ふ丁度兒供の手遊にする、南京玉の様な小さな銀色の玉を飾りに縫ひ付けたもので、近頃非常に流行するのである、さて仕事は如何ことをするかと云ふに、針に糸を付けて、其糸に此のモール玉を繋いで、それをリボンに縫ひ付けて、色々の飾を作るのである、此仕事は二三日も稽古すれば、誰にでも出來る、頗る容易な内職であるが、其代り賃金は餘り高くない、リボン一ダースの飾りをする賃金が、三錢ぐらゐから、少しく込入たので八錢ぐらゐにしかならぬ、然し一ダース三錢程のもの三ダースは極らくに出來る、少しく熟練すれ、ば八錢程のもの三ダースぐらゐは出來ぬことはない、初めの程は一ヶ月三圓程の收入よりないが、勉強すれば六七圓の收入にはなるわけである、

◎モール玉飾の手袋 これも亦モール玉を以て、手袋に飾りを縫ひ付けるので仕事は凱旋リボンと同樣である、此方の賃金は手袋一ダースの飾賃が八錢より三十五錢まで其仕事の難易に依つて區別があるので、これも最初は一ヶ月三圓内外の收入よりないが三四ヶ月も練習すれば、五六圓の收入には屹度なるさうだ、此の内職は問屋の方で別に保證金も何にも取らぬ手堅い人であれば、何時でも原料を渡してくれて、賃金は十五日と月末とに拂つてくれる、

◎封筒の糊貼 これは隨分以前から有る内職で、別に近頃新規に出來たものではないが、仕事が至極手輕であるから、老人でも小兒でも直ぐ出來る、頗る便利な内職である、整然と狀袋になる樣に裁ちてある紙を糊で貼て狀袋を作るのである、これを内職にするには、先づ問屋から狀袋になる樣に裁つたる紙、單の狀袋なれば一種、二重の狀袋なれば外面と内部との二種の紙とボール紙で作りたる型とを受取つて來て、箱か机を臺にし糊を淡くといて右に置き原料を臺の上に列べて、原料二三百枚づゝ先づ糊を附けて置て、ボール紙の型を中に入れて、手早く貼て行くのである、貼れたのは之を乾かして置て、乾いたら又底を同じく型を入れて貼ると、茲に始めて狀袋が出來上る、これを百枚づゝ揃へて、帶紙をして、問屋へ持て行くと、百枚に附て三錢宛の賃金が取れる、誰でも初めの間は一日に二三百枚程しか出來ぬさうだが、少しく慣れてくると、一日に五六百枚は譯なく出來て、最も熟練な者は、千枚以上を一日に貼るさうだ此仕事は年中あるから、仕事の断えると云ふ心配はない、問屋の主な家は淺草森下町の紙屋である（電報）

今昔十二ヶ月献立

◎御着座

一　王服（茶碗）

松葉昆布
呉竹茶
室の梅

一　御菓子（小皿）　新年河

鶏卵の白身、かんてん、葛、砂糖、牛乳の五種にて製したる一名「泡の雪羊羹」を平皿へ水形に流し込み、淺草海苔を加へてさゞれ石と見せ、之れに同製の國旗を建る（匙にて食す）

◎お正月

一　座附御吸物　本式雑煮

（枯かゝりし柏の葉に盛る）

炙餅
蕪六形大根
鶴の子芋
はらみ鮒
神馬草

（右の五種は汁なしに煮て鹽と梅にて味を附ける）

一　中置

（三度器に盛る）

青山椒
鹽

（これは清めの肴と云ひ食するものにあらず）

蓬莱飾

一　組合肴

四方海老
ころ柿すり身
柑子玉子
ところてん
たゝき午蒡

（小角に盛りかい敷に若松とやぶこうじを用ふ）

初午（本年の會頭）

一　盛分肴

（銘々盆に盛る）

松葉揚
よめ菜
三鹽漬
駒形
赤飯むすび

（松葉揚は生油揚の中へ蠣を入れて煮たるもの、よめ菜はからしあえ、三鹽漬は瓢簞、赤飯は道明寺製）

◎彌生の空

一　温々物

（五度器に盛る）

大蛤
さんしよ醤油焼
草の餅形バイ
白酒にて製す

◎釋迦の誕生

一　スープ　甘茶仕立

（湯呑茶碗に盛る）

（小うしの肉、メリケン粉、胡椒、鹽、バタに桂枝を加へて製す）

◎楪の吉例

鯉端午節日

一　造り

猪口に煎酒

わさび、からし、
若荷、萱草、
胡瓜
氷おろし
このわた

（七度器に盛る）

一　古酒吸もの

（熱燗酒にて製し吸口に蕗の薹を添ゆ）

◎二星の小田巻

一中茶碗蒸　　（二色 出汐 あなご附焼）

（玉子の白身とだし汁にて製し吸口にわさびと浅草海苔を添ゆ）

◎満月の空

一たき合せ　　鴨のたゝき　銀杏　キャベイシ　酒露子

（スープ、ソースにて煮る之れを大皿に盛りその中に玉子一個を割込みて月と見せる）

◎重陽

一冷しもの　　菊形林檎　バナナ　梨

（五度器に盛る）

◎御膳部

一御向焼物　　戎鯛

（小形の鯛の背より骨を抜きその中へ種々のかやくを入れて蒸し之れに葛あんを掛ける）

一御煮物　　天長節

（しんじよの中へにんじんを能く煮て入れ日章旗を造る、之れに土筆を入れてむしにて用ふる）

一御飯　　餅つき

（水取りの小餅をおろし大根とわさび、浅草海苔にておえる）

一御漬物　　新長漬

一御湯

〆以上

こゝろえ草

▽水の善悪を見分ける法　水を茶碗に一盃入れて、此れに石鹸をアルコールにて溶き、二三滴ほど落すべし、其水純粋ならば其儘なれど、若しも白き泡立つ時は悪水なり、

△松魚節を久しく貯ふ法　松魚節に清酒を少し塗りて、風すきの善き處へおけば、何時迄たちても虫のつくことなし、

▽茶碗其他焼物類に穴を明ける法　焼物類に穴を明けんと思ふ處へ、灸を一火二火すへて、其の跡を錐にてもめば穴明くなり、

▽庭石に苔を着ける法　石に苔を着けんとするには、牛蒡を示日切にして思ふ石を幾度も擦るべし、

▽梅の花を黒く咲かす法　梅の木を梅櫁木に接げば、翌年より黒く花咲くなり、

▽寝入りたる人に咎をさす法　寝眠たる人の胸の上へ、フクロの心臓と脛とを置く時は、何を問ふても答へるなり、

▽餅のかびざる法　酒を桶の内へ能く塗りて、餅を入れて息のぬけざる様に蓋をして置けばかびることなし、

▽石油箱の臭をぬく法　箱の臭みを抜くには、暫時炭箱になし置くべし石油の臭気ぬけるなり、



梅の一枝

花涙女史

築山とは名ばかりにて、土疲せ石頽れたるあたりに、哀れげに咲ける紅白の梅、花の數は少なけれど、庭一ぱいの花の薫り、物干竿に飜る百結衣の袖までが、何處やら床しい匂ひあるやうに思はれる、踏滅らして板のやうになりし駒下駄、引摺るごとく歩みながら、枝折戸開きて此荒庭に入り來りしは、年紀二十餘りかと見ゆる女、身には垢染みたる雙子織中形紅縞の袷衣に、縁の切れし唐縮緬友染の帶品よく結びて、久留米絣の前垂掛けたるが、手に赤い襷を持つたまゝ、春日燈籠の側に身を寄せて、餘念なく梅の花を眺めて居る、

折ふし門前に腕車の留まる響き、續いてがら〳〵と格子戸の開く音、『オヤ姉さんが歸つてよ、葭町の姉さんが歸つてよ』と、男の子が金切聲で叫ぶ聲、『ナニお鈴が歸つたつて、さう久しぶりに好く歸つたこと、ヲ、お鈴かい、好く歸つて來たこと、何うも久し振じやないか お父さんもお前、何んなに待つてお出なすつたかしれませんよ、さうかい、マア此處へお出でな、其處には火がないだらう、此處へお出で、お出でと云へばこゝへサ』と、老母は、さも嬉しさうな言葉、『姉さんお土産は』と又小供の聲、『それだから吉

ちやんには困ります、そんな事をいふものではありませんよ』と、老母が白い眼を剝ぐらしい、直ぐ側の奥座敷では、彼の是のと囂しき事言はん方なけれど、今の女は振向いても見ず、猶餘念もなく梅の花を眺めて居る、痩せて日影に凋むもあれば、優かに露に笑ふもある、其趣き言ふばかりなし、ツクヅクと眺め居たる女の顔は、次第々々に晴れ〴〵しうなりて、嬉しさに眉の根も動くばかりなり、軈て梅の花に頬を當てゝ、一ツづゝ薫りの深き淺きを試み、また佇立みて、餘念もなく眺め居る、脊は左のみ高きにあらねど、中肉にして肌の清きこと、すき透らんばかりなり、房々とせし緑の黒髮を當世風の廂髮に結びたるが、鬢の毛の一すぢ二縷亂れかゝるを花の如き唇に引しめて、時々舌の頭で玩び居る、眼の清やかさ、色の艶やかさ、何處と云ふて點の打ち處もなし、渡り鳥の聲美はしう庭の松の木に羽を休めて、睦しう遊び戯るゝさまの憐れにやさしきを見て、思はずにツこと打笑みし顔の嬋妍かさ、何にたとへんものもなし、

『お雪、お雪、お雪といへばねえ』と、例の老母がしやぎり聲、されど此女は振向いても見ず、『何處へ行つて居るのだらう、眞個に此れだから困り切るよ』と、愚痴やら小言やら大聲に叫べば、『家の姉さんなら坊が呼んでやるよ、お母さんが何んぼ大きな聲をしたからツて、姉さんに聞えるものか』と、言ひ捨てゝ走り出づれば、後には老母が『ほんに爾うじやらう、お前呼んで來てお呉れナ』いふ言葉の下から、『お母さんの頓狂な顔をなさること、ヲホヽヽ、アハヽヽ』何が可笑うてや大笑ひなり、七歳ばかりの男の兒、勝手口から駈け出して、聞えぬ耳と知りながら、『姉さん、姉さん』と、呼びかけ呼びかけ、うしろから脊中を叩けば、今の女は振かへつて『ヲヽ吉ちやんか』と言ひたさうな顔付、物は言へねど可愛らしげに、引寄せて額を撫でゝやる『アノネ、今ネ、葭町の姉さんがね』と、吉ちやんは色々

手眞似をして見せて、『姉さんが來たからね、お母さんが呼んで居るの』と、小指を出して手招きする、お雪は葭町の姉さんが來たと聞いて、今までありありと現はれし双の笑靨を、急に何處へやら引込ませて、眉を顰めて點頭いて居る『姉さん早くよ、アラお母さんが呼んで居るじやないか、ソラ此れが呼んで居るじやないか』と、小指を出して恐い顔をして見せる、

お雪は只垂頭いて、手眞似して駈けて行く裾はらはら下駄に梅の花びら一つ、

座敷には、此娘の妹にてお鈴といふ女、年紀十七八の美しく化粧したるが、身には糸織棒縞の立派な二枚袷衣に、紫繻子の丸帶薄色七子三紋の羽織、繻珍の裏をちらりと見せ、手綱染の紐胸高に結びて、緋縮緬の長繻袢、袖の邊り燃るが如し、長火鉢の前に更紗の座蒲團二枚重ねて、片手に鼈甲張の長烟管、片手に緋驪瀬の莨入ひねくりながら、姉の顔見てツンと横向く母親は煎花を入れて『さアさア、お煎花が出來ましたよ、鈴ちやんお前何を上げようねへ、御飯にしやうか、御酒にしやうか、それともお



前の好なお鮨でも取らうかねへ』と、襷突出して問ひかくれば、『お母さん何ですねへ御飯なんぞ食べに歸つたのではありませんよ、偶に來たのじやありませんか、何んか美味いものを奢つて下さいな』だからお前



に聞いて居るじやないか、ぢやア御酒にしませうよ、ねへ御酒が好いだらう」と、再び問へば、當り前さ御酒も正宗か澤の鶴にして下さいよ、惡いのは逆上ますからね』あア、好いのを買ひますよ、お前なんざアお座敷で好い御酒をお飲であらうからねへ、何うしてお父さんのお飲みなさるやうな、一升四十錢のは口へも這入らなからうねへ』と言ひかけて、火鉢の抽出から鬱金木綿の財布出しかけるを、『アラお錢ならありますよ、私がありますよ』と、帶の間から合財嚢取出して、『サアこれで何んか買つて下さいな、』と投げ出すを、押戴いて『夫れじやお前の方から奢るのだね、ヲホヽヽヽ、こんなに澤山、何を買へば氣に入るだらうねへ』と言つて、紙幣の皺を伸して居る『何んでも宜いぢやありませんか、それんばかりのお錢をさ、姉さんに買つて來てお貰ひなさいな』ぢやア爾うしませう、お雪や、お前ね、四つ角のお肴屋へ行つてね、此のお錢を出してね、分らない娘だねへ、此お錢を出してね、おさし肉を二人前とね、煮肴を二人前とね、自烈體ねへ、何故分らないのだらう、お鈴ちやん、お前ちよいと紙の端にでも書いておやりな』わかるやうにしてお遣んなさいよ、書役に雇はれたのぢやアあるまいし、』と、横を向いて煙草すばすば』

『それぢやアお肴屋さんを呼んで來るの、好いかい、これだよ、これだよ』と、肴の形をつくりて見せるお雪點頭くことは點頭きたれど、白い眼をしてお鈴の顔をジロリと見やりたるのみ、立上る氣色はなし、『お母さん、早くお遣んなさいよ、最う歸らねばなりませんから』、『あいよ、早く行つてお出でといへば、これさ何處を見て居るのだよ、好いかい、肴屋さんへ行つて呼んで來るのだよ、サア早く行つてお出といへばねへ』と、押出すやうにすれば、涙含んで淋しさうに立つて行く、

程なく肴が來る、酒が來る、火を起す、湯を沸す、燗が出來る、膳が並ぶ、母親は立つて居つ、罪のない

吉ちやんは姉に貰つた白銅貨五錢を懐にして、門前で蜜柑をむしやり〳〵、只氣の毒なは啞娘のお雪眞黑に燻つて竈の前で用をする『お雪、これさお雪、このお銚子をお鈴ちやんの前へ持つて行つてお呉れ、好いかい、これをお鈴ちやんの前へ持つて行くのだよ』と、鐵瓶から燗徳利摘み出せば、恨めしげに手に取つて、荒々しうお鈴の前へ突き出して歸りかゝる『お鈴は飲み乾した盃手に持つたまゝ『姉さんちよッとお待ちよ、用があるからお待といへばねい』と袖を引けば、立留りて、ニッコリともせず立つて居る『ヲヤ〳〵怖いこと、何うしたの、物が言へないの、爾う可愛さうねへ、お前さんね、序にお酌をするのだよ、私にお酌をして呉れるのだよ、アヲ爾うぢやないの、斯うしてお酌をして呉れるのだよ』と、下眞似をしても横を向いて、何處を風が吹くやらと言ひたさうな顔付『ヲヤ嫌なの、姉さん嫌なの』と、手眞似して問へば、當り前さ、と言はぬばかりの顔、腮を突出して逃げ出す『ほんとに不可好かないッちや、那んな不可好い不具はありやしないよ、お前さん誰のお蔭で食つて居るのだよ、皆な私のお蔭で食つて居るぢやないか、眞個に嫌な不具だよ、馬鹿、馬鹿』と、これも腮を突出して罵る、されど啞の一得は、何んなことと言はれても耳へ聞えず、耳へ聞えねば腹の立つこともなく、何日も座り心地の好い竈の前で、さし垂頭〳〵いて座つて居る、見れば眼元に、一雫、消え〳〵殘る燒火の煙、鬢の邊り掠め行も哀れなり、

『おッ母さん、お前も一杯お飮みなねへ、お相がなくッちや淋しいワ』と、また座敷からお鈴の聲『あいよ今にネ、このお肴が燒けますからね』『そんなものは何うでも好いから、早く此處へお出でなさいよ』『あいよ、忿しないことねへ、今行くといへば行きますよ』と、お母は立ちかゝる、されど燒肴が氣になつてやら、又小腰に屈つて見直して居る『おッ母さん今日はまだお湯へ這入らないワ』『何だつてまア、早く這入つてお出で、まだ早いから早く這つてお出でなさいよ』と、老母斜ならず心配の樣子なり『だッて、お酒を

飲べてお湯へ這入ッちやア、後が逆上てならないものヲ』と、火鉢に憑れて上機嫌なり、『ぢやア家で腰湯をお使ひな、幸ひ私も顔を洗ひたいから』『あゝ爾うしやうよ、おッ母さん』『それが好い、夫れが好い、今にお湯を湧すからね』と、漸く肴に火が透る、

袖を引いて『これお雪、お前ネ、氣の毒だけれどもね、お鈴ちやんがお湯を使ふといふからね、お前水を汲んで湯を湧してお呉れな、このお釜に一杯あれば好いのだから、好いかい、お湯を湧すのだよ、お鈴ちやんがお湯を使ふのだから』お雪は垂頭て顔も上げず『これさ何うしたと云ふのだよ、何故强情を張るのだよ、早くしないとお鈴ちやんが怒るからね、サア早く水を汲んでお呉れな、私がお湯は湧すから』と、手を取つて無理遣りに引起せば、前まぬながら起上りて、襷はいや〳〵掛けたれど、庭の入口に身を寄せて、袂の先を噛んで居る、母親も下りて來て『サア早く水を汲んでお呉な、私も手傳ッて上げるから』と言ふ聲座敷へ聞えてか『何を言ッて居るの、何を手傳ふの』『なアに此方の事さ、サア早くよ、早くよ』と、急き立つる母の顔、お雪涙ながらジッと見詰めて、腹立たしげに手眞似して何やら訴ふれば、母親は氣を揉んで大手を振つて打消さんとす、されどお雪は聞き入れず、頻りに口を動かしながら訴ふることを何ぞと聞けば、遙にお鈴を指して『おなじ同胞に生れながら、お鈴は仕合な滿足な身體、肱を枕にする風をして『身を沈めて親々へ毎月の貢、家の大切な妹には違ひなけれど、偶々歸りし時は、家中大手古舞しての饗應、御主人さまでも在せられし如し』自ら口を掻むしるやうにして『私でもこの口で物さへ言へなば妹に負けず、どのやうな事も出來やうものを、物一つ言はれぬばかりに、姉と生れし果報は持ちながら、現在妹の酒を飲む下物い買物、物の言はれる人と違ひて、他人の中に價の應答、羞かしいとも、苦しいとも、物に譬へんやうはなし、そればかりの事ならまだしも、妹に湯まで汲んで、下女に劣つた事をせよと

は、餘りと云へばお情ない爲され方、何故物が言へぬであらう、何故物が言へぬであらう』と、舌を噛んではさめ〲と打泣く哀れさ、母親も聲を濕ませて、今に物の言はれる時もあらう、何事も此母の言ひ付け、妹の爲に汲む水でなし、といふ意味を手で見すれば漸う點頭いて手桶片手に、悄々として井戸傍へ前み寄る、

日は何時の間にやら暮れて、夕月の影庇の上に明かなり、お雪は井戸端に手を掛けて、片手に涙拂ひ落しつゝ、目を釣上げて屹度座敷の方を睨み、又思ひかへして繩を手繰る、一つ繰りては泣き出し、一つ繰りては齒を噛み占め、恨みに暗き井戸の中つく〲見遣る折しも、後から袖を引くものあるに、驚いて振り返れば、弟の吉ちやんが笑ましげに、『これを上げやう』と、さし出すは梅の一枝、『ヲヤ好い花じやのう』と言ひたげに、打見やる一瞬間の心の長閑さ、お雪そのまゝ死にたきなるべし、

鯛の浦

酸漿女史

帝國議會がはじまると間もなく、房州鯛の浦で鯛の集會があつた、汽車汽船の賃錢も入らないので、諸方から鯛が集つて來て、種々雜多の會議がはじまる、折ふしおのれは此海上を渡つて參つたので、隨行の浦島太郎に此の集會の模樣から、彼の會議を通辯させた、さて此鯛會に集鯛せし面々は豆州錦ケ浦ノ熱海鯛總州銚子のれんこ鯛、紀州和歌山のわかさ鯛、同園浦の蛭子鯛、尾長鯛、淡州北浦のあま鯛、勢州松坂のいそあま鯛、備後因島の黒鯛、阿州和佐浦の京がれ鯛、備前岡山のこせうごろ鯛、筑前福岡のちしや鯛、土佐浦戸のともゝり鯛、讃州八島のびんくし鯛、備中玉島のねぶと鯛、尾州常滑のうみご鯛、防州岩國の

こゝろ鯛、泉州堺のたばめ鯛、駿州田子の興津鯛、奥州南部の鼻をれ鯛、若狹の小鯛などで、其賑やかなことは一通ではない』

遙かの太洋に鯨が潮を噴くを相圖に會議がはじまると、奥州の鼻をれ鯛が演壇に上り、拙者は御覽の如く少々鼻をれであるが、まさか人の目につく程とは思つて居なかつたに、陸上の或る紳士が東京へ參り、八百善で一杯飲んだと思召せ、ところが其時の料理に用ひた鯛が、あまり上等でないから、拙者等を引合に出して、こんな鯛は喰はれぬ、チト値段は高いが奥州の鯛を使ふがよいと云ふと、料理番の云ふには、奥州の鯛は鼻をれであつて、味もよくないから餘り東京では賞翫しませぬとの事で、その紳士は流石に國贔負、何で奥州の鯛に鼻が折れて居るものか、とプツプと立腹して拙者等を取調べると、全く鼻が折れて居ると我を折つたことがある、それから拙者等は不評判となつたのであるが、味と鼻の折れたのは別であるから、名譽恢復をしたいと思つて居ります、すると興津鯛は意地わるく、ヒヤ〜〜と發聲する。さうすると諸鯛も之につゞいて拍鰭する有樣であるから、鼻をれ鯛は鰭もち不沙汰で演壇を引退がる、

次に演壇に現はれしは若狹小濱の小鯛、唯今鼻をれ君の述懐談がありまして、小鯛の癖にチト生意氣でありますが、大鯛の癖に鼻が折れ、味がまづいなど、非難をされるは、平素の行ひと食物がわるいからであらうと思ひます、拙者などは此通り小鯛の分際でありますが、こゝらに注意して居りますから、實に人間社會に賞翫されますと、あまり横柄な事を云ひますから、東京で巾を利かす銚子のれんこ鯛は、オイ若狹の小濱鯛いゝ加減に生をよせと叫びながら、小鯛を引おろさんばかりにして、其のあとへ演壇にのぼつたい、れんこ鯛はなか〜〜鯛望がありますから、一同拍鰭をいたす、さて近頃人間社會もだん〜〜吝嗇になつた所から、なか〜〜大鯛をつかひませぬ、むかしは筏燒などにせられて、大きな鉢に威勢よく盛られたもの

であるが、兎角輕便とばかりで銘々盛か流行するので、小鯛の方が賣れ口がよく、ヤレ子持小鯛の、尾立小鯛の、冠小鯛のと實に氣色のわるい事である、チト大鯛の連中は、海の中で齷齪するのも能でないから氣を揃へて網にかゝらうではないか、さうすれば小鯛などは見向もされるものではない、すると豆州の熱海鯛がノウ〳〵と發言する、れんこ鯛はなぜ我輩の言に不同意かとなじつたので、然らばそれにて辯じやうと、ツカ〳〵演壇に上り、唯今はれんこ鯛の演説で強ち不賛成を稱へる譯ではありませんが、今の人間社會では小鯛位の料理が相當して居る、それは大鯛であれば、一尾で立派な懷石が出來る先づ皮が筏牛蒡を卷いて燒いたのを八寸にし、其下の身をかき鯛にして向になり、うしほにして椀になりゝ、てりを引いて喰燒になり、鰭燒を吸物にするなど、なか〳〵小鯛などで出來る藝ではない倂しなか〳〵さう旨く料理してくれるものがない、鎌倉時代ではまな箸で切られ、隨分よい心持であつたが、此頃はなま温い手で亩切であるから、實に鯛冥利にもつきないで、どうも人間社會へ出る氣がせぬ、それも名人の手にでも料理されるならまたしもであるが、似而非料理職人の手にでもかゝらうものなら、鯛の爲に料理法をわやまり傳へられるやうな事があるので、子孫の鯛の爲にもならない、それでれんこ鯛君に不賛成を唱へた次第であります（一同大拍手）

次に現はれたは關西惣名代と云ふ顏つきをしたる、紀州和歌山のわかさ鯛、唯今熱海鯛君の御演説で、殘る所はありませんが、一言申加へたいのは、偶によい料理人の手にかゝつて燒物などになる事がありましても、旨い所を喰ふて呉れず、土産に持つて行かれして、翌日味の變つた所を喰はれ、この鯛はまづいなどは誠に恐れ入る次第で、近頃それが爲に引物に鰹節が用ひられるは何と心外な話ではありませんか、さればとて折よく人間社會へ出れば洒落れて、花見鯛などゝうしほで賞翫されることもある、それは時の運不

運で強ち引込んで居るばかりがよいとも云へません、誠に御慶事などのあつた場合には、つとめて漁夫の網にかゝらうではありませんか、されば貴重な身軀であるから、うか／＼とは網に掛らぬやう御注意ありたいと述べ終つた、いづれも大賛成を唱へて其日は散會となつた、それからおのれは房州館山に上陸し、翌日膳部に上つた鯛を見ると、銚子のれんこ鯛であつた、鯛の浦の演説鯛であつたか、それは疑問である

滿州婦人の情態

滿洲に行つて最も異樣に感じたのは、婦人の情態である、其一二の例を擧ぐれば、或時私は北方の或百姓家に宿つた事がある、其家は農家と云つても六品の位ある家柄で息子は未だ僅かに十二の子供であるのに、十七になる妻君がある、又其隣家の息子は十四で、その奧さんは二十であると云ふ樣に、實に可笑しい配偶てす、是れは勿論親の方から貰つて遣るのであるが、夫れにしても何故年長の妻君を貰ふのかと、其理由を聞いて見た處が、年少のものでは用の間に合はないといふシテ見ると滿洲の妻君先づ我幼稚園の保母が子供を遊ばせるやうなものであらうと思ふ、夫れから滿洲の結婚は矢張り淸國各地に行はれて居る賣買結婚であつて、例へば日本で結納の交換をすると云ふ場合に、彼方では金を出して婦人を買ひ、婦人は則ち其金を以て衣裳道具靴などを拵へるのである、聞く所によると彼方の婦人は立派な靴を澤山持つて居るのを名譽として居るといふことだ夫れで此年長の妻君は正妻で二度目に貰ふのは所謂妾だが、是れも勿論賣買であるから從つて容貌の美しいものは値段が非常に高い、斯樣な風習であるから、滿洲の婦人程憫れな境遇にあるものはないので、生殺與奪の權總べ、夫の手にある、從つて隨分斷腸の悲劇を聞いたこともある、

教育は固より少しもない男子の爲めには寺子屋風の學堂があつて、大きな聲を出して本を謠つて居る、謠て居るといふのは妙だけれど、丁度此方で唱歌を歌ふ樣に、讀むと云ふよりは寧ろ謠て居る、教師は村夫子とも云ふべき人で、若し生徒が脇見でもして居ると、鞭を以てピシヤ／＼と打つ、是等の學堂も戰爭中は大概閉鎖して居つたが、長く軍隊が滯つて近所が靜かになるとまたソロ／＼歌ひ初める、何樣本を讀んで居るかと云ふと、商人は商賣往來、百性は農業往來と云ふやうな四字聯句の薄い本で、夫れが濟むと論語でも讀む、しかし是れとても男子に對してのみ、婦人に至つては殆ど全く教育がない、若し餘程富裕な家庭で篤學の人が娘に學問をさせたいと云ふ場合には、家庭教師を聘するのであるが、是れは家を給し、職を給し、其上俸給も非常に高いのであるから、餘程立派な人でなければ出來ないのである、先づ一般には漸く一二三の數字が讀める位で概して無學文盲と申して宜しい、



日本畫の特長

子爵　秋元蔚堂

日本は美術國であると云ふ評も多くあるやうであるが、どうしても日本畫は完全なものではなからうと思ふ、縦令それが良いにしても、極めて規摸が大きいとか、壯厳なとか云ふことには、到底嵌らないだらうと思ふ、人物に於ても山水に於ても日本畫は到底完全なるものとは云へないと思ふが、唯々日本畫で最も取るべきものと思ふのは、一の花鳥の圖である、これは或一種の趣味を具へて居ると思ふ、然し其花鳥も近くで見る花鳥のことであつて、山水中に看る所の花鳥の如きを云ふのではない、其は何う云ふ譯かと云ふと、凡そ其物自からを描く時には、日本の畫家は平素筆意筆力と云ふことを、心懸けて居るから、筆の冴へて鳥などに大に活動を與へる場合がある、尤も西洋畫も、塗るといふ間に亦自から筆意も筆力もあるさうですが、兎も角日本畫の如く輕妙なる所に於て一の趣味を具へて居ると思ふ、

又一方より考へて見ると、人の眼と花鳥其物との隔離が近くなればなる程、其間に空氣とか光線とかの作用が、人の眼に感ずることが尠くなるから、西洋畫の様に影などを多く取らない方が、却つて出來榮も美しいのであらうかと思ふ、然し此花鳥の畫は優美であるが、迚も大作には適せず、又洋館のやうな他の装飾品の濃厚なる所に交へて見ると、如何にも薄つぺらに見えて、餘り面白いものではない、さう云ふ譯でどうも日本の畫で大なる成功を得やうとするのは、難いことであらうと思ふ、故に今後の繪畫は歐羅巴の學術的研究から成立つた方法に依るより外致方がない、さうして其中に自然と日本畫の特色

を具へて行くのが、一番好い方法だらうと思ふ、唯自然に日本畫の特色を具へるといふては、餘程漠然たる話のやうであるが、昔の畫に就て云ふて見ると、狩野家で描く圖にある風雷神とか、壽老人とか云ふやうなものは、イマヂ子ーション即ち想像をリアライズしたものである、然るに今後は想像を現實するのでなく、學問上より來た優美なる考とかを、成るべく完全に現實することを努めるのが、日本繪畫を維持し發達せしむる一の方法であらうと思ふ、又日本畫の特色とか精神とかを現實すると云ふのは啻に人爲を以て現實せるばかりでなく、繪畫を作製しつゝある間に、自然に現實して來ることも云ふのである、昔から風韻とか氣韻とか云ふことを言ふ、其所謂風韻氣韻なるものが果して有るか無いかと云ふて見ると、決して無いとは云はれぬ、其證據には竹田、華山等が描いた畫には、風韻があるが、北齋曉齋の描いた畫は、上手は上手であるけれども風韻がないと人が云ふて居る、成るほど實地を見ると如何にもさう見えるが、さてそれなれば風韻氣韻はあるに違ひないとした所で、其風韻氣韻とは、どう云ふものを指すのであるかと云ふと、之を言葉を以て言現はすのは少々難かしいが、要するに自分の考では、風韻氣韻といふものは、其人の平生の思想の高尙なとか、學問の豐富なとか云ふものが、人爲（バイウイル）を以てゞはなく、繪畫を作製する中に、自然精神作用に由つて現實されて來るのであらうと思ふ、語をかへて云へば熱心に意を作畫に注ぐ間に我れ知らず、其人の平常の人格が、恰もメスメリズムの如く筆端に現はるゝものを、世人が風韻とか云ふのであらうと思ふ、

さうして見ると前に云ふた西洋の方法に依つて、日本畫を作製するにした所で、矢張り日本人の氣性とか精神とか云ふことを、精神作用に因て、風韻氣韻の現はれる如くに之を現實することは必ずしも出來ないことはなからうと思ふ、其方法は何であつても其特色さへ失はなければ、それで可いのであると自

分は考へる、前に云ふた如く、筆力筆意も繪畫に對
する大切なる交通機關ではあるが、是は機關中の一
部分であつて、其全體は方法の上に存するのである
故に自分は完全なる交通機關即ち西洋畫法に因り、
完全なる思想を現はすことを希望致すのであります
畢竟思想を總合したるものが畫題となり、畫題の現
質が、即ち畫であるとすれば、物質的完全の畫とし
ては、裸體美人であると云ふことになるかも知らぬ
が、又必ずしも理想的の美は裸體畫にのみ限ること
もなからうと思ふ、文章にもフイキユア、ミール、
メタフヲア等のある如く、畫にも種々變化のあるの
は趣味を多方向ならしむる所以なれば、單に露骨に
裸體畫のみを畫くを以て、能事終れりとするにも及
ばぬことゝ思ふ

春庭　　大羽里子

庭つ鳥ふみなわらしそふたつみつ
かきねの小草もえ出にけり

女子教育と音樂（平安朝時代）

東儀鐵笛

降つて平安朝は如何、平安朝も初の頃は、遣唐使留
學生留學僧と云ふものもあつたが、後には菅原道眞
の上奏に因つて、遂に留學生留學僧とか、或は遣唐
使とか云ふものは廢せられたが、音樂は依然として
隆んで、殊に藤原氏の全盛の當時、音樂は頗る勃興
した、苟も朝廷の上に趨走するもので、音樂を學ば
んものは一人もなかつた位、竟には音樂者より勝つ
て居る非凡なる樂僊が、公卿の間に輩出した、其人
々は先づ源信、或は藤原貞敏殊に有名なる博雅の三
位、藤原の師長、藤原宗輔、武人では新羅三郎義光
平安朝の音樂が旺盛を極めたから、上は天子より下
は衛府の官人に至る迄、皆音樂を學んだ、それで教
育の一部分には、兎に角音樂の有つたに相違ない、
此時に女子の教育に音樂の有りしか何うかと云へば
女子にして音樂に堪能なる人が有つた、則ち清和天

皇の御代に、廣井女王を初とし、石川の色子と云ふ樣な人々は殊に音樂が上手で、女王の如きは催馬樂に巧みであつて、時の士大夫が皆此人に就て催馬樂を學んだ、今日にも催馬樂が傳つて居るのは、全く女王の賜物である、此女王の薨去になつた時には、皆惜んで哀慟の聲が市中にきこえたと云ふことである、是亦音樂と云ふものが、女子の教育にあつた一例、以上私が引證した處の例を、皆少し上層の方で、それでは下層の方が一向分らん樣だが、上層若し斯くの如くなれば、下層の女子の教育の中にも恰も今日三味線と云ふものが、女子の間に在るが如くに、下層には下層の音樂が必ずあつたらうと思ふ、併しソレは何う云ふものがあつたか、充分調べて居らぬから解らぬ、併ながら元教育と云ふものは、この頃は専ら上層のみであつた樣であるから、一般女子の教育といふことはどうであつたか解らぬ、天皇の御教育にも音樂があり、皇后も糸竹の道を學ばれた、其外以下宮中に伺候する者は、皆音樂を心得て居つた、是は平安朝の隆盛なる時の事で、殊に平氏の如きは、僅の内に天下を取つた其際にあつてすら教育の一部に音樂があつた、輙ち維盛卿の青海波或は敦盛卿の青葉の笛、重衡の如きは捕虜となつて居つて朗詠を謠ふた、藤原氏に代つて天下を握取した時分にも音樂を用ひた、然れども此時分の音樂は、寧ろ遊興的で道德性を涵養すると云ふ、所謂教育の方面、即ち正しい方からいへば、少しく遊藝に傾きかゝつて居るかの疑ひも有る、けれども兎に角平安朝の國民としては何うしても音樂をしなければならぬと云ふ樣な事になつた、併し其音樂が正しいものであつたとも、不正なるものであつたとも言はれぬ或は正しくない處が混じて居つたかも知れぬ、平安朝を過ぎて頼朝が覇府を鎌倉に開いた時分も、なかなか音樂は盛んであつて、武人として音樂に巧みなるものも隨分あつた、殊に有名なるは畠山重忠、工藤祐經が多政方に神樂を學んだと云ふ事である、それより北條足利の時代にも、其時代の音樂が有つた、

のみならず隨分教育として音樂を用ひた、尊氏の如きも好んで音樂を遣つた、これで音樂を教育に用ひたる徳川氏以前の狀況が略御解りなすつたらうと思ふ、但し其間に音樂の變遷も有る、催馬樂、朗詠とか云へるいろ〳〵のものも起つたが、なほ其事を曰へば教育上音樂の關係を逃ぶるに止まらず、音樂の歴史になるからそれを略することゝしやう、

濃茶の點て方

茶道利休流家元　黒澤宗月

爐平手前

座敷の準備既に整ふて、主人合圖をなせば、客は順に入り、飾りつけを見たのち座につき上席より咳して著席の合圖をなせば此時主人は通ひ口をあけ出でゝ挨拶し、客もこれに對して總禮す、次に主人は先づ建水を持出して通口を締め、建水は勝手の方におき、身繕ひして貌を正し、精神を靜め、柄杓を左の手にて柄の節の所の中程を取り、右の手に持ちかへ蓋おきを左の手に取り、右の手へ移し、柄杓は左の手に持ちかへて、膝の上に構へ、蓋おきは左の方の前におき、左りにかまへし柄杓を、右に持替へ之を蓋おきの上にのせ、其柄を引て、下におき、然る後客に對して、安座の挨拶をなす、此時客は總禮し、挿花を賞め、又は什器などを賞む、主人は、これに對して、輕く挨拶し、まづ茶碗を左の手にとりわけ右の手にて前におき、次に、茶入をとり、茶碗と、膝との間におき、茶入の、袋の緒をときて、其口をわけ、袋のまゝに、茶入を、右に持ち、把り上げて左の手にわけ、袋を開き、右の手にて茶入を取出しこれを、膝の前におき、次に、袋の形を通じ、其留緒を右に廻し、袋を建水の向ふにおき、更に帛紗を行に捌き、左に茶入を把上け、蓋をぬぐひ、これを右方の前におきつけ、次に、帛紗を眞に捌き、茶杓を把り、行に拭ひ、(拭ひ方に、眞行草の、三種あるなり)之れを茶入にかけ、次に、茶碗を出して、

茶入れとおき合せ、帛紗にて、水指の蓋にのせ柄杓を取り、帛紗を、右に移しかへ、柄杓を構へ右の手にて、釜の蓋を締め、其の上を、帛紗にて、ゆの字の如くに拭ひ、次に蓋をとりあげ、湯氣を切り、蓋おきの上にのせ、帛紗を腰にはさみ、柄杓を右の手へ持替へ、湯を飲み、茶碗へ入れ、其柄杓は、左の手へ持替へ、帛紗にて釜の蓋をなし、柄杓を蓋おきへのせるなり、次に、茶せんを把上げて茶碗へ入れ、茶筌とうしを爲し、茶筌は元の所へおき、茶碗を右の手に取上げ、左の掌へのせ、能く滌ぎ、右の手へ茶巾を把り、茶碗の湯を建水へあけ、茶巾にて廻りを、三ふき半に拭ひ、中をゆの中に拭ひ、若し深き茶碗なれば、中より拭ひかくて茶碗を右の手にて、膝の前におき、茶巾を取出して、たゝみ直し、之を水指の蓋へのせる（棚物の時は、臺の上へ、載するなり）次に、手を清めて、後に茶匙を把り、左の手は、茶入を取り上げ、蓋を把り、柄杓の柄にのせかけおき、茶をすくひ出し、茶杓を茶碗にのせおく、普通に濃茶一人前、凡そ五分程づゝの、割合にて、すくひ出すなり、斯くして後、茶入の口を拭ひ蓋を爲し、茶筌とおき合せ、茶匙を把上げ、左手に茶碗にわしらひ、茶匙にて茶をならし、茶匙につけた茶を、茶碗の縁にておとし、其茶匙を、茶入の上にのせおき、柄杓を取り、帛紗を膝より外して、釜の蓋を取り、之を蓋へのせ、湯を汲み、少しく茶碗へ入れ、次に柄杓を釜へかけ、茶筌を把り、能く湯に合せて、茶筌を其まゝに茶碗の、内側の左の方へよせておき、又湯を汲み、左の手を、茶筌にもち添へ、湯を茶筌の穂にむけて、能き加減に入る、次に柄杓を釜へかけ、然る後茶を點つるなり、斯くて主人は茶を點てる茶碗をとりあげ、左の掌にのせ右の手をあしらひ、一膝くりかへ茶碗の表を客の方にむけ、釜の環付を見合せて出しおき、懷中帛紗を取り出し、茶碗に並べて出す、上客は一膝繰出で、先づ帛紗をとり、次に茶碗をとり、前へ引き、自分と二客の間なる疊の縁外へ帛紗を下におき、茶碗は其

上にのせておく、斯くして茶の點加減を見る、一同も之を拜見し、其拜見終れば上客は次客へ禮をなして、右の手に帛紗をとり左の掌にのせ、茶碗を取上げ、帛紗の上に載せ、戴きて、一口のむ此時主人より服加減は如何にかと問ひ客は至極服加減よき旨を答へるを法とす、第二客は上客の一と口飲みたる節に次禮して少しく膝を上客の方へ繰むけて、待てば、上客は三口半喫み、其飲口を右の食指にて左の拇指にて、右へ、また中指を左へ總て三遍拭ふて其手を懐紙にて拭ひ、茶碗の表を前へ廻し少しく膝を第二客の方へくりむけ、茶碗を手より手へ渡して禮をなす、此時第二客は其茶碗をうけて戴く、次に茶碗の請取渡しは末座まで皆同樣なり、若



此時婦人の相客あれば、會席順序の如く、茶碗、帛紗をも其間に並べて送り禮をなすなり、

主人は客に對して服加減の挨拶濟めば、茶碗の二客三客に廻る間に、直に柄杓を右に把り、之を左に移し、帛紗に中仕舞の蓋を閉ち、帛紗を腰につけ、柄杓を建水の跡におき、茶碗の末座まで廻りたるを待ち、姿勢を正し、蓋置を出し、建水を進め、柄杓を左に持ち、帛紗にて釜の蓋をとり、蓋置へ載せ、柄杓を右の手に移し釜へかけ、茶巾を釜の蓋の上に直し水指の蓋を把り、茶碗の戻るをまつ、此時茶碗は末座まで廻り、茶をのみきりたる時は、茶碗を上客に還す、上客はまた茶碗を把りあげ、香

を嗅ぎ、順に末客まで廻せば、一同おなじく香を嗅ぎ、終りて末客より之を上客に戻す、上客は其茶碗を二客との間におき、次禮してこれを我前にとりよせ、茶碗の形及び表裏とを熟覧し、了りてまたもとの如く二客との間に直し次に帛紗を見て同じく二客以下へ順に廻すなり、二客以下は又次禮して上客の如くす、この間に上客は茶師の氏名と茶の銘をとひ又は茶の佳良なる事、ひき方の精密なる事を賞し、茶碗の由緒を尋ねなどすべし、末客見終りてのち上客へかへし、上客は例の如く少し座を進め、末客と斜に相對して、之をうけ向を直してもとの位置にかへすべし、

茶碗かへりたらば、主人は帛紗を懐中し、茶碗を常の如くとりわげ、香をかぎ、香口を右へ廻して前におく、此時客より總禮すべし、主人はこれをうけて次に湯をくみ、茶碗へ入れ、右の手にとりわげ、左の掌へのせてよくすゝぎ、建水へ流し、前におき、薄茶は追てさしわぐべき旨を告ぐ、客はまた總禮にて之を受く、それより主人は水をくみ、茶碗へ入れ常の如く茶筌をとりてすゝぎ、もとの所へおき合せ茶碗を右にとり、左の掌へ移し右に茶巾を持ち、建水に流し、茶巾を茶碗に納めて前におき、茶筌も茶碗に入れ、帛紗を眞に捌き、茶匙をとりて拭ひ、帛紗に茶のつきたるを建水の上にて拂ひ、又茶匙を帛紗にて拭ひ、茶碗へのせ、帛紗を腰にはさみ、右に茶碗をとりわげ左にて疊の大切目を割りておき、柄杓を眞にもち、水を釜へさす、此水のさし方は、一度か三度か又は五度と、奇數につぐを法とす、斯くして湯返しして湯をきり、柄杓を蔭に廻して左に移し手にて釜の蓋をしめ、柄杓を蓋おきへ引き、次に水指のふたをしめるなり、此に云ふ柄杓を蔭に廻すことは、爐の塲合にて風爐の時には陽に廻すなり、陰と陽との取扱ひ方は、實際に學ぶの外なかるべし、また水指の蓋をしめるにも、塗蓋なれば下の方を拭ひ、陶器なれば拭ふに及ばず、斯くて水指の蓋をしむるなり、三種即ち茶器、茶匙、及茶器の袋の拜見

を乞ふ、主人はこれに應じ、柄杓を建水の上にのせ些しく引下げ、蓋置を右にとり、左の手にて柄杓の柄の下へおき、茶入を右の手にて身の前へおき、左の手にて茶碗を大切目に直し、帛紗を行に捌き、茶入の蓋をとり、中を改め、蓋をしめ、帛紗にて蓋をふき、廻して肩をふき、帛紗を懐中にし、一膝座をくり、右の手にて釜の右に鐶附の通りへ三つ一に割り左の一へ茶入を出し、更に膝を元へ直し、茶杓をとり、草に拭きて、中央へ出し帛紗を腰に挾み左の手に袋を把り、右の手にて茶匙の次へ並べおき、膝を元へ繰り、柄杓を左の手に把り右へ移し替へ、蓋置を左にとり、右の手を柄杓の柄の下へもち、建水を左に持ち、勝手口へ至り、建水を下におき、蓋置も下におき、柄杓を建水にのせ、勝手口をあげて出で、次に茶碗を引き、次に水指を引き、通口にて三種の客より返り來るをまつ、上客は主人が建水をおきしときに、三種を引きとり、吹禮してのち、まづ茶入等を疊縁の外へおき、懐中より帛紗を出し、身の前におき、茶入を帛紗の上に載せ、とくと形を見右に持ちて左の掌にのせ、右の手にて蓋をとり、帛紗のうへにのせ、懐紙を出し、茶入の口へあて、底を一覽してわと蓋をなし、次客へ廻す、此時もまた疊の縁の外へ出す、次客以下の見やうは皆上客に做ひ、順に廻して末座にとおき茶匙及び袋も同樣に巡覽し、一同拜見終れば末客より上客へ持參し、上客これをうけとり元の座へ折かへしにおく、

三種を客より返すとき、主人これを受取り、此時客より總禮し、上客は先づ茶入以下の由來及び品質等を尋ね其次に茶匙も同樣に尋ね、袋は切地の由緒なども尋ぬるなり主人は一々これを答ふれば、客はまた箱及び添書などあらば之れを拜見したしと請ふべし、主人はこれに應じ、直に三種をもち、通口へ戻り、一禮して、箱并に書類あらば持出で丶客に示し次に菓子盆、煙草盆を持出し、客と共に樂むべし、此時主人より、喫烟ありたしと挨拶あらば、總禮すべし、暫くして薄茶を進むるなり、

女鑑新聞

紀元二千九百六十五年　西暦一千九百四年　清暦光緒三十一年
明治三十九年一月一日月曜日　きのごみ

▼投書　この新聞紙面にも和歌俳句短文を歡迎す、續々おもしろき作を投稿あれ

▽定價　一部の代價にて一部の讀者には自然山八で見らる、以也
▽廣告　一行十五字詰金二十錢但し四位に限る

發行人　紫式部　編輯人　清少納言　印刷人　赤染衛門

發行所　東京築地　株式會社國光社

論説

女子のたのしみ

若き妻女の殊更にもてつけたるやうに粧ひたゝ凝らしたる、又は反對に姿容を取亂したる、孰れも見よきものにあらず、何となれば紫女が筆にせられたるやうに、女子がまことに已れと、能く容づくりするやうになるは、三十に近くなりたる程の齢にこそあれ、廿歳に足らぬ程は、粧粉の經驗にも乏しく又其の善惡を見分くる眼力も薄き故に、粧ひを巧みならしめんとすれば、却りてふつゝかに見えて、世に云ふ『嫌み』さすものなり、況して時の流行を追ふとて、我には似もつかぬ色模樣の衣裳、これ見よがしに着飾りたるは、夫の愛を引かんとや、猶ようせずば、重りかならぬ心に、他人にも眼とゝめられんとにやと迄、口さがなき京童には、爪彈きせらるべし、もとより『女は己を悅ぶ者の爲にかたちづくる』などさへ云ふ事ありて、わが至親至愛の夫の爲に、容づくり麗しくせんと勉むるは、左もあるべき事ながら、すべて物は何にもよらず、しだり顔なるは惡し、何となきさまに、同じくは天然の儘なるやうにて、たゞ其心用ひ疎ろならず、儀容端正清雅にして、出る時も入る時も、否打ち解けたる寢姿さへ愼み深く、奥床しくぞあらまほしき、また嫁して頓て子どもなど餘多持ちたる少婦の家事何くれと取り紛れたる儘に、髮掻き亂し、顔の色煤け黑み、衣服垢つき汚れなどしたる、こも亦いと淺間しきものなり、子どもの寢たる束の間にだに、など髮取り上げ、顔洗ひ清めて夜更くる窓の燈火のもとにも、衣服の繕ひはなさゞるぞ、總じて事業しとて身のまはりのたしなみさへ、爲しあへぬ人はいつも云ふ彼の時の使用法の拙きにこそあれ、時の利用をよくすれば、人の一日かゝる事は、半日にて、人の一時かゝる事は、寸分間にて出で來るものなり、それには物に順序を立てゝ熱心にさつくと爲す習慣を作ることに勉むべし



文苑

金鵄の光　大塚楠緒子

野寺の鐘の聲きゝて、糸ひく手をばとゞめつゝ、あはれくるゝか今日の日も、今朝の別れは夢なれやかたの草かご取おろす、おきなも空を打あふぎ、心ひとつの道さして、今はいづこを行くやらん、ともに語らふ賤が屋の、入日さしそふ軒の下、勝どきあぐる聲よりも高くうたへりにはつ鳥。かへり來りぬ腕なれて、骨打ち、だけ足なへて、朝日きらめく門のべに、いでゝ迎ふる父と母、我子の面をまもるなり、むれにかゞやく勲章の、金鵄のひかりまばゆげに、老のまなこを驚らして。

敍任

京都府第二高等女學校教諭　高橋清一
任京都府第二高等女學校長

女子高等師範學校助教授　西岡嘉藏
同　近藤耕藏
同　助教諭　竹島茂郎
同　助教授　林蝶
任女子高等師範學校教授

女子高等師範學校助教授　谷田部順子
任女子高等師範學校教授

雜報

◎女子芝山會の創立　ニューヨークの諾伯、ススマン氏に就て久しく洋畫を研究したりと云ふ高橋勝藏と云へる人は、此度竹井房子、荘原うのえ子等閨秀畫家と共に、芝公園八號に芝山會なるものを起し、専ら女子和洋の繪畫を教授なす由

◎女子豫備校の創立　物理化學の専攻家なる、外山修三氏は小石川下富坂町十八番地に、今回女子の豫備校を設け數學、理化、國語、漢文等を授け女子大學、音樂學校女子高等師範の入學並に物理化學等の、文部省檢定試驗に應ぜんとする者の爲に便を計ると、

◎東京府女子師範學校の生徒募集　同校に於ては、本科第一學年公費生徒、私費生徒通じて八十名を募集す第一種志願者は、先月限りなれど、第二種志願者は本月十日に孰れも郡市長に願書を差出すべしと、而して入學試驗は二月十日より四日間執行する筈なりと、



◎女子事務員の講習　神田橋外なる府教育會内東京女學講習會にては、今回女子事務員講習科を設置し、各官廳會社銀行其他學校等の事務に從事せんとするものを養成し、卒業の上は就職の紹介をも爲す筈にて、去月十六日始業式を擧行し、毎日午後六時より三時間づゝ二ヶ月にて結了する豫定なりと云ふ、

◎九十九歳の老媼　丹後の舞鶴字寺内堀端嘉吉（四十三）實母とめと云ふは、明けて九十九歳の高齢なるが猶矍鑠として高下駄を履き、外出を爲す程にて、耳は些か不自由なるも、眼は未だ確かなりと見え、針のめども自在に通して、裁縫を爲し居り、一家は傘の製造を業とし、至極睦じく生活し居る由

日本女子大學

▽附屬小學校及幼稚園　も愈本年四月より開設するに決し、森村豐明會より數萬圓の寄附を爲したる篤志を紀念する爲め、豐明小學校豐明幼稚園と稱し、現に生徒幼兒の募集中なり、

▽豐明小學校　は尋常小學科四學年高等小學科二學年にして、計六年の修業年限なり、

▽生徒の定員　は凡そ三百名（男女）

▽學費　は入學料金二圓授業料一ヶ月二圓

▽豐明幼稚園　は滿四年より小學校に就學するまでの年限とし、

△幼兒の數は凡五十名

通信

清國華族女學校

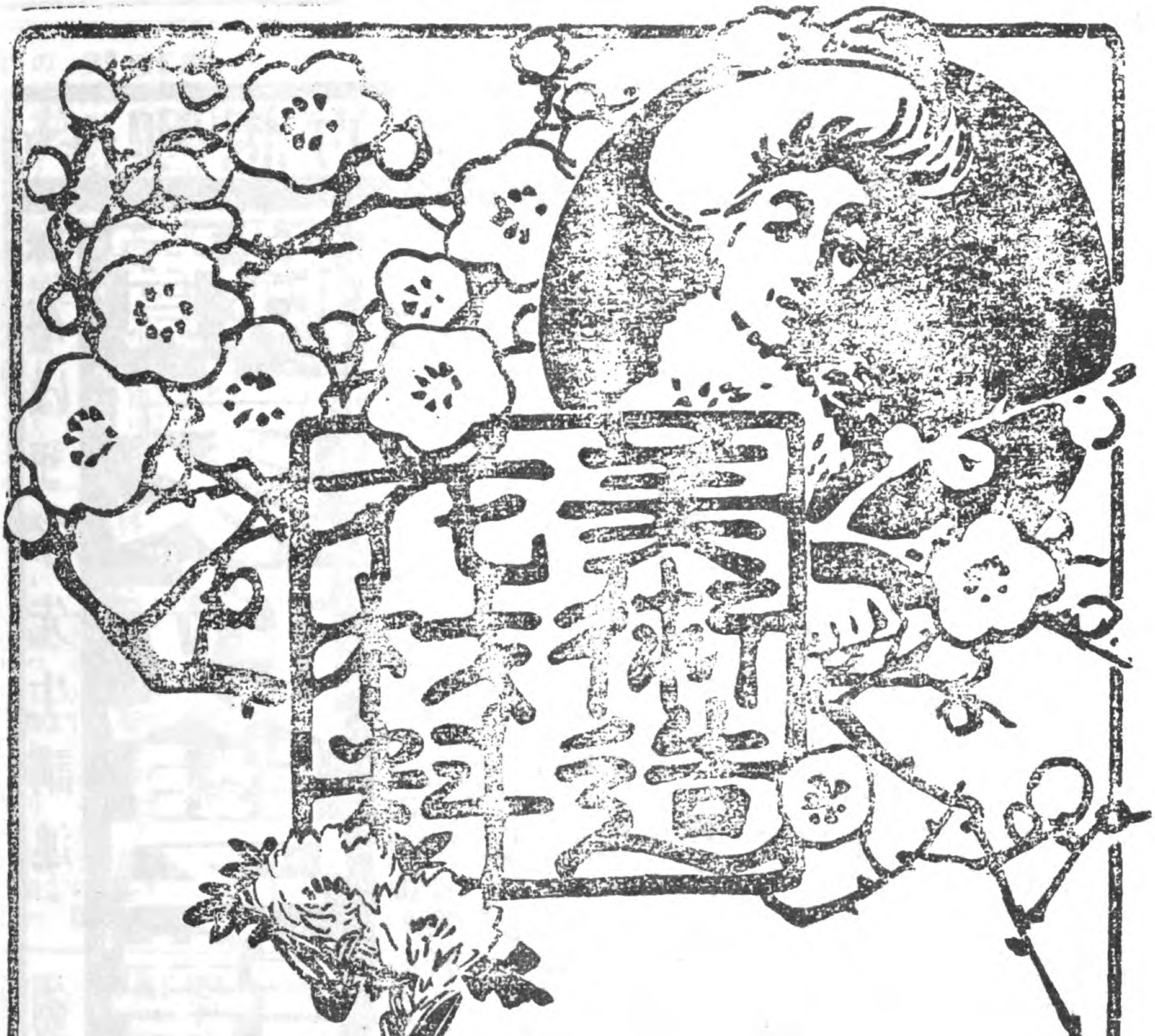
清國は曩に華族學校を設立して、皇妣及大官の子弟を入學せしむるの擧ありしが、更に華族女學校を立て、華族の女子就學を計り、不日創立を見るべく、西太后最も熱心なるよし、

◎歐洲婦人服の改良說　萬國婦人服改良會に於て、醫學博士オルトマン氏は、歐州婦人服は一般に窮屈にて婦人の衛生を害し、運動の自由を奪ふのみならず、健全なる美人なし、宜しく復古して寬濶にせざるべからずと演說せりと、

◎日本の少女と柔道の妙技　近來の事なりとか、紐育市に於て花瓔（こは不詳）と云へる少女市中を歩行せる折、一白人之を見て餘りの可愛らしさに、何の氣もなく言葉を掛けて、一寸其肩に障りしに此の少女は渡米して間もなき事とて、一圖に白人が揶揄たるものと思ひ込み、柳眉キリ〳〵と怒色を面に現はしつゝ、平素手練の柔術にて、目にあまる程の大の男を抛り出したる爲、白人は不意を喰つて呆然たる折しも、巡査が駈けつける、人は黒山の様に立つ、一時の騷動甚だしかりしが、兎に角、其男はレデーに向つて無禮の擧動ありしものと認められ警察に拘引さるゝ身となり、翌日の裁判双方の意思解けたれば、其の儘無事に濟みしも、此の事の市中に傳はるや、各新聞は少女が大の白人を四五間も投げ飛ばしたる繪畫を掲載し、大に柔術の妙技を喧傳せりとぞ、

舞踏と音樂界

料理を割烹、世帶を家政、踊を舞踏といふ世の中に、ハイカラの跳梁こゝに至つて極まれり、扨此ハイカラ風俗の中にても、一番危險の嫌ひある舞踏即ち西洋の踊は東京體育倶樂部の舞踏講習會一番に繁昌せり、此會は加藤子爵夫人鐵子會長といふ丈に、蜜を慕ふて寄り來る蜂仲間は、貴族の令孃、女教師、女學生、陸軍軍人、寫眞道樂家、銀行家、帝國大學生、早稻田大學生、明治大學生等にて、男はもとよりコスメチックに頭を固め、鼻めがねに眼付を嶮しくさせるといふ代物多しと、又西洋音樂も昨年以來頓に流行を見るに到りしが今東京市中にある音樂教授所様のもの、重なるものを列擧すれば、神田區にては、女子音樂傳習所（多田房之助）高折音樂講習所亞雅音樂會（清國留學生）東京音樂院（天谷秀、所謂芙蓉會）本郷區にては音樂教授所（天野初子、同愛子）牛込區にては音樂教授所（中島六郎）奥好義方（宮内省雅樂所員）小石川區にては多梅稚、麹町區にては納所辨次郎、日本音樂團（堤正夫）成樂舍（金須高之進）芝區にては濟美音樂學校（赤星國清）芝唱歌會（小山作之助）淺草區にては音樂講習所（三澤すて子、來馬たつ子）等にて、以上の外京橋區に前田久八氏主任の東京音樂會、本所區東京体育會附屬音樂會あり何れも五十名以上の生徒を收容して洋樂を敎授し、猶日暮里に女子体操音樂學校あり、東京府教育會日本体育會にも音樂講習所あり、又私立日本音樂學校と云ふもの神田にありて、五百の男女生徒を收容す、其他音樂家の會合として明治音樂會なるものあり、而して其の生徒は何方も男女の學生七八分を占め、男子の側には場所によりて、清國留學生多く、神田牛込區の下宿屋の二階よりオルガン、若くはヴアイオリンの聲するは、大方は清國留學生の奏するものなり、但し右留學生の如きは、專門的に攻究するは極めて稀にして、何れも一時の慰み半分なるが多しと



各女學校御用

附屬品並ニ造花器械類一式

營業目錄御入用ナレバ往復端書
ニテ御申越被下度候

東京市日本橋區横山町一丁目拾六番地

天野卯兵衛

電話(特)浪花一六四三番

肺病患者に告ぐ

私儀多年肺病に罹り九死の難に際し偶々新發明の一奇藥に依りて全治せるを以て洽ねく世の同病者を救ひ度素志に付望の方は郵券二錢封入御照會ありたし

肺病

申込所　東京府下荏原郡入新井村不入斗

川名助次郎




御用諸品
學校
體操器械
S.A TRADE MARK
ANDO-SHOTEN
No.5 Urajimbo-cho. KANDA. TOKYO
S.A
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、八八〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
謹賀新年
東京神田裏神保町五
S.A.安藤商店
体育用品
電本 484
御用 體操器械
ピンポン改良室内テニス（旅行用）
一號一箱 二、〇三〇
二號同 二、二三〇
三號同 二、三五〇
四號同 二、五一〇
同用テーブル 上等一臺
拾参圓 並等一臺 九圓半 一
號大人用
テニス用ラケット一組
一號大人用 一三、〇〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同（小學用） 四、七〇〇
婦人用 六圓
同二號（一號） 七圓
改良櫻一重枠ラケット一組
一號 拾参圓参拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
テニス組一張 一、七五〇ヨリ二、九五〇迄各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

社會

西眼に映する日本婦人

日本の女子は、支那其他東洋諸國の女子に比すれば、非常に美しい位置に在るけれど、我英國の女子に比すれば、大分不自由な物である、彼等は小供の時分から、擧動言語總て和一點張りで訓練されて、他人の前で大きな聲を出したり、高い響などさしたりする事を嚴禁せられて居る、そして又小供の時分から、其母が嚴密に監督して料理法、裁縫法、育兒法等、家事一切の事を敎へられて居るけれ共其成長して後の仕事は、極めて簡單である、日本の家庭には英國の家庭の如うに、座敷に椅子、机、書棚、暖爐と云ふ如うな器具がなく、富有者と雖も、極質素な生活をして居て此簡單の家の中で、日本の女子は、淸潔に優美な生活を送て居る、凡世界中に、杏の如うな眼をして居る日本女子程、靜かで、樂しさうで、又よく働く婦人は無いのである、

日本にては、衣服の流行が激しく變はらない、それで日本の女子は其着物を色上げしたり、縫ひなほしたりして、幾度でも著る、之を屑籠に投げ入れるのは、非常な年數を經てからの後である、そして其衣服が實に働きよく出來て居て健康的の者で、先づ謂はゞ、よく發達した常識的衣服である、

高等教育は女子に不必要として、まだ發達して居ない、そして日本の女子は大抵十五六歳になると、學問を止めて結婚をするのであるが結婚と共に、女子の愉快な生活は終を告げて了ふ、英國では女子の愉快は、結婚以後に在るのに、日本では其れと反對です、なぜとなれば、日本では結婚すれば、女子は全く男子の奴隸となつてしまふ、加之花嫁は單に花聟の奴隸となるのみならず、花聟の母に從て、其命令に從はねばならん所が其姑母と云ふが大概は、嫁いぢめをするので、女子は結婚後多く困難をするのである、

日本の女子は早く年をとり、早く醜くなる如うである、是は早くから結婚して家政の重荷を負はされるからであらう、

日本の女子は、其夫と共に社會に出る機會がなく、又智識上共通の趣味を持て居ないから、結婚後の幸福は、寧ろ夫と共に享くるにあるに非ずして其子供と共に居るのに在るのです、併し其子供と云つても娘であれば、其成長と共に他人となつてしまうのである、要するに、是をわが英國の女子と比較するに、到底其自由、幸福の點に於て比らべ物にならない、思ふに英國の女子程、幸福な地位にある者は、世界中にありますまい（小谷文學士談）

花道要點五十則（松月堂古流）

折柴園主人

▽第一　席と花器とは花の相應すべき事肝要也、

▽第二　立居静かにして席次の規則正しかるべし

▽第三　主意客居東方面隨方面など、生花出生の口に色々傳われども先づ明りにて是を定むべし、

▽第四　花幷に器物をよく洗ひ清めて又水をも清きを用ゆべし、是を三清と云ふ、尤も器物の前後を糺し、居りを究めて、水をも七八分ばかり入置きて生くべし、

▽第五　花器幷に花臺の居様は、床の深さによりて前四分後六分・前六分後四分、いづれも見合すべし、但し掛物の竪横人物等の向き樣によりて心得肝要なり、

▽第六　花配りの用ゐ樣花器に付ていろ〳〵傳わり、一寸以下の細口類には花配なし、一寸より四寸迄は中に一本止を用ゆべし、

▽第七　圍かゝりの花は三段目骨體の花形をよしとす、利久、道安、庸軒の先輩は此處を善くせられたり、

▽第八　書院向の花は、二段目分體の備の所作としるべし、但し分骨混合も一入よろし、尤も床の割よく〳〵心得らるべし、

▽第九　花形に眞行草あり、席と花器とによりて辨別すべし、

▽第十　釣舟、朝、夕、夜、出、入、泊等の形能々稽古すべし、

▽第十一　花器は當流廿六品、並に代々是心軒好の品を用ゆべし、寸傳にかなはざる品は用捨すべし

▽第十二　薄板、垂撥、習具、花黹、鋏、小刀等も當流に用ひ來りたる品を用ふべし、深秘の割出しあるゆゑなり、

▽第十三　總て草木の出生に隨ひ、當流の規矩を備ふべし、但し二重品の生方等よく心得べし、

▽第十回　専ら水際を奇麗に根本のしまりよく心

得べし、

▽第十五　花の陰陽を合せて生成す事肝要なり、

▽第十六　夏の花は廣口物殊更よろし又水際も少し高く生て凉しき姿を見すべきなり、

▽第十七　冬は廣口物より沖置筒二重などよろし又水際も低く生べし、

▽第十八　庭前にある花は來客の生花に用ゆべからず、但し貴人の所望によつて生くるは別段なり、

▽第十九　花なきも三種、又は木物ばかり三種生ける事遠慮すべし、

▽第二十　葉物は五行の生方なれども、是を五體に生成す時は走りの花形にして、體留めは眞行草何れにても其時に隨ふべし、

▽第廿一　時候に先達をば珍花と賞し、時候に後れたるは殘花なり、但し歸花、時しらずなどは珍花と賞すべからず、しかし歸り花を生る席もあれども猥りにすべからず、

▽第廿二　床の花は床椽より外へ枝葉を差出すべからず、又飾り道具を枝葉にて見切るまじきなり、

▽第廿三　床柱の花も床より外へ出すべからず、又掛物の中縁より長くは出さずと心得べし、

▽第廿四　獅々口の月の輪には、枝葉花の付つぬやうに心得べし、

▽第廿五　月の輪より枝葉花を貫通する事あるべからず、

▽第廿六　掛物の畫に草木の花あらば、生花を指合ざる樣に心得べし、尤も繪と同じ色を用ゆべからず、

▽第廿七　掛物の人物の面をば花葉枝にて見切るべからず、

▽第廿八　掛物の禽獸の面をば花枝葉にて見切るべからず、

▽第廿九　掛物の畫賛人の名印の所を花葉枝にてかくすべからず、

▽第三十　夜分の花は白きを用ゆべし、若しなき時は、黄か又は薄色にても苦しからず、但し黄と白

とは夜分には見分けがたき故に一瓶中には遠慮すべき事なり、

▽第卅一　紫苑、干射、女郎花の類は根本の大葉を必ず用ふべく、しからざれば出生を遣ふなり、但し女郎花の根葉は三府の花屋にて得がたし、故に他草花を體留に遣ふて二種生とすべし、女郎花一種のときは必ず根葉を遣ふべし、

▽第卅二　總て草木ともに高く生ずるものは高く生るべし、又短く生ずる物は低く生べし、但し一年生長物、又四六等色々差別あるなり、

▽第卅三　花形奇麗なりとも、名の知れぬものは用捨すべし、

▽第卅四　一花一葉卓下の花は、皆傳以下の人は猥りに生ぬものと知るべし、

▽第卅五　櫻と牡丹とを花王の傳と云ふ、

▽第卅六　花の器に納るゝ工夫を専にすべし、能く納るゝときは風情自らとゝなふ、枝葉花を惜み、切捨つるをいとふ時は業にあらず、猥りに切捨つるは、花を殺ずなり、此所よく〳〵練磨すべし、

▽第卅七　花器の古きとても異様なる象ち、又怪しき品は用ゆまじく、新しきとて象よきは捨つべからず、

▽第卅八　客席には珍品たりとも、花器に定まらぬ名の知れぬ物は用ふべからず、但し大會杯にては出所のしられるは用ゆべし、

▽第卅九　垂撥は張床をいとふてや、それ故に壁床或は屏風杯にても用ゆべし、又掛の替り又中釘なき床に用ひて花を生るものと知るべし、

▽第四十　板床には薄板をしくべからず、但し少しにても足あるものは苦しからず

▽第四十一　丸き花器には角薄板より、又ゆき長菱形もよろし、

▽第四十二　角の花器には丸き板も據なきときは地紙形もよろし、

▽第四十三　懸の花器の花席生の作法あり、悉く師傳をうくべし、

▽第四十四　花を生終らば枝葉に露を打べし、花にはあまりかゝらぬがよし、

▽第四十五　掛花の露は少し打べし、雫のたるをばいとふ故なり、

▽第四十六　四月より八月迄は花器にも露を打べし、但し花臺板類はよく拭て露をおくべからず、

▽第四十七　竹と磁器の花器には隨分露を打かくべし、但し青磁の花器には、露を打かけざるが古例なりと心得べし、

▽第四十八　唐銅類若くは籠と瓢との花器には露を打つべからず、

▽第四十九　張床の花には露を打つまじきなり、

▽第五十　出生にあるべき様にため直して挿すを上手といふなり

日本音樂學校の消息

昨今閉鎖されたりと取沙汰せられたる、神田區錦町日本音樂學校々長山田源一郎氏より、本誌記者に宛て左の書信ありたり、

拜啓陳は頃日某々新聞紙上、日本音樂學校閉鎖云々の記事相見え候處、右は事實相違致し候に付茲に大畧を開陳致度候、抑も男女兩性の共學に付ては、方今教育社會の一問題に有之候處、音樂教育就中合唱の如きは、男女兩性の結合を必要條件とし、之を否定する能はざるは少しく事理を解する者の首肯する所にして、官立東京音樂學校に於ても既に之が必要を認め、現に實行中に有之候、日本音樂學校が從來採り來りたる方針、亦此理由に他ならず候、然るに如何せん輿論は其理由を認むるも、猶兩性の共學を以て頗る危險多しと致し候、此事たる將來民間に音樂學校を經營せんとする者の大に注目すべき問題と被存候、從來同校の兩性取締に就ては、嚴重なる注意を拂ひたるにも拘らず、往々世間の誤解を受け大に迷惑を感じ居候、依て此際斷然男女生徒を分離し、各々別個の學校となし、差向き女子音樂學校を起し、基礎を固くし、學則を更め取締を一層嚴重にし以て將來の發展を期する覺悟に有之候（後畧）



源頼朝の女大姫君

文學士　小林雨塔

我が邦の歴史を繙き行く中、味氣なき浮世に流轉して、悲慘なる運命に遭逢せし女子を見る事少なからず、凡て往昔は、女子の地位甚だ高からず、かよはき身に生れながら、千々の思に苦しみ、そを撫育し保護し呉るべき親兄の爲め、却て女子として最も貴ぶべき情を毀り、愛を棄て、一生を悲涙の中に終へしものまゝあり、殊に世に英雄豪傑と呼ばれ、其大才雄略を讃せらるゝ人の子女にこそ、其政略の犧牲となりて、賤の女の知らぬ慘苦を喞つものはあるなれ、今余の傳せんとする源右大將頼朝の女大姫君は其一人なり、

大姫君と史には傳へたれども、其本名は知らず、母は後に尼將軍とたゝへられし政子なり、其生まれしも何時か定かならねど、治承四年父頼朝源家再興の旗を擧げて、關東十州を靡かせし時は、年齒妙齡に近かりしと覺へたり、即ち鎌倉に覇府の開かれし時頼朝は此の姫の爲とて、已が亭の傍に一亭を構へ住ましめ、之を小御所となん呼ばしめける、

壽永二年の春なりき、源氏の一族木曾義仲が頼朝と不和の事あり、もとさる讒人に阻てられしなれども、わはや合戰にも及ばんとせしが、義仲了簡深くして朝頼の鋒を避けし爲め、其意も稍解け、遂に義仲の子淸水冠者義高を質として、之を子養し、和親を厚くするに至りぬ、此くて頼朝は義高を養ひ取りしが人質とは云ひながら、もと一門の離れぬ中なれば、強ち之を惡む謂もなし、やがて義高を愛女大姫の婿となしぬ、義高大姫の語らひのうるはしかりし事は云はずもあれ、誰しも其幾千代かけて久しからんと

こそ望め、其伉儷を強ちに割き破らんとするものはわるまじきなれども、實に悲しきは、兵塵の擧らぬ日とてはなき當代なれば、情なくも、大姫君をして破鏡の悲みを懷かしむる事起れり、

壽永三年正月、賴朝義仲の爭再び破れて、仲義は範賴義經に追ひ攻められ、遂に粟田の露と消え果てしが、子義高こそ今は賴朝の聟なれば、流石に大事もあるまじかりしに、四月二十一日の夜、鎌倉の營中騷動する事一方ならず、是れ義高の身に關する事なりき、朝賴は義仲を亡し果てゝ後、思ふ樣、義高は我が聟なれども、木曾の子なれば、如何なる意趣を含まんも計り難し、密に之を殺して、心安からんに如かじと、内々昵近の壯士に命を含めけり、然るに營中の女房此事を窺ひ知りて、大姫に此くと告げゝれば、義高は聞きて、計る樣ありとて、其の曉女の姿に扮し、姫の女房に圍まれて、潛に逃れ出でたり、されど追手の直に及ばんを恐れてにや、義高と齡も同じくして、日夜座右に侍りし海野小太郎幸氏を語らひ、義高に代りて、其帳臺に入り臥し、髻を宿衣の下より出して、人には義高の臥しぬると思はしめ、日闌けて後は、起き出でゝ、義高の常の居所に出て、日來の有樣に違はず、獨り雙六を打たしめたり、義高は雙六の勝負を好み、幸氏を相手として、朝暮之を翫びたれば殿中の男女、誰しも義高の坐す者と心得て、其日も暮れしに、晩に及びて、事忽ち露顯せり、營中の騷擾は此の爲と知られぬ、賴朝は巧の裏をかゝれし悔しさに、いたくも忿怒し幸氏を囚らへしめ、一方には堀藤次親家已下の軍兵を諸方へ遣はし、義高を討止めよと命じぬ、此の時大姫の驚駭悲痛は如何なりけん、只々慌はてに慌はてゝ、魂を消し給へりと傳へられしは、左こそありけめ、

之を讀む人は、誰しも本朝廿四孝てふ演戲の八重垣姫に思ひ及ぶなるべし、謙信の兵に追はれし簔作の武田勝賴は、其奇計に陷りしなれど、漸く虎穴を逃れ出てし義高の運命は之に似たり、されば八重垣姫

も大姫は、夫の命を危む悲は變るまじ、

義高の逃れし後數日、廿六日堀藤次親家の郎從藤內光澄馳せ歸りて、武藏入間河原にて、義高に追ひ及び、之を誅戮せりと告げぬ、賴朝は固より之を喜びしも、大姫の悲しまんを恐れて、深く事を秘せしが何時しか洩れて大姫の耳に入りけるより、其哀慟一方ならず、愁嘆の餘、ひたぶるに飲食を絶ちて、なげき臥せしこそあはれなれ、母の政子は固より父のむごき企を知らざれば、今女の哭泣の樣を見ては、是も哀傷殊に甚だしく從て殿中の男女、歎きの色を含まぬはなかりき、されど父賴朝は、其天下經略の大望には、いかで婿をも女をも思ひ換ゆべき、五月に入りては、義高の伴類甲斐信濃に隱れ居りて、叛逆を起さんとすと聞きて、足利小笠原小山宇都宮なんどの武士を催して、それを討てよと命じ遣りぬ六月に至りても、姫の愁傷は止む由もなく、終には胸破れ思盡きけん、病の床に沈みて、今は日を追ふて憔悴し、花の顏は云はずもあれ、命の程も計り知られぬに至りしかば、母政子の驚きは喩へんに物なく子を思ふ親の心は闇くなり行きて、果は義高を殺せし武士を憎み憤りしかば、流石の賴朝も制しかねて、此月廿七日と云ふに、堀藤次の郎從一人、義高に刄を加へしものなりとて梟首せられぬ、假令將軍の命を奉ずとも、此る大事に當りて、何とて內々子細を姫君に告げざりしとての事なり、此郎從こそ世に宿運拙きもの丶隨一なれ、此の後姫の身の上は如何なりけん、詳らかには知られねども常に病に沈み勝ちなりしと見へ、文治二年五月の比は、祈禱の爲め二七箇日の間、南御堂に參籠せし事史に見へたり、此間にいたくも人の心を動かす事あり、

何人も知る如く、九郎判官義經の妾靜は、義經の奧州に逃れし後、其在所を知らん爲め、賴朝の爲め、鎌倉に呼び下され、樣々憂き思に會ひ、たゞならぬ身にありながら、鶴岡の廻廊に舞の袖を飜し、夫を慕ふ情をしづの苧環繰り返したる、いとも果敢なき女なり、時は恰も文治二年なれば、大姫の御堂參籠

の時は、靜の鎌倉に在りし頃なり、されば此の間、大姫は靜を召して、其妙藝を賞で〻、祿を給ひぬとあり、思ひ見よ、此は吉野の山の深雪に、頼める夫に別れ、彼は入間河原の追討ちに、愛しき郎を失ひ生別死別こそ似ざれ、女子として同じ悲しき運命に逢へる兩女の、相見ての懷は察するに難からず、姫は必ずや我が身に思ひ比べて、等しく父賴朝が忍刻に、憂き身を喞つ靜に對し、愛憐同情の淚を注ぎしなるべし、

さても、大姫は深く現世を思ひ棄て〻、ひたすらに後世を願ひけるにや、文治三年には、其發願により相模國内の寺塔を修し、經を誦せしめ、自らは岩殿觀音堂に參籠する事見へたり、其後の事は吾知らず以上は賴朝の女大姫の傳なり、別に語るに足る事蹟あるにあらねども、齡若うして、愛を失ひ、情を破り、一生を索漠孤苦の思ひに過せし悲慘の女子、しかも右大將征夷大將軍てふ賴朝の嫡女に生れし甲斐もなく、其の幸うすくして、月もる伏屋の賤の女に劣ること萬々なりし女子として、世の樂みに耽り得る人々の同情を求めし爲め、物しつるなり、さては過ぎし征露の戰に、御國の爲とて、何物にも想ひ換へ難き愛郎を失ひし人もをはさば、昔も今も變らぬ戰の習、我が身一人の秋にあらぬを知り給へかし、

婦人の美

文學士 山本無極

古より、美は婦人の勢力及び目的なりと言ひ來りしが、ダイオヂチスは、之を以て婦人の最も勢力ある讃揚の文字なりと稱せり、然るに近世の作者は、美を以て屢魚鼈を捕獲する餌の如きものに譬へり古代の哲學者も、亦多くは之を以て、價値なく、有害なるものなりとし、之を罪し、之れ譏れり、然るに、悲哉彼等は、此の如く議論するに係はらず、其奴隸とならざるもの殆ど稀なり、實に艷美なる妙齡の婦人に適する者は一人もこれなきなり、艷美なる

婦人は、心あるもの、喜びて其配下に貨物を献せんとする、愛の世界に於ける自然の女王也、造化は萬事に惜みなき手を以て美を播布せり、然れども、何物か婦人の容貌の如く美の觀念を心に强く印象するものあらんや、夫れ花は、其構成甚だ美にして、その姿態甚だ麗なり、廣濶なる牧場は其美を成し、平原や、小林や、細流や、この光景を潤飾するに足る、然れども、此等の數者は、婦人の眼前には其美を逞くすること能はず、頹然として、その形容の憔悴するを覺ゆるなり、男子の容貌は、他姓に見る可らざる一種威嚴ある風采あり、然れども婦人の容貌に現はるゝ清美にして柔和溫乎たる自然の微笑は、何處にある、傍觀者の目を眩惑せしむる光輝は何處にかある、凡ての辨明を打破する聲音は何處にか在る、吾人は、婦人の容貌を他物に比較する時は、愈、愛の勝利を以て婦人に歸し、巧妙なる詩人と共に、婦人の容貌の如き美を歌ふる著作者は何處に在りやと高言するの止むる得ざるを見るなり、

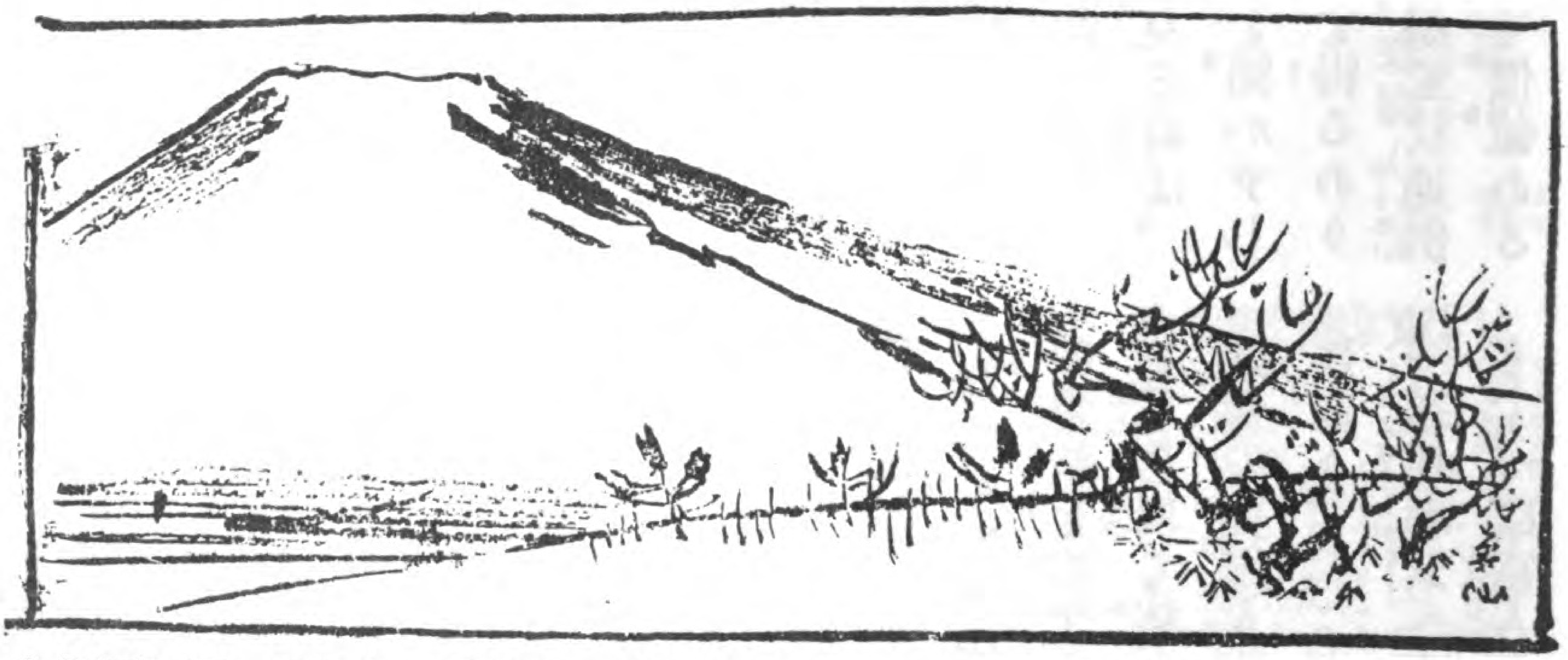
婦人には、他性の超越せる一種の特色あり、又其容貌は、時々殊に愛の増加する事あるものとす、吾人は、快活なる心を以て、怡然として演劇を娯める一群のうちに、光輝を放てる婦人を見たり、吾人は、爐邊に團欒し、無心にして家事に着手せる婦人の談話の、何となく和氣藹然として四邊に溢るゝを見たり、吾人は、人の來るを知らず、安然として睡眠せる婦人の胸中の、實に一の芥滯なく、清浮潔白なるを見たり、然れども、吾人は、悲哀は其胸に滿ち、微笑はその頰を去りし時の如き可憐なる、婦人を見し事なし、悲哀は假令快活の氣象を奪ひ去りしと雖も、尙其容貌に愛の加ふる平和の調子を與へたり、此時の婦人の目は、宛も父なき者の父、悲哀者の慰諭者なる神に哀憐を乞ふ如く、靜かなる依托を以て擧られたり、

最も快活なる婦人は、生存の時刻を毎日延長するものなり、語を換へて之を言へば、協力同心して良人と其苦樂を分配する者なり、之なければ、美は論ず

るに足らず、徳義なき美は、香氣なき花の如し、徳義は老皺を平滑にする彩色なり、

槿花の榮の一朝なるを見れば、凡て花は衰落せざる可らず、美の外に一物なき愛は乍ちにして消失す、吾人は、美なる婦人に於ては容貌を喜び、善なる婦人に於ては心を樂む、美は寳玉にして善は財寶なり、誠實、好意、喜悦は其生命美貌の艶麗よりも永遠にして、決して其消滅の期あることなし、

美は全く容貌に在りとは、唯美を其局部に歸する嫌なるを以て俗解の如しと雖も是れ決して不適當の解釋にあらず、婚姻上に及す不幸の原因は、多くこの暫時の花に在り、美は、之を有する者、及び之を賞讃する者の爲には、兩ながら危險なる賜なり、假令ば美なる婦人、意に從は



ざる事あらば拒まれたる者は爲に感情を害せん、美の衰謝を長く怨恨するは、その無常の快樂を誤算するに依ると知らば、美ならざるものは、美を妬まむより寧ろ之を憐まんのみ

心靈より發して全面を照す所の容貌の美は、容貌より獨立したるものにて最も力ある美なり、才能と尊敬との外、何物も之に酬ゆるなり、彫刻も繪畫も之に適する能はず、而して時も亦之を殺す事難しとす、親愛なる讀者よ、他人は何と之を見るも、吾人は美を以て汝が最愛の婦人なりといはんと欲するなり、

美の極致は平和なり、吾人自身と其周圍と平和を保つは、富及び位より價値多きなり、而して此の財寶は各自の力量次第にありて、愉快にして

幸福なる顔色、平靜にして安和ある心意の鏡面は、汝の家族に、財寶よりも何は多くの眞樂を與へ、貧者の家屋に太陽の光明を入るゝものなり、ソロモン云へるあり、平和なる心は永遠の響應なりと、平和は怒氣、逆情溢面に抗抵するものにして、決して此等をして、成立せしむる事情を許す者に非ず、長き惡意は必ず塗抹し得べからざる數線の印象を顔面に留む、而して吾人は、不知不識是くの如き人を避け好意と平和も亦その印象をなす、吾人は其愛に誘はる、個人の美は、神の手を以て書したる名譽の文字なり、然れども、其所有者に汚さるゝこと屢々これあり、故に美の敵は、即ち造化の敵也、吾人は常に吾人の承認を要求する所の美を承認する傾向少し、多くの婦人は、一度其美を聞きて後之を見る時は、比較的質素に見ゆるも、其未だ一度も之を聞かずして見る時は、其美は容易に承認せらるゝを得るあり外美其度を減ずるに從ひて内美その度を增すは通例なり、故に吾人は、最も質素なる者は最も價値あるものなりと宣言す、造化は、一物に多くの恩賜を浪費する事稀なれ、孔雀は美麗なる聲音なく、キアメリヤ、ジヤポニカ（共に草の名）には香氣なし、而して美人は、往々才智の大なる分配を欠くことあり美人は、往々才智の大なる分配を缺くことあり、美は處女を老殺す、即ち市場の閉鎖するに至る迄、一人の購買者を見ざらしむる程の價値を有す、容儀を修飾する者は心情を忘逸す、美人貧にして意を二途に用ゐんか、則ち彼の美は他を誘ひ、彼の貧は亦彼を誘へるなり、詩人ロチヤルス云へるあり、汝美は危險なる恩賜なりと、吾人を征服する婦人の美は種々なり、サムソンの如く、其力の髮にあるもの、第二は汝の愛情を齒牙に寄するもの、第三は美麗にして小なる足を以て勝ちしシンデレラなり、然れども吾人が最愛の美婦人は　吾人が談話の及ぶ所　最も少き人に在り、

一著作者云へるあり、世に人の喜ばざる二つの者あり、一は富人の死に瀕せんとするを知る事にして、

一は美人の色衰へんとするを知る事即ち是なり、花は地に落ち、水は流れて海に去るが如く、春謝し、色衰へ、吾人の生命も死に急がんとす、

渤海國の節使

文學士　森田鉄三郎

我朝佛教隆盛を極めたるは、奈良朝の聖武孝謙二帝の御世に如くはなし、當時三韓旣に我手を離れ、外交といへば只唐との交通あるのみ、東大寺には盧遮那佛の大像鑄造せられ、諸國には國分寺の設立あり上下佛法熱に狂亂して更に他事を顧みず、此際一國あり、飄然海に浮び禮を厚うして來聘す、渤海國これあり、實に聖武帝神龜四年なり、

渤海は本と粟末靺鞨にして高麗に附屬す、姓を大氏と稱す、唐高麗を滅すに及び、乞々仲象の子大祚榮高麗亡國の衆と靺鞨の兵とを率ひて、遂に渤海國を建つ、其地は朝鮮及滿洲に跨り、其盛時には領域南は朝鮮北方の二道平安咸鏡より、北は松花口に跨り東は日本海に抵り、西は遼河を踰えて科爾沁部界に達し、幅員頗る廣大なり、民俗慓悍にして武を好み當時海東の盛國と稱せらる、

祚榮卒して子武藝嗣ぐ、渤海國の始めて我國に朝貢せるは、武藝の代にして、我朝に於ては聖武帝神龜四年なり、爾來渤海は我國の外藩となり、醍醐帝延長四年終に契丹に討滅せられ、其後八年再び來朝せしまで、朝貢の度數二十九回の多きに及び、年を閲みすること二百〇四年間の久しきに渡れり、彼が朝貢の目的の如何なるかは今略して言はず、專ら我朝の彼使節に對する待遇の如何なるかを觀むとす、我朝に於ては嚴然として君主の威光を保ち、渤海を見ること高麗の故事に倣ひ、一の臣妾の如くし、毫も對等國の禮を執らざりしと雖も、其形式上に表はれたる待遇の狀に至りては、頗る寵待寛遇を極め恰も隷屬國に非ざるが如き觀あり、左に之を列叙す可し、

京都婦人の性格

中澤工學博士夫人談

◎京都婦人界　京都の婦人と申しますると、第一に美人と云ふことが聯想せられ、第二に柔和で謙遜であらうと思はれ、第三に慈善心に富みて、弱き老人や下々の召使ひの者を勞はるであらうと考へられますが、少しの例外があるといたしましても、先づ大體の上から概言しますれば、殆んどかゝる美はしき心の傾を認むることが出來ませぬ、成程京美人と天下に謳はれました位ゐですから、顔や姿は誠に綺麗なる百合の花の様でありまするし、辭令の如きも至極優婉でありまするがその性格はどちらかと申しまするると、猜疑心に富んで他人の成功を嫉み、又階級的思想も非常に強くありまして他府縣から來た者とか、又は自分の家の召使ひであつた者とか、或は一時に富者に成つた者とかに對しましては、常に一種厭惡の感情を挾み、決して往來交際することがない様であります、夫れゆゑに穢多の如き、特種部民に對しましては、言葉を交へると云ふことを非常に不名譽である様に思ふております、今一例を申しまするると少しく、新教育を受けた或る婦人と、愛國婦人會の會員募集に參りました折でした私が靴屋に這入つて勸誘しようと思ひましたら、其婦人は顔の色を變へて、中澤さんこれは靴屋ぢやありませんか、靴屋は穢多ですよ、私なんざそんな家に入ることが出來ませんと言つて、驚き恐れた人がありました、と此の一例は京都婦人の性格を露はに表白してをる様に思はれます、夫から又柔和謙遜であるかと申しまするると、私はドウも頭を縦に振ることが出來兼ねます、殊に婦人の尤も賞美すべき慈善の心に至りましては、私の觀るところでは、京都婦人に真に慈悲憐愍の他愛心がある様には思はれません、殊に國に對する考へなどは至つて薄い様であります、

◎國家的觀念乏し　一千年の長き間、帝都でありました京都の婦人に、國家的觀念の乏しいと云ふことは、一見疑ふ所でありまするが、事實はドウしても事實で、他の地方と比較いたしまするると、其劣ることを發見いたします、夫は私共の考へでは、此の京都が長らくの間帝都でありまして、皇室の御恩澤に浴することが最も深く、又禁裏御所の森嚴を拜することに狎ましたところから、何時となく國に對する觀念が乏しくなつて來たのではあるまいかと思ひます、丁度いかに美はしい景色をも常に眺めておりまするると、左程に美しく見へぬのと同様ではありますまいか、斯る有様ですから、國と關係を結んで居る赤十字社だとか愛國婦人會だとか云ふ團體の會員に致しましても、真に國家を念ひ軍人の勞を思ひやりまして、心から加盟すると云ふ人は殘念ながら、雨夜の星ほどもなからうと考へます殊に忌むべき氣風は外聞が惡いと云ふ考へからして、無理算段してゞも外見を飾ると云ふ醜弊で、赤十字社や愛國婦人會への

加盟の如きも、一つはメタルを胸に吊すが爲めにする人も少くない様に思はれます、斯様に申しまするど何だか悪口の樣でありまするが、京都婦人の眞情は全く左樣であらうと思はれます、

◎事業的觀念なし　京都の婦人が事業に對する觀念の無ひのは驚くばかりであります、固より下流社會の者に至りましては、働かればならぬと云ふことは、生活の必要に迫られて、餘儀なく感じて居りまするが、中流以上の家庭に任る婦人に至りましては、事業は男子の爲すべきもので、決して婦人の手を入るべき領分でない樣に思ふております、夫故に店の監督の如き、又は其他家業に對する事務の如きは、一切顧ないのを以て、良家の婦人である樣に思ふて居ります、固より自分の衣服や、家人の着物を裁縫することは、婦人の務めでありますから、夫は致しまするが、他より收入する爲めの技藝に至りましては、此を大なる恥辱として、決して致しません、西洋の婦人などは、或は靴下を編むとか、或は花籃を造るとか、夫に相應の手藝をして、婚嫁の用意に供へるそうですが、夫と比べますると、事業に對する思想の低いことは、驚くばかりじやありませんか、現に愛國婦人會で、經木眞田傳習所を設けて、花籃や婦人帽などの製造を傳習して居りますから此等の手藝は高尙優美で、中流以上の婦人が習ふておくもよからうと云ふので、入所を勸めて見ましたが、多くの人は經木細工抔は、貧乏人のする仕事だから愧かしい、何と云つて講習を受ける者がないと云ふ始末であります、一體日本の婦人には自助の精神がありませんから、事業的觀念も從つて乏しいのでしようが、殊に京都の婦人は尤も甚だしい者であらうと思はれます、

◎社交を知らず　京都の婦人は深窓の裏に養はれて四疊半の茶室に閉ぢ籠るか、筆を弄して吟風賞月の間に月日を送ると云ふことを以て、婦人の使命であるが如くに考へて、社會に出でて、世の爲めに働くと云ふことを以て、その淑德を破るものゝ樣に思ふて居ります、夫れ故にドンな會合がありましても、婦人が出て斡旋すると云ふことが甚だ少いのであります、併し愛國婦人會が時局に感じて、働き出しました爲に京都婦人の面目を一新したように、犒軍や何かには熱心に働きましたが、それは異例中の異例で、かゝる働きをする婦人を目してお轉婆だの飛び上りだのとの冷評を常に隨所に下されて居るのであります、夫故に舊家の奧樣や、嬢樣はいかなる場合でも、社交界に立つと云ふことは、先づない方であります、斯樣に世間に出ぬと云ふ事を以て婦人の淑德の樣に考へて居るにも拘はらず、尤も人の群集する、芝居や、寄席には月に幾度か出入して、時には艶名を謳はるゝことがあるのでありますが、私共の考へでは、淑德の解釋が妙なところに行はれて居る樣に思はれます、斯る舊思想を排除して、今少しく進歩したる文明流の家庭を造ることは、京都婦人界の重要なる一問題で若し新思潮を吸ひ入るゝことの出來ません間は、何時までも寂しき家庭で、一家族の平和を求めることが出來ませんであらうと思はれます(大阪時事)

山に水は如くものもなし京の春

一、使節來朝する時は爵位を授け、巨額の國產を賜はるを常とす、聖武帝天平九年第二回の朝貢の際使節珍蒙等に賜ふところの國產は絁廿疋、絹十匹絲十五絢、朝綿二百屯、其他多くは此類なり、

二、鴻臚館は外國使節を接待するところなるが、渤海使節を遇するにも亦是處に於てし、時に盛宴を張りて彼等を勞饗し、或は特に朝堂に宴を設けて彼等を饗應せらるゝことあり、而して接待員には惠美押勝、坂上田村麻呂、菅原道眞、在原業平等の如き、我朝第一流の政治家任命せらる、優遇と云はざる可からず、

三、其他渤海使節の來朝するや、朝廷より諸種の待遇係官を命ぜらる、即ち存問渤海使節は、彼等を其到着せる港灣及郡邑に迎接し、郊勞使は彼等を郊外に迎へ、掌渤海客使、領歸鄉渤海客使、領客使は使節淹留間の接待職を掌り、通事は彼我の言語意思を通譯し、送渤海使は使節を送りて彼が國境に到る應接盡せりと云ふべし、

四、使節の娛樂に供せむため田樂、女樂及射藝等を觀覽せしめらるゝことあり、

五、使節來朝するや、朝廷其着航港の人民及其入京の沿道諸國に命じて、不敬亡狀の擧動なきやう警誡を與ふること嚴なり、即ち陽成帝元慶七年渤海使入京の際、其沿道の諸國加賀、越前、近江、山城等の諸國に令して官舍道橋を修め、道傍の死人を瘞しめられたるが如き、或は越前、越中、能登に令して、酒肉、魚肉、蒜物を加賀に送附せしめて彼等を勞饗せしめられたるが如き是なり、之を前の百濟、高麗及び新羅の屬國朝貢の際に比すれば、其寬待優遇遙に優り、又當時渤海使節と前後して來朝せる唐使節に比するに、其右に出でざるべきも敢て其後に下らず、及び此頃に於ける外國來聘使待遇の一般は、大抵之に依りて類推するを得べし、

理學の樂み

理學士　藤田碧水

世の中に他人の秘事を發見するほど愉快なることは無からう、事柄に依りては隨分不道德なることもあるには相違無い、併しながら不道德であるにせよ無いにせよ、其の愉快なることは確かである、若し人の性といふものが惡であるとすれば、是も其の論據の中に編入せらるゝ資格はあるかも知れぬ、是は人情の弱點である、或種の小新聞が下層社會より非常に歡迎せらるゝのも、確に此の弱點に投じた故で有らうと思ふ、

右の如く他の秘を發くは面白い事ではあるが、若し其の事が不道德となる場合には、勿論愼まねばならぬ、發いて自ら直なりとする者を惡むとは此の謂である、併しながら若し發いても其の事が全く無害であるか、或は却て社會の公益を增進する樣なる事ならば、何所までもどし〳〵やるべしである手品師が奇術を演じて大に人を驚かす、我百方より工夫して終に、其の『たね』を捜し得て之を人に誇る、其の時の愉快は何如であらう、殊に亦少しも不道德の痕跡は見附からない、盜あり近鄕に出沒し每夜旅人を劫して衣服金錢を奪ふ、而し彼神出鬼沒巧に其蹤跡を晦ます、我苦心慘憺終に其の賊を捕縛して警察に引摺り出した、此の刑事巡査鼻の高さ果して幾メートルぞ、豈啻に彼一人の鼻の高さのみならんや、幾萬の民依て以て始て枕を高うする事を得る次第である秘密を發く事の愉快は其の秘密が深遠にして容易に端倪し得べからざれば得べからざる程又其の結果が一人或は社會に功益を與ふる程大なるものである理學者は何事を爲し或は爲さんとするものであるか彼の職分は手品師のたね捜しに非ず、盜賊の追蹤に非ず尙又敵情の偵察でも無い、目指す所のものは直に宇宙の眞理造化の秘密である、我々の祖先が玄中の玄、妙中の妙、不可思議中の最大不可思議とした所のものを捕來て、直に其作用原因を研究せんとす

るにあり、雷にその作用原因を研究し、造化の秘密を發いて、自ら先天的慾望を滿足するのみならず、併せて自然が人間に及ぼす暴力を制し、或は進んで之を利用して、吾人の頤使に供せんとするのである眼を開いて我を圍繞する所の自然界を觀れば、不可思議ならざるものは殆ど一も無しと謂ても宜からう古人は此の不可思議なる自然に對して、何所までも不可思議として之を觀察し、少しも之に向つて合理的の解釋を下さうとは爲なかつた故に、やがて種々樣々の迷信と云ふものを起した、風雨電雷日月星辰皆是れ彼等が迷信の原因である、而も理學の進歩は彼等が嘗て神として恐怖せし雷公の一族なる越歴を生擒して、吾人の從順なる奴隷と爲したで無いか、嘗て日神の鎭座し給ふ神聖なる都城として、朝夕禮拜せられた、太陽も理學者の手に依りて、其の構造容積距離は勿論の事、一たびスペクトル分析術の開けてより、遂には其中に存在する元素の種類までが發見せらるゝやうに爲つたで無いか、廣大無邊の此の大地も、周圍僅に四萬キロメートルなる楕圓旋轉體たるに過ぎざる事や、其の楕圓旋轉體をなせるは斯く／＼の原因に本づくと云ふ事などは、已に遠き以前に發見せられたるのみならず、引力定律發見の結果は、遂に吾人をして其の密度をさへも測定するを得るに至らしめた、此の勢を以て益々進まば、理學者の前には祝融が先驅をして、海若が藏るところでなく、六日にして宇宙を創造し玉ひし、全知全能の神樣も斯くまで内幕を見透されて、最早此の世界に居たまらずして、終に遠く何所かへ逃出すことゝなるであらう、豈愉快ならずや、

斯く云へばとて造化の秘密は今日已に大部分が發見し盡されたかと云ふに決して然らず、宇宙は流石に無限なり、人間の能力には限あり、吾人が今日までに發見し得たる所は僅かに大海の一粟たるに過ぎない、隨つて今後の理學者に向つて殘されたる研究の餘地は尚無限である、吾人は此の肥沃なる未墾の土地に向つて大に開拓を試む可きである、

理學の樂みは實に右述ぶる所の如し、而も余輩は屢々耳にする所に據れば、往々次の如き言を口にする者がある、曰く歴史は面白く文學は愉快である、物理學化學に至つては乾燥無味であると、是等は必竟理學と云ふもの丶性質が分らぬからであると思ふ、上來述べたる所にて理學の樂みとは如何なるものかと云ふことは略分つたと思ふ、余輩は決して我田引水的僻論を吐くのではない、哲學には哲學の本領あり、文學には文學の本領あり、諸科百般の學一として快樂と實用とを與へぬものは無い、故に理學さへあれば其外に何も入らぬ抔とは言はぬ、併しながら如何なる種類の業に從事するにもせよ理學に對する興味は何人も必ず有つて居て貰ひたいものである、理學を愛する國民は進歩的の國民にして然らざるものは則亡國の民である、

新婚日記

江戸　静川

背の君は二十八歳、妾は二十一の、歳廻りもよく似合ひたる縁なればと、叔母君の媒酌にて華燭の典を擧けたるは、樹々の梢に色添えて、籬に黄菊白菊の、今を盛りと咲き亂れたる、去ぬる年の十月二十日、雌蝶雄蝶の盃事、儀式終れば直ぐと誂えの俥に合乘の、新婚旅行の途にのぼりぬ。

▲第一日

矢を射る如く、大路小路を驅けぬける俥の上、唯だ夢心地にて、既くも上野停車場のプラットホームに立ちぬ、妾は成可く人に面見られぬやうにと背の君のうしろに隱るゝがやう、小さくなりて隨へど、待合室を入る人、出る人に、妾の方顧らぬはなし、胸は躍りて面は唯だほてる許り。

軈て發車の鈴の音鳴り渡りて、プラットホームは一しきり騷がしく、稍や靜まりたる機を計りて、二

MISCELLANY IN ENGLISH.

THE CIRCUS BOY.

The next day she began to make ready for the little cousin. Hannah, the old servant, helped to make his room pretty; they hung pictures on the walls, and filled a book-case with delightful books. Then Miss Ann went to Boston and got a cricket bat, and a tennis net and rackets, and even a pair of skates. The letter did not say how old the boy was, but she had made up her mind that he must be about fifteen, and she thought he would go skating on the old pond, where she used to slide with her brothers when she was a little girl.

But when the boy came, he was a little pale child, not much taller than the table. Miss Ann was so surprised that she stared at him and said.

"Are you John Hall's boy?"

"Yes, I'm Larry," said the child, in a very tired little voice. "I want to find Miss Ann Ryder."

"Yes, my dear, I am Cousin Ann, come to the fire, your hands are very cold. What did you say your name was?"

英文雜錄

津田梅子閱

小騎士の楯（二）

偖愈々小供が來ると云ふので、アンは其翌日、色々な仕度に取り掛りました。婆やのハンナも手傳つて、小供の部屋を飾り、美しい畫を壁に懸けたり、面白い本を書棚に排べたり等致しました。夫からミスアンは、ボストンに行き、クリケットの打棒や、テニスのネット、ラッケット、其上に滑り靴迄も買ひ整へました。あの手紙には小供の年の事は別に書いて御座いませんでしたが、アンは大抵十五位と見當を附け、屹度この兒も自分が小さい時兄弟達と滑り廻つたあのお池で、氷すべりでもして遊ぶだらうと思ひました。

やがて小供は參りましたが、見れば青白い顏をした小さな兒で、背はやうやうテーブルに達く位でした、アンは唯わつけにとられ小供の顏を凝視ながら

『お前が、マア、ジヨン、ホールの兒？』

『エ、僕はラリー、』小供はさも疲れた樣な聲で云つて『あのアン、ライダーさんは？』

アヽわたしがアンですよ、さあさあおあたり、マア手の冷い事。エートお前の名はなんとお云ひだつけね』

"I'm Lawrence Ryder Hall, but everybody calls me just Larry."

『ローレンス、ライダー、ホール。だけど皆ラリイつて云ふの』

"Did you come all alone, Larry? Was there no one to take care of you?"

『ラリーやお前たつた一人で來たの、だれも世話して下さる方は無かつたの？』

"I'm eight," said the little boy proudly, "and there isn't anybody now, only just Pete. Pete wanted me to stay; he said he would teach me himself."

『エ、僕八ッですもの』と小供はさもさも得意さう『だわれも居やしません、ピートだけ。ピートハね、自分で何か敎へて遣るから、僕、他所へなんか行つちや、いけないつて。』

"What would he teach you, my dear?"

『其お方は何を敎へて下さるの』

"Tight-rope walking," said Larry. "You have to begin when you are little, you know. Pete says I could do it finely."

『綱渡り。コリヤ小さい時から始めなければだめなんです。ピートは僕大變上手(ウマ)いつて』

"Child!" cried Miss Ryder, "what are you talking about?"

『これまあお前は何を云つてるのですよー。』

"The circus," said Larry. "Kaufmann's Great Animal Show. We belonged to it, you know."

『アノ、曲馬の事なのクーマン座の、僕等みんな其所のもんですからね。』

"Your father?" said Miss Ann faintly. She felt as if the room was turning around.

『お父さんも？』アンの聲は消えも入りさう、あんまり吃驚して部屋が廻り出した樣な氣持がしましたので。』

"Father used to train the horses. He could teach them to do anything he wanted, and sometimes he drove the four white ones in the ring.

『お父さんはね、毎も馬を練して居ました。お馬にね、何でもすきな事をお敎へなさつたの。時々埒の中で四つの白馬を一どきにお使ひなさつたっけ。

But Father couldn't do much, because he was sick, you know, and Pete used to help him. Pete is very kind," said Larry, in a sleepy voice.

だけど始終鹽梅か惡かつたから色々な事が出來ないでピートがいつも手傳つてました。ピートはね、それはそれは善い人なの。』ラリーは睡むさうな聲でお話をして居りましたが。

He leaned his tired little head on

やがて其疲れきつた頭を大椅子

the cushion in the big chair, and in a minute he was fast asleep.

Hannah came and carried him upstairs, and she and Miss Ann put him to bed without waking him. But Miss Ann sat by the fire a long time, saying to herself over and over again,

"A circus boy! What will Dr. Haven say!"

Of course everybody in the village soon knew that Miss Ryder's little cousin had lived in a circus, and everybody said, "Poor Miss Ann! She will have a hard time with that boy."

But Miss Ann did not seem to be troubled. She watched the child very carefully at first; he was a gentle, affectionate little fellow, and Miss Ann soon found that he was what she called "well brought up." Johu Hall had been a man of good education, and in spite of his low occupation had done his best for his boy.

Many boys would have thought the old house very dull; but Larry played happily in the garden, and talked with Michael the coachman, and petted Toto, who seemed to like him very much. Most of all he loved reading.

Miss Ann thought the books she had bought would be

のクッションの上に凭せるが早いかすやすやと眠つて了ひました。

夫からハンナが來て二階に抱き上げアンと二人して其儘そつと床へ入れました。アンは、それから永い間火の側に座り、同じ言を幾度も幾度も幾度も。

『マア曲馬師の息子！ ドクトルは、まあ、何と仰しやるだらう。』

勿論ラリーが曲馬師の所に居たと云ふ事は、直に村中に知れ渡りまして、みんな、『アンさんは御氣の毒な、今に其兒故に辛い目を御覽なさるだらう』と噂して居りました。

併しアンは格別これを氣に懸ける樣子も御座いません。先第一に、小供のしぶりをよく氣を附けて見ましたが、いかにも柔しい人懷こい兒でアンのよく云ふ『お躾のいゝ兒』で、ございました。一體ジョン、ホールは敎育のある人で、卑しい家業しながらも小供は出來るだけ注意して育てました。

大抵な小供は古い家など鬱陶しがるものですが、ラリーはお庭で樂しさうに遊び、馬丁のマイカルと話をしたり、タトーを可愛がつたり致しました、犬もすつかりラリーに懷いて居りますさてラリーの一番好きなのは本を讀む事で御座いました。

アンは自分が買つた本など餘り古る過ぎると思ひましたが、ラ

too old for him, but he read them with delight, and talked to her about them as they sat by the fire in the evening. His favorites were the stories of King Arthur and his knight, who rode out every day to find people who were in trouble, and fight for them and save them.

リーはこれを喜んで讀み、夕方暖爐にあたりながら其お話を致しました。中にもあのアーサー王と騎士達とが毎日馬に乘つて出ては、難澁して居る人を見つけ其人の爲に戰つて、しまひに救つて遣るといふ御話が、何より大すきでございました。

One day he brought Miss Ann a funny wooden shield, which Michael had helped him to make. He explained to Miss Ann that when the knights came back they told what they had done, and if anyone had done anything very brave indeed, the king wrote 'Bravo' on his shield.

或日ラリーはミス、アンの所へ可笑しな恰好をした楯を持つて參りました、これをマイカルに手傳はせて拵へたのです。ラリーは夫からアンに向つて頻に御講釈を始め、昔お侍が外から歸ると、銘々そのした事を話し、もし誰かほんとにえらひ事をすると王樣は其人の楯に『勇』と書いて下さると話しました。

"Will you write that some day on my shield, Cousin Ann?" asked Larry; "I mean, if I do something very brave like rescuing a distressd lady and nearly getting killed Will you, Cousin Ann?"

『今に僕の楯にも書いて下さいね、叔母さんアノ、アノ、お姫樣がいぢめられて殺されかけてる時、救つて上げると云ふ樣な、きつい事をしたらばね、ねつー叔母樣。』

"Yes," said Cousin Ann, "but I don't think there are many 'distressed ladies' inStill Harbor, Larry."

『あゝーあー、だがね、ラリーや、このスチルハーバーにて、難澁してござる御姫樣など、あんまり入らつしやるまいよ。』

Had made up her mind.........彼女の心を決めた
Cushion.............................椅子蒲團
Have a hard time...............苦勞をする
In spite of.........................にも拘はらず
Brought up (bring up の過去)...育てあげる

等室へと乘り込みぬ、此所には乘合の人もなければ面見らるゝ恥かしさはなけれど、何となう、極り悪しきまゝ、見送りの誰彼に挨拶したる後は、唯だ俯向き勝ちの、外に術はなかりき。

　滊車は動ぎ始めて、田端王子も打過ぎつ、大宮に着きたる時、脊の君妾に對ひて物優しう、この地に遊びたることありやと問はせ給ふに、心臆して、疾には應答の言葉も出でず、少時して、去年の夏、同じ學舍の友どち打連れて、螢狩りに來りしことゞも語たる、是れぞ脊の君に言葉交はしたる始めなりける。

　この夜、宇都宮は手塚となん呼べる結構最と大きやかなる旅館に泊る、夢は花野を駈けめぐりて、天使の口吻、興いまだ盡きざるに、夜はほの〴〵と明けに近し。

▲第二日

　今日は日光見物せむとて、滊車にて日光町に至る東照宮の美盡くし善盡くせる結構は、話しに聞きたるにも増して、驚くばかりなり、脊の君は再三來りし事ありとて、案内者を俟ず、夫れ〳〵に説明をなして聞かし給ふ、いと嬉し、今夜は日光ホテルに宿る。

▲第三日

　早朝日光を出發して、宇都宮より奥州線に乘り替へ、奥の旅にと志す、箒川を渡れば、軈て滊車は須那野ヶ原を過ぎる、車窓の内より四方を眺むれば紫の雲かとぞ見る、筑波の山の外には眼を遮ぎるものなく、曠茫として際限なく、荒凉の感に撲たれしむ、白河は日本三關の一にして、康平五年安倍賴村の建つる所なりと云ふ、この邊に名所舊蹟多しと聞けど、またの日を期して過ぎつゝ、怖ろしき噺しに聞きつる安達ヶ原の黑塚は、二本松より程遠からず、今は公園となりて春は一層賑はしと云ふ、變ればかはる世の態や、松川過ぎて福島に著きたるは、桔桿落しの秋の日の、既や黄昏がるゝ刻なりき、停車場前の旅館藤金と云へるに憩ひつゝ、こゝに

て飯坂溫泉行きの俥を備ひ、威勢よく飯坂なる溫泉宿、花水館の玄關に梶棒卸せしは、八時を過ぎたり清らかなる座敷に案內せられて、取敢ず湯に浴するに車上の疲勞一時に忘れて、心地宜きこと限りなく、座敷に戻れば、膳部の用意は既に整ひあり。今日は長の行程にて疲れつらんに、疾く寢ぬるこそよけれと、脊の君の優しく勦はり給はる、妻たる身の是れに過ぎたる嬉しきもの他にあらんや。

▲第四日

福島は日鐵線の奥州線と、官線の奥羽線との分岐點にして、東北兩羽の商權集中する所なれば、この地の運輸事業を視察するには好き機會なれば、淋しくとも半日の留守をゆるせとて、脊の君は朝の程より福島に至らる、樂しみ多き新婚旅行も空に過させ給はず、家業大事と運輸事業を視察せらる、脊の君の熱心なる御心掛け、賴母しともたのもし。

待つ身に辛らき半日は過ぐれど、脊の君歸へり來まさず、若もの事にてもありはせぬかと、狹き胸痛むる午後の三時前歸へり來給ひ、遲くなりて氣の毒なることとしてけり、留守は嘸かし淋しかりつらんに能くも焦れて病など起さゞりしと、揶揄ひ給ふに、今五分お歸へりの遲くば、妾は焦れて果てしならんにと、思はず口を滑らしつ、是れよりは染み〴〵と打ち解けて語らひ合ふ間とぞなりぬる、お土產は、信夫の里に有名き「文字摺」の帛紗――縮緬鹽瀨など取交せて。

夕暮れ街を散步して、古歌に聞きつる十綱橋を見る、橋は柱脚を用ひず、鋼鋼の線を以て繋ぐ、長さ三十八間、往時は葛蔓を以て繋ぎしとかや、川は摺上川と唱へて、流れの駛きこと矢の如く、巖に衝たり石に碎けて、玉と亂れ雪と飛ぶ、奇觀何にか譬へむ。

▲第五日

朝飯坂を立ち、長岡と云へる所より汽車にて、午後仙臺に著く此地は舊伊達家六十四萬石の城下にして、繁華なる所也、仙臺ホテルと云へるに宿る。

▲第六日

今日は市中を見物せんとて、宿の者を供に、躑躅ヶ岡公園に至たる、園内に躑躅は見へざるも、櫻の老樹はいと多し、花時はさこそと察せらる、青葉城の南、經ヶ峰なる政宗公の廟に參す、廣瀨川は山下をめぐり、古松老杉欝猶ほ暗らきを覺ゆ、流石は伊達氏三代の墳墓ほどありて其の結構の美なる、上野日光の諸廟に劣るべくもあらず、其他、林子平、烈婦淺岡、力士谷風等の奥津城を弔らひて歸る。

鹽釜、松嶋等、まだ〳〵見物すべき所は多けれど都を出で丶、既や一週日となりぬれば、殘る所は又の日を期して、明日は都へ歸へらんと脊の君は云ひ給ふ、誠に吾ら新婚の二人が樂しみ、名所舊蹟を訪ねざればとて消ゆるにあらねば、貴重なる日と時とを遊樂に費すは惜しきことなり、いざさらば歸へりて妾は新らしき家庭の主婦とならむ。

▲第七日

夜いまだ明けざるに、仙臺を出發す、歸途は海岸線によりて、野馬追祭、瀨戸燒などに名高き相馬の中村、義家朝臣の詠歌にて知られたる勿來の關、歷史に著名なるページを印したる水戸を過ぎて都に入る、この線は太平洋に面して一望快濶、風光極めて明媚なり、殊に久ノ濱を過ぐる頃ほひは、白帆の來往繁く、怒濤の欣翻、畫を見るが如くなりき。

上野の停車場に降り立ち、脊の君が召したるインバネスの塵を手拭もて打拂らひたるを、出迎の人に見られて、辨へもなう恥かしく極り惡しかりし。

待ち設けたる俥にて家に歸へれば、實家方の母樣も來たり居られて、一同に無事の歸京を祝し給はる妾は幸福多き身なるかな(をはり)

車中雜觀

山田楽表

或朝北行で今川橋附近まで行くと、三四臺前から行止つて、來るもの〳〵皆其流で、計らずも電車の長

城が出來たわけである、脱線か、電流故障か、何かと車内から車内への大騷ぎ、田舍紳士らしいのが、上野の發車時間に後れると言つてダヾをこねてる、彼方でも此方でも、不平の聲が高く自分とても、亦困らぬわけでもなかつた車窓から覗いて見ると一番前の車臺を取圍んで人山が築かれて、それへ又四方八方から續々と群集して來る、何れ只事ではなからう、何かと好奇心に驅られて居ると、巡査が駈けて來る、車掌が飛ぶ、彌次馬がワイ〳〵走せる、はて負傷者か知らんと思つて居ると、

電車の中で出產だ？

と誰言ふとなく耳から耳へ、口から口へと傳はつた此奴は素敵だーと職人風が叫べば、何んでマー心得なしだらうーと五十恰好のお袋體が向ふの隅で囁く出產と聞いて自分は二種の感情がむら〳〵と湧いた婦人の不幸に對する同情と、それを見物しやうとて騷ぐ人情の殘忍に對する憤懣の情とである、自分は最早車外を見る勇氣はなくなつた、凡三十分も經て產婦は近隣の醫師の宅へ運ばれた、

或日神田より暮れて品川の我家に歸つて來た、北品川を通る間は、人家の間を沿ふて奔るのであるが、南品川の裏手へ掛ると、寺の墓場もある、田もある畑もある、都大路の塵埃を浴びて此處へ來れば、既に田園の趣味に襲はれてホツト息つく思がする、グー〳〵と大地に唸りを切つて音するのは電車で、ギヤア〳〵と喚き立てるのは蛙で、何の虫かジージーと間斷なく何處からか鳴くもある、グー、ギヤア、ジー、自然と文明が息を切らして競爭を遣つて居る

禁烟禁啖は電車の獨尊である、京濱電車亦之を厲行して居る、狹い車內で啖を吐くといふやうな事は實に言語同斷な振舞であるが、然し最初の頃は隨分それを見受けたのである、又喫烟家に取つて長距離間の乘車には隨分辛い點もあらうが、然しそれも覺悟次第で、飲めぬといふ習慣が附けば、左程難義の事でもなく寧ろ心地よい感がする、

先づザッと考へて見るに、一時間の長距離を乘る人で、夫が喫烟家であつて見れば、少くとも一時間中には三本位は吸ふであらう、往復で六本、月三六百八十本、之を朝日とすれば卄本入九個、此代價が月五十四錢、電車往復月一圓八十五錢から之を引くと一圓三十一錢で乘れる譯で之を一ヶ年の上から見ると年二十圓と六十錢の電車賃から煙草代七圓二十錢儲つて畢竟十三圓四十錢で乘れる事になる、

以上は一個人の上に就の概見であるが、電鐵街鐵東電の三線路に運轉さるゝ一ヶ年の車輛運轉數と、其乘客の中から十萬人の節烟家を出すと見積ると、驚く勿れ七十二萬圓の烟費節減が實行されつゝあるのである、

妻となれる人に

氷見の里人

蝦茶袴はきし女子は、商家に迎へられぬと云ふこと常に耳にする所なり、蝦茶の袴を穿けばとて生意氣にならねばならぬこともなし、商人となればとて物の道理のわからぬ妻を飾り置かねばならぬこともあるまじ、蝦茶は語弊あれど、この色の袴穿きたる、まづ學問する人多ければ、學問をする人、學問をせし人を云、商人の妻に學問の入らぬことはあるまじもし商人の妻に蝦茶袴穿きし女子を迎へば、學問だけを取り、生意氣の分を捨べし、しかるにその學問をも捨てたがるが多きは、合點の行かぬ話ならずや而してまだ無理ならぬは、學問せし人の、生意氣などゝ名のつく厭ふべきものを除けば、文字以外の學問は零となるべき人の多ければなるべし、兎も角も妻となれる人の、怨むこと、憤ること、怠けることを愼まば、いかなる家にも居つかるべく、殊更解釋するまでもなけれど、嫁ぎし家に居付かると云ふ大事件なれば、さてこゝに商人といひしは、無禮なる穿鑿なれど、こは比較上より來ることにて、商人を無學視するにてはなく、學問を無視する商人に限り

てと思はれたし、
怒り腹立つこと、人毎になきことはなけれど、輕きあり、薄きあり、重く厚きあり、輕きは少しく心に萠せども色にあらはれず、薄きは色、言葉にあらはるゝといへども、そのまゝ消へて痕なし、輕きはなきに等し、薄きは外に見ゆると云へども、物に害あるに至らず、重きは言葉にあらはさぬといへども色にあらはる、厚きは言葉あらく、言ふまじきことを云ひて、氣ふさがり、後先の顧みもなくして、禍を招くなり、もし、左なくとも心にこもり、一日二日は常ならぬ心合あるも、厚きの類なり、さて、何故腹を立つぞといへば、我に逆ふより起ること多し、そのもとを深くかへりみて、そのもとを塞ぎ、念慮の萠に心をつけて、早く拂ひ去るべし、少しも胸中におくべからず、
怨み憤ること、これは大やう我に愛らしからず、我に隔意ある時に、怨の心出で來るなり、是れ大なる惡心なり、おほよそ人の世にすむに、我と我を苦めて、心を焦し、身を危ぶめて、一時の安き心なきはこの怨の心あればなり、家の内に、一人怨みの心あれば、その家不和にして治まらず、女の人の家にゆくは、齋ふるたすけなるに、却つて我故に、家の内を不和にするはその罪遁るべからず、この故に如何なる無理なる事ありとも、怨の心持つべからず、偶まあまりと思ふことありとも、我心に行屆かぬゆゑにこそ、かくあらめと我身にかへりみ、我足らぬことを勉め行ふべし、このこと眞實あらば、などかは人もあはれと思はざらむ、かへす〲も人を怨み憤りて、更に大に人に怨み憤らるゝ種を蒔く勿れ
又一家の不和は、多くは怠ける人の交れるに起れば我が爲すべき業をのび〱にして、心まゝなる振舞をなすべからず、この怠りは、さしつけて害とは見えねど、このましげなく、氣隨なる心、常となりぬれば後に害出で來て、家齋はぬものなり、よく〱つとめて怠るべからず、おほよそ、つとめを怠らぬは、上御一人より、下萬民まで、なくてかなはぬこ

とにて、婦人の身に限らねど、女は内にのみ居て、怠りやすきものなれば、心をつけてつとむべし、或は夫のいつくしみを得れは、初めつゝしみしことを忘れて、なれ〳〵しくなるは、いやしき女の癖なりこれをよく辨へて、よくつゝしみ、なれ〳〵しき振舞あるべからず、

西眼に映する日本の食物

梅湖逸人

『パンは命の杖である』如何にも英吉利人の我々には其通りであるが、日本人には左樣は參らぬ、日本人は『米が命の親』と言つて居るので、朝、晝、晩の三食とも主食物は米である、日本家屋の臺所では、我々から見て是非必要と思はるゝ割烹用ストーブ、竈、及び熱湯の釜等、そう云ふ込入つた道具立が備つてない、鐵器の或物は我國で、(英國のこと)着物を煮る(洗濯の時を云ふ)時に使ふ銅器に似て、其れに米を炊くのであるが、燃料には木を用ゐる、夫れから大きな『ヒバチ』夫が煮物、焼物、又は揚物などと同時に種々のことに使はれる樣充分の長さがある、處で、其處にミルクプッヂングもなく、食麵包もなければ其他一切のパン類もない、燒物は日本人には知れて居らぬと見へる。揚物鍋、重に我々のオムレツに似た皿のもを造る爲に極めて稀に用ゐられる、若し火を強くせねばならぬ必要があれば『シチリン』といふものを用ゐる、是は土製の炭入れで空氣の強い流通が炭にまで出來る樣な構造になつて居る『シチリン』とは『七厘』といふ意味で(十厘で一錢になる)といふのは一度七厘で此器が購はれた時代があつた相だ、が今は其二十倍を拂はねば求められぬ(炭價が七厘さへ費はぬと云ふので此名があるといふ説もあるが原著者は何處から斯んな説を聞かじつたか)通例の家では飯は只朝早くと晩食の

時に炊かれるのみで、晝飯の分は朝飯の殘りが續く樣になつて居る。

英吉利の料理人は米が軟かになるまで煮えると、其を濾袋に移し、ソウス鍋で殘らず水分を濾し去る事が、是非やらねばならぬ事の樣に思つて居る、處が日本人は米が飯になるまでにはチヤンと水が引切る樣に精密に水加減を知つて居る。インヂアン征伐の時であつたが、土人兵が米食の歐羅巴人に對して、『我々には自分共の濾下水計り飲ませる』と云つて盛に文句を云つたが、實際は其濾水が米の滋養分を半分は持て居るのだ、米產國の人民はよく之を知つて居るが、夫を御存じない歐羅巴の料理人は、譯もなしに勿體ない贅澤をやつて濾水を捨てゝ居る。

次の重なる食物の材料は魚である、日本の海も川も魚類には極めて富んで居る、而かも生魚を手に入れられぬ程海岸から離れた處は先づ無いといつても宜い。生きた魚から生肉が可愛相にも切り取られるといふことを、自分は先きに本で見たが、事實には夫を見なんだし又そんなことが實際あらうとは思はれぬ。けれども、水槽に生魚が泳ぎ廻つて居るのは確かに見掛け、而して其中から摑み取つて我々も晩餐には一つを喰つた。

魚の種類は矢張普通のものが一番多い。北海道では鮭が產する、奇麗な大きな形で、甚しく鹽をして乾かしてあるが生肉は深紅の色である、夫が鹽出しの爲に冷たい水で浸された上、厚い片に切られ、而して金網の上に炭火で烘られる。鹽辛いものに弱らぬ人には隨分美味しいものだ相で。

鯉の類は鮭よりかモット一般に產れて、丸燒の上焦色ソウス（醬油を云）をかけて皿にのせて出される其肉は餘程白くて而して極めて美味い鮎も食べ方は同じであるが、チト食難い魚で、小骨が中々に多い

我々の食つた內で一番に美味かつたのは『サシミ』である。即ち魚の生肉、肉は鯉からも切取られるが一番多く見掛けるのは、長さが四尺から六尺程もある巨大な鰹形したる魚から作られたのである『サシ

ミ』の皿の中にはまだ外に細く長く切割いた葱の小さな積重ねがあり、生薑の片がある、搗砕いた極めて辛い根の小さな團もある。(山葵を云)辛子よりかもつと辛い。夫にまだ小さな黄菊の花が添へられてある。又臺なしのコップがあつて、夫に醤油が半分入れてある。ワオセスターソウスの類で。炒り豆から造られたものそれをよく搖かして、中へ『サシミ』の切片を浸し、夫から口の中へ運ぶのである。此品はドクトルから一番養生になつて而して消化し易い食物として、病人計でなく誰にでも甚くすゝめられて居る、

夫から大口魚のやうな魚がある、四角に身をおろして、煮上げた上其煮汁と一緒に用ゐられる、汁には美味な野菜が添へられてある、生籬から刈つて來た棒切れ見た樣な『カツオブシ』と云ふものがある、堅く乾したもので、何も飯の菜がない時には、鉋屑が其から削り出されて副食物となる。『カリーと比較して頗る美味』ミンノー(柳バエと云譯名もあるが暫く原名に隨ふ)は乾く前に集蒐されて、而して丸身で食はれる、丁度ホワイトベート(西洋の魚名)の樣に。夫から一番奇妙な平つたい白い魚がある。髮の毛の樣な觸鬚があつて、全體が甚だ薄くて、極めて柔かで、丸で革の樣である、多く飲連の習慣として酒の下物に用ゐては喉を鳴らすが、自分は遂に風味をせずに仕舞つた。旅人宿又は一箇人の家でも用意として水槽に鰻を貯へて置く。食つて見てはチト堅くてしつこい方であるが、是は日本の計りではなく、何國のでも左樣であらうとおもふ。また色々重な魚もあるが我國で網に入るものと大した差別もない、此等は皆酢の或物と共に生肉で用ゐられる。此處で日本人が如何樣にして食事するかを話さねばならぬ。彼等は平常の樣に床の上に座ると、下婢が低い食卓を其前に据える、食卓は二尺四方も有うか木に漆を塗つたもので、載せたものが滑り落ちない爲に、端にぐるりと緣木が付いて居る。膳部はスウプの小さな椀に魚が一品、其に豆か野菜かゝ一品で

成立つて居る、又蓋をして空の碗『ダイコン』の小さな片を僅か入れた小碟夫と我々で云へばチョップステツキ（箸を云ふ）其一對がまだ其外にある、箸の持方は一寸鉛筆を二本持て見れば大略想像がつく次に『チエサン』が（下婢を日本で呼ぶ僻）御飯の桶を持て來て前に坐る、此時空な碗の蓋をとる口の處で直徑五インチ近くもあらうか而して禮儀堅い人であると一寸一禮して夫を下婢に渡す、下婢は盆に之を受けて、小さな羽子板に似た木の篦で（ランカシヤイア地方で子供が持て居る）飯を掘出して碗に盛つて又盆へ載せて、勿論丁寧に一禮して差出す、之を食卓の上へ受取つて置いて、而して先づスープを吸ふ、夫から左手に飯碗を持て、而して右手に箸を持て魚を一口食つて、夫から飯を一口食つて、而してから前にある膳部の中で何でも嗜好なものに手を付け食事を進めるのである。下婢は何時でも茶碗の空になつた時には盛てやる用意をして居る。副食物は好きな物を求める事が出來るが、自分は滅多に膳部の外に何か欲しいと云つた人を見なかつた。紳士は飯が澤山にある時は、茶をかけて呑込む。我々はさう澤山に茶がかゝつて居ると鉢か皿へ是非捨てるが日本では飯を捨てる事が甚だ惡るい作法と考へられて居る、食事の終りには『ダイコン』の片を食ふのである。

大根は蕪菁の種類で一尺八寸の長さと殆んど二寸の厚さにまで生長する、其をざつと洗つて割烹せずに膳部に用ゐるのである。日本人は我々の乾酪と効能が同じだと云つて居るが、併し身體が大切だし、自分は毎食事の終りに大根を食へと宣告せらるゝよりか、寧ろ世界中の最も不良の不消化病に惱まさるゝが勝だと思ふ勿論厭だと思へば食はずに置いても宜しい。

箸は僅か經驗すればさう使用ふに滑が折れやうとは自分は思はぬ。先づ二本の鉛筆でやつて見る、一本が拇指の眞中で一緊め緊めて、人指指の本とそれから中指の尖頭とで押て、其次は拇指の尖頭と他の二

本の指の間で自由に使ふのである。

野菜に付て話して見樣、シキロット（譯名が一寸何を指すか見當らぬ）及び緋隱元が殼なしに最も多く用ゐらるゝが通例である。煮て（時としては砂糖で煮る）冷して食べる。而して我々西洋人には不思議だ奇體だと思はるゝ珍らしい野菜がある、其れは百合である、百合の球根が砂糖で煮て食はれるのである英吉利人は實を食ふ爲に櫻を育て、花を賞する爲に百合を養ふのであるが、日本人は花を要する爲に櫻を育て、球根を食する爲に百合を養ふのである、其百合は甚だ鮮かで或物はマーロンス、グレセス（西洋の花の名）に似て居る。其他變つた丼物は竹の根の煮付である、それはアーチチヨークの外部の樣に片々にまで分れる、其色は白くて風味は淡薄で而して中には不消化の者がある、それから『ノリ』を云ひ落してはならぬ、其は乾し貯へられて、熱湯をさして食用にする。それから又鷄卵である。其は普通半熟としてスープの中へ入れられる、又旨いオムレツに作り或は醬油か砂糖とかき混ぜて生で食用にする是で一通りの食事を充分云つた積りである、大きな御馳走の席になると、また澤山同樣の皿の物が同じ方法で用ゐられる。客は室の周圍に座つて主人は丁度『トコノマ』の下手に座る。而して各々の前に、例の魚やスープや其他の料理が載つて居る膳が据えられると、下婢が飯を持て來る。健康者は米から醸されたる國民的飲料の『サケ』をあつさり醉ふ程に飲む。大きな鉢に温湯を入れて（出來得るなら櫻の花を其れへ浮べる）それで小さなコップを洗つて、『チエサン』のお酌で波々注いで貰つて、我が懇意を結ばうと思ふ紳士に其を渡す。先方では我がやつた杯から飲んで、それから自分に向て同樣に振舞ふ盛餐の席になると通例舞踏を職業にして居る小娘の手踊が見物される、而して客が宅へ歸るときには木の箱が渡されて、其には銘々食べなかつた料理を入れて持歸ることが出來る。

其と同樣の箱が旅行の時、特別な料理を入れる爲用

ゐられる。列車が宿驛へ停まると、小供や大人が肩から紐で給仕盆をぶら下げてプラットフォームへやつて來る、其中には入れ立ての茶を充たした急須や前に話した木箱が載せてある。茶は急須共で僅か三ファーシング（一錢五厘）で急須は持去つても宜しい。箱は內部を二區に仕切つて、其一方には冷えた飯があつて、他の一方には魚の片、生薑、又はソラ豆が入つて居る。又欲しいければ『スシ』の箱も求めることが出來る、魚の薄い切り身を飯に壓付けて、全體が二寸程の長さに、海草の薄い膜で包まれて、圓く長く巻かれてある。サンドウイッチよりか食つて見るとズット美味い。

肉は甚しい限制の中に食はれて居る、其は佛敎によりて禁ぜられてあるので、魚丈けは許されてあるが是は堅い禁制である。今でも往々大きな町で肉屋の前に『山鯨賣所』と書いて張り出されて居る。牛肉と呼ぶと差止められて、鯨と呼ぶに正しいと云はれてある。馬肉も時々そんな風に知らせらるゝ事がある。

牛肉も馬肉も小さな片に切られて、葱、砂糖、及び醬油とフライにされて、而してフライ鍋から直に食はれる。山中では熊の肉がよく口に上る、味は時によりて鹽漬の牛肉に似て居る、

飲料にまで戻つて話すと仕様、酒の外にビールが追々用ゐられて來た。其は獨逸ビールの様に甚だ透明である、が只今では普通日本人の財布にとつては餘り高價の飲料である、夫に日本人はまだ其飲方も知らぬ。其代り例の小さな臺なしのコップで、好んで『サケ』をやつて居る。自分は鐵道の乘客が長い旅行の中に、チョイ〳〵德利を引出しては一口づゝ飲んでソッと蔭へ德利を仕舞つて濟まして居るのを見た事がある。

◎女子と謠曲　觀世流謠曲に堪能なる麴町區有樂町土居香海氏は、謠曲は女子にも適する聲樂とし、特別敎授法を以し指南する由。

行動の花

阿井飛洋

禮は人の行ひを美しくする作法にして、禮ある人は奥ゆかしく、おのづと貴く見ゆるものなり、故に位高く家富める人も禮なければ賤しく、身卑く家貧しき人も禮あれば貴し、されば身分としての高き低きは知らず、人としての貴き賤しさは、禮の有ると無きにて區つ事も得ん、されば禮は極きて難きものにや難しといへば難し、さりながら人は鳥にもあらず獸にもあらず、萬物の靈とも云はるゝ程なれば、鳥の如く無造作に飛び、獸の如く無造作に走るとは、大に、趣を異にせざるべからず、さるを禮なき人の行ひは、この鳥獸にも劣り、是等の人の口より禮儀は無沙汰などいひて、難きものとなりけり、此の難しといへるは、習ふて難きにあらず、習ふに難きなりいかなれば習ふに難きや、極めて窮屈に思ふが故なり、窮屈と云ふ事は馴るゝ事を得べし、羽織袴を着る窮屈に比べて、禮も之れより上に窮屈なるものにあらず、さるを羽織袴を着る窮窟は禮を缺ぎて忍ぶを得べき態にて、禮はます〳〵窮窟の度を增したりされど窮窟なるは禮の好む所にあらず、自然の行ひを貴ぶなり、物はすべて自然を貴ぶ、されば野生への花の風情あるも、床の間に插さんには、多少の振はつくらざるべからず、されど花の自然を失ひて、窮窟にこしらへたるは見にくし、故に花形の工夫を費して既に斯の道の敎あり、人もそれと同じく、野育の質朴なるも、世を渡るには多少の作法なかるべからず、されど人の天眞を失ひ、窮窟にかたまりては見にくし、故に人の作法に工夫して、禮式と云ふ敎あるなり、

知れる人に逢ひたる時、頭を下ぐる如き禮は、いつの頃誰傳へしかは知らず、我國一般のならはしとはなりたり、されど其下げ方にも注意あり、高ぶりたるやうにも謙りたるやうにも見ゆると思へば、人と人とまじはる間には、手を動かすにも足を動かすに

も、よく〳〵心すべき事のにて、この禮と云ふは、人のよき行をそれこれと採りて、一定の型となりたるものに外ならず、されど其型は自然に作られたる、たゞ頭を下ぐる如きものと、その下げやうの如く工夫したるものとあるべし、

しかして其型は國の掟にて定めたるものならねば、生花の道に青山流また遠州流などある如く、茶の湯に千家流また宗徧流などある如く、流儀の名の變りたるやうに、その型の趣きに多少異りたるものなきにあらず、この禮式も亦流儀ありて小笠原流などいへば、禮式の本家の如くいひなして、禮式を說く多くの口には小笠原名の呼ばれざるはなし、



かくて多くの人の重きを置き、本邦禮式の最も正しき敎なる如く思ひなせる小笠原の家は、元信濃の大守にて、室町將軍に武藝を敎へたる弓馬の家にして、實は禮式の家にはあらず、小笠原左京太夫貞慶の家臣小池貞成の門人水島元成といへるもの、その門人などと思ひ〳〵に古實になき禮式を作り、家門の聞え高き小笠原の名を借り、おのが作りたる禮式に冠したるものなれば、水島流ともいふべきものにて、禮式の正しき家柄といふべきは伊勢流なるべし、伊勢家は、小笠原家に弓馬の世々將軍家殿中の禮傳ある如く、

上古より禮法を傳へ來りて、公家に用ひられたる禮節、即ち世上に自然に用ひられたる本家固有の傳とまで云ふべき、禮節の傳あり、而して流儀と云へるは人々のそれ〲に工夫して作りたるものなれば、いづれにも捨て難き道理ありて、流儀といふ事は、もと狹き話なれば、此弊は遂に一洗せざるべからず

寒夜の琴の音

黃華女史

春とし云へど名のみにて、ふく風の身にしみわたり都と云へど、そのかたほとりは、ゆきゝの人も絶え〲にて、隣家の床下には、犬の子のうめく聲さへいとあはれにものすごく、月影はこほるばかりにすみわたりて、心も自ら沈み行く、すぎし睦月の冬の夜べ、そゞろに、舊をおもふ心とゞめがたくて、一人燈火のもとに、我が身をはかなみつゝありしが遠くかなたに聞ゆる琴の音は、しづけき空にひゞきて、わが腸をさすやうにぞおぼゆる、あはれ、如何なる人のしらべぞと、いとゆかしく思ふを、やがて其音の近うなりて、わが門邊にとゞまりぬ、絲の音もつたなからず、うたふこゑさへ、いと妙にて、あはれなりけり、いざやと、窓おしひらけば、まだうらわかき少女二人、此の寒空に、うすき破衣身にまとへど、何となうけだかきさま見えて、いやしき非人の子とも思はれず、見るからに、哀れいやまさりて、僅かなる代とらせんとすれば、妹とおぼしき一人の少女は、もつもたゆげに、やせほそりたる手におしいたゞき、うれしさの忍びがたくてか、姉なる少女の袖ひきて、見するもいぢらしくあはれなりけり、かくてしらべの一曲を終へて、よろこばしげに腰打ちかゞめて、歩み去りぬ、げにもあはれなる娘よと、身にしむさむさも打ちわすれて後を見おくれど、早や其影だにみえずなりて、ほのかにかよふ絲の音ぞ聞ゆる、

あゝ、これいかなる人の子ぞ、いかなる人のなれの

果ぞ、幸なき命運に抱かれて、たよる人もなくて、わづかにおぼへたる藝をたよりに、その日を送る者ならん、はたやめる親の爲とて、二人がけなげなる心もて、ふり埋む雪さへいとはで、よな〳〵人の門邊にもの乞へるならんか、心ある人は、いかで袖ぬらさゞるを得ん、ましてこを生みし人の心は、いかにかつらからむ、思ひやるだに涙なりけり、

空蟬の世は、いかで榮枯盛衰の免れ得べき、めぐる車のかはりはやく、今日乘る人も、あすは挽く人となる習、此の少女とて、むかしはあたゝかき衾に、樂しき夢を結びし事もありしならん、幸ある身に人を羨ませたることもありしならん、げに人の運命ばかり、はかりがたきはなし、されば人、たとひ身は深山がくれの朽木となるとも、心ばかりは、野末の菊花のやうありたき者にこそ、さるを、世の大方の人は、外目のみかざらんことをつとめて、その心をばさらに省みざるが如し、かくては、その境界によりては、初め正しかりし人も、終には鳥獸の行をなしてはぢざるやうにもなるべし、いとうたてきかぎりにこそ、かゝる人は、己に覺悟てふことなく、只わが身を利慾の奴隷とする、いと卑むべき族也、

かゝるさまとなれる少女、人の美はしき衣きたること見て、消え入らんばかりに、耻ぢ入りしこともありなん、されど少女よ、これうらやむにたらず、耻づるに足らず、かたちよりは心を省みて、おのがあしきを耻ぢ、人のよきを羨むべしと、ふかく同情をよするおもひ、やみがたくてなん、

霜さへて寒さ身にしむ冬の夜に
世をあはれとやうたふ琴の音

駄菓子屋

港街散士

予が家は、本港町の或る四つ角である、予が家の隣は、近所の小供を御得意にして居る駄菓子屋で、後家と娘との女暮しであつた、後家と娘との女暮しと

云へば、聞耳立てる人が多いに、其菓子屋の小障子に『二階貸します』と云ふ札が掛つて居るので、内〳〵指さしをする者もあつた、或る日曜の事、顔の赤い兵卒が來て、四角張つた物の言い樣で、似合しからぬ縮緬の袱紗に包んだ紙入の中から、名刺と共に銀貨一つ二つ取出して後家に渡して歸つたが、其翌日から『二階貸します』の札が取りはづされた、

次の水曜日には、彼の兵卒が、同じ服の連れ一人とやつて來た、後家は貴人の樣に取り持つて、チヤホヤ云うて二階に上らせた、やがて娘は、呉服町の牛肉屋に走つて行つたが、其行道で云ひつけて置いたのか、酒屋の小僧が、娘より先に一升徳利を持つて來た、娘が大きな竹の皮の包を持つて歸つた時、後家はヒチリンを忙がしさうに扇いで居た、何時間か經つて、二人の兵卒は猿の樣に赤うなつて、劍の皮帶を腰に卷きながら下りて來た、後家が揃へた靴を手もかけずに穿いた、お蝶さんと娘の名を呼んで、何やらからかつて出て行つた、

それから日曜水曜毎に二人、三人、是等陸軍々人がやつて來て、駄菓子の得意客の可愛らしい子供を驚かせた、二階其度毎に、怪しげなる歌の聲、間違うて居るらしい吟咏の聲、高笑ひの聲、ジヤンケンの聲、間にはお蝶のキヤアトいふ聲も聞えた、お蝶は店に來る子供等の味方となつて、此名譽ある軍人を敵にして厭がつたが、後家はそれを言ひ慰めて、水曜日曜を五つ六つ過した、

甲斐々々しい後家の行屆いた拭き掃除に椽も柱もピカ〳〵と艶の出る程であつた家が、劍の先で疵を付けられ、靴の踵に踏み缺かれ、一月程の間に、店の見込が眼立つて變つて來たやうであつたが、それでも案外儲かるかして、後家のチヤホヤ云ふのは少しも變らなんだ、然し或る時凄しい音がして、二階の梯子段に大きな穴が明いて、強さうな顔の兵卒が眞逆樣に倒落ちて、下にあつた三味線の胴を折つたのは、流石の後家もチヤホヤ云ふに言はれなんだと見えて、『是れじやから私が云はぬことか』と、娘に叱

られるやうに言はれた、

其次の日曜から、此の駄菓子屋の上り口に一足の靴も見えず、小供等は元の通り、心置なく店の前を遊び場にした、そして『二階貸します』の札が再び表に張付けられた、半月ばかり經つて其札がまた取られた、色の白い、柔和な、上品な、服裝の立派な、若い人が住込んだ、是は店の小さい得意客の仲間には別段反對の運動もなく、お蝶も至極機嫌が好かつたが、眼敏く見付けた近所の若い者共、其夜の夜話にあられもない噂をした、

引移りの祝ともいひさうに、其晩は後家も娘も二階に呼ばれて、しめやかな酒事があつたらしかつた、そして草臥れたといふものか、早う寝て仕舞うたらしかつた、處が翌朝に成つて後、後家と娘とが叫ぶ様に驚いた聲が聞えた、何事かと行つて見たれば、昨日の柔和な上品な人が、夜の間に姿を隱したとの事であつた、そして衣服其外失せ物が大分との事であつた、後家と娘と驚いて叫んだも尤もであつた、

それからは例の札は掛けられなんだが、傳を以て身元の知れた人を置くことに成つたらしかつた、又半月ばかり經つて、六十ばかりの婆さんと、洋服姿の若い男とが出入するやうに成つた、後で聞けば、この婆さんは按摩であつて、若い男は其孫で、學校の教師をして居るとの事であつた、お蝶等も、子供等も先生々々と云ふて、懐く程なれば、可愛らしい宜い男であつた、婆さんと先生とは、職業が違ふ丈に服裝も、言葉付も、其外萬の事も違うて、祖母孫の間柄とは、何うしても見えなんだ、

婆さんは、毎日毎晩稼ぐ一方、無駄な物一つ買はず僅かの賃錢の中から小金を溜めて居るに、先生は中中それに似ず、小い箱の中から巻烟草を出して、それを店の火鉢で吸ひ付けて學校へ行くのが毎朝の事であるが、其巻烟草は西洋ので一本八厘もするとか、と或日後家が予に話した、

お蝶は何かと親切に先生の世話をして居たが、先生が折々夜を更すこともあり、宿つて戻る事もあるの

で、そろ〳〵信用を失つて來たらしく、寒空に成つても、婆さんは、綴つた綿入羽織で、一晩も缺さず仕事に行くに、先生はだん〳〵遊び癖が付いて來てどろ〳〵に醉うて歸ることもめづらしう無いやうに成つたとの話であつた、そして席料なんかも、皆婆さんの懷から出て、先生の月給は、此頃新調した柄のよい洋服と、美しい襟飾と、絹のハンケチとの外何うなつて消えて仕舞ふか、分らぬとの事であつた月給の消えて仕舞ふばかりではなく、折々は婆さんの繼ぎ袋の口から先生の手に渡される物もある、入らぬ世話ながら齒痒うてならぬと、或時後家が娘と話して居るのを聞いた事があつた、其外後家の話を聞けば、婆さんは、折々泣いて賴むやうに意見をして居るとの事であつた、

然し先生の不身持は、少しも直らぬらしく、二三日も續いて婆を見ぬ事があつた、其時には、婆さんは一人でシク〳〵泣いて、只氣遣うてばかり居たとの事であつた、

心配からか、婆さんはとう〳〵病氣になつて、一晩も缺かさなんだ按摩を、我身にして貰ふやうになつたに、先生は矢張遊び廻つて、看病せぬは固よりの事、柔しい言葉一つも掛けぬ位で、誠に氣の毒な可愛さうな次第、お蝶が親切に痛はるのを喜んで、斯んな可愛らしい嫁でも持つて呉れたらと、涙の絶間なかつたとの事、

或夜の一時比であつたか、あわたゞしい後家の聲がして、續いて人聲、足音、騷々しい事であつた、予も襯衣姿で急いで行つて見たれば、婆さんは俄に死んだとの事、それに先生は何處に行つたか分らぬとの事、何處に行つたか分らぬばかりではなく、婆さんは先生が殺したやうなものとの事、譯を聞いて見れば、先生は邪が非でも金の入る事があると云ふて婆さんの臍繰を無理にねだつて、婆さんが了知もせぬに例の繼ぎ袋を引たくつて持つて出たとの事、それで婆さんは泣きくづをれて、一人の孫があのやうでは生きて居る甲斐もない、死にさへすれば金もい

らぬ、と言ひ〲眼を塞いだとの事、先生は其翌日も其又翌日も歸つて來ず、學校にも出ぬとの事、ツマリ婆さんは人の世話で、やう〲灰にはして貰うたが、其骨を拾ひに行く人はなかつた駄菓子屋の後家と娘とは二階貸をして、僅かな席料を儲けるが爲に、何程な損をしたか知れなんだ、何程な騷動をしたか知れなんだ、矢張罪のない、あどけない駄菓子のお客の方が、餘程宜い利益があるので、後家と娘とは、近所の子供を遊ばせることを務めのやうに、親切に可愛がつて、店先は幼稚園の運動場のやうであつた『二階かします』の札は釜の下に燒かれたか、何うか知らねど、それから半年ばかり經つて、いよ〲變らぬ二階の主人が定まつた、即ち或る手堅いおとなしい職人が、此家の養子に貰はれて來た、お蝶の蝶々髷は、其日より丸髷に變つた、

東北の慘狀

東北の飢饉は天明年間にもまして、非常の慘狀を呈せるより、中村豪詮、義賢の兄弟二氏は、其救濟の途を講ぜんとて、先頃上京し、盛んに知名の士を訪問し、大に其同情を得つゝあるが、同氏の話の一端によれば、同地方の或一部は、食を得たりと稱するものにて、大根五本に支那米二合、內地玄米一合を粥にしたるものが一日五人の食料なる由、猶祝日の餅なりと稱するものを見れば、豆腐糟、蕎麥糟、玄米の粉、などを五六種搗交せたるものにて、これにても口に入るかと思はるゝばかり、實にあはれなる有樣眼に見るやうなり、これを思へば一杯の米の飯、なか〲におろそかに箸にすべくもあらず願くば同情の念に富まるゝ本誌讀者諸孃、この窮民地に一掬の涙を與へられんことを、

婦人雜誌記者倶樂部

本年の初會を、去る二十五日神田駿河臺日本正教會內に開きたるが會するもの三十有餘名、宿題の改良服に就て討議あり、餘興としてテニス、歌がるた等ありて、倶樂部始まりて以來の盛會なりき、この會より中川愛氷氏の主唱により常任幹事を置くことに定め、來馬琢道氏を推選可決したり、

知りてよきこと

靴足袋の修繕

昔は袴のひだに依て妻女の心掛が行屆て居るや否やの標準とされましたが、近來は襪の如何を以てせらるゝ様になつて參りました外國の様に家の内外とも靴穿つめにして居る處ではわからないが、我國は靴を脱いて座敷へ通るのですから、色の褪めたのや穴の出來て居るの、又は其修繕の不完全なのはあり〳〵と見へまする、そんなら破れた時に直ぐ買ひ替ゆればよいと云へばそれ迄ですが、是は隨分不經濟であるし、又其古襪の利用法がないので、主人や子供が靴を用ゆる家では此古襪が澤山あるのです、そこで此破れ襪の修繕と云ふことが、主婦の一問題となつて居ります。

一體此襪の修繕といふことは、餘程編物の上手な人でもよくゆかぬもので、之を立派にしやうと思ふには、少くも三分の二を解いて編み替へねばならぬ、それ故自然等閑になり易い、其結果としてどうすれば襪を巧にまた多く時間を要せずして、修繕し得るかと云ふことを考へて居ります、余も亦た此事で常に困まつて居る者で、色々と考案致しましたが、どうも思ふ様にいかぬ、眞しやうと思へば時間がかゝるし、早くしやうと思へば立派にゆかぬし、さてどうしたものかと思ふて居つた折柄知巳より一の器械を送られました、夫は『自働靴足袋繕ひ器械』といふのです、これは器械を手にし指先で小挺を前後に回轉すればよいので、其結果は是迄のよりも早くまた奇麗に出來上ります、自分がやつて見て誠によいと思ひましたから、同憂の方々に御紹介申ます此器械は慥か京橋加賀町一番地英國貿易商會の販賣で、代價は八十五錢かと思ひます

リボンの鑑別

今日髮飾りを主として、色々に使用されるリボンの額は大きなもので、需用は日に増し殖えて行く勢である、元來リボンといふものは、機が緊つて居て、地が薄くて、それで皺にならない、少々は水に浸つても色の褪めないといふ要件を具へねばならぬのであるから、どうしても安くは無い、今日の處和製は概してまだ舶來に及ばないが、然し中には決して舶來に負けぬのがあり、價はずつと安い、リボンの中で杢目織り、あれが中々眞似の難かしい物であつたが、それさへとう〳〵立派な和製が出來、比べて見ても見劣りはせぬのみか、使つても引けは取らぬ、然し悲い事には、こうなると直ぐに擬製物が現はれて來る、絹の代りに綿糸を交ぜる、綿糸入りは舶來にも安ものにはある、光澤は劣るがリボンとして使へる然るに横に柞蠶糸を使つた擬物は何とも仕方が無い、糊で無理に光澤を出して置くのだから、皺になり易く、少し水に浸ると光澤が無くなつて了ふ、かういふ物こそ安物買ひの錢失ひで、かやうな商人こそ實に憎むべきものである、

リボンに綿糸、柞蠶糸が使つてあるか、無いかは、少しほぐして、糸を心までよく捻を返して見れば分らぬことは無からう、綿糸なら、火にくべて見れば臭氣で絹とは直ぐに區別が出來る、柞蠶糸の糊で堅めてあるのは、手觸りで分らう、上等のリボンは如何にも滑こく、手觸りが柔かで、薄手で地が締つて居るべきである、色の褪める褪めぬは、一部分を二三日日光に曝して、比べて見れば分るが、これは一寸面倒であるから、買ふ店の信用に依頼する外無からう皺になつたリボンは、鐵瓶の湯氣に露して火熨斗を懸ければ直ぐに直る、油垢を揮發油の中で振つて洗へば落ちる（國民）

河原操子女史の謝状

蒙古といふ所は名詮自稱と云ふもをかしいが、蒙昧半開、否未開といふてもよい程である、その地に文明の教育を施したいと云ふので、纖弱なる女流の身を以て、其任に當つたのは、諸孃の能く知らるゝ所であらう、

そこで本誌編輯局では、同地が醫薬に乏しくて、疾に罹るものは、治癒するの途を知らぬといふ事であるから、女史の孤懷を慰藉する爲に、薬品を贈呈したいものと、讀者諸孃に御相談をしたのは昨年一月であつた然る所同情の念に富まるゝ諸孃は續々贈金せられ、弊局の微志を助けられたので即ち其當時の誌上に（第十五年第四號）に報告した通り、薬品を買調への、諸孃の厚意とゝもに寄贈した、過日女史から落手のはかきが着したから、そのまゝ茲に撮影して御報告をかね、改めて諸孃に御禮を申述べます、





男女教育の差異

男爵　細川潤次郎

女子教育の必要なることは、別に深遠なる道理を講究せずとも、自ら明白なるべしと思はる、人に由りては種々の說をなす者あるべけれども、余は簡單なる一言を以て之を蔽はんとす、盖男子も女子も同じ人類なり、男子の教育已に必要と認むる上には、女子の教育必要にあらざる謂あるべからず、若し男子には必要にして、女子には必要にあらずと曰はゞ、則此れ女子を人類より排斥したる者と謂ふべし、但教育は男女共に必要なることなれども、必要の程度は男女によりて同じからざる所あり、男子は首として外事に當り、殊に官人となり、軍人となり、諸種の工藝に從事するが如き人は、高等專門の學科を修めざるべからず、而して女子は專ら內事を治むるを以て、普通の學科を修めて、智識を開發し、讀み書き計算女工等の事に習ひて、家政を執るに差支なきを以て足れりとすべし、才力餘あり資力も亦豐なる女子に在りて、固より高等專門の學科を修むるを妨げざるのみならず、或は稱讚すべきことにもあるべけれども、之を尋常一樣の女子に望むべからず、是故に學科の高低を以て論ずるときは、女子は男子の如き程度に達することを得ざるべし、此れ決して恥づべき事に非ず、女子の天職之をして然らしむる所なり、天職とは女子の嫁すること、男子の婚するよりは、率ね數年を早くするを以て已むことを得ず、年限を節縮せざることを得ざること是なり、女子已に嫁するときは、其家の內政を執るを以て、概して教育に從事するを得ず、子女を擧ぐるときは殊に然りとす、偶嫁したる後と雖も、子女養育の煩なくして

教育を受くる人ありと雖も、此れ固より例外にして普通の事に非ざるべし、故に女子教育の程度の男子の教育の程度より低きは年限を節縮して天職を全くする所以にして、耻づべきことに非ず、而るに此の如き比較的に短縮なる年月に於て、普通の學科を修了せんとする容易の業に非ず男子ならば年限長きを以て時に怠慢の事ありと雖も、之れを補塡することを得べく、しかのみならず卒業の後猶教育を受くる時機なきに非ざるも、女子人に嫁して子女を養育するに方りては、哺乳撫育の爲、夜間と雖も安眠することを得ざるべし、豈に教育を受くるに遑あるべけんや、然らば則女子の教育に於ける、拮据勉勵して一日も一時も閑過すべからずして、比較的短時間に於て終身受用すべき必要の事件を練習せざるべからず、其用心の油斷なきことは、一層も二層も甚しき者あり、女大學に女子は成長して他人の家に嫁する者なれば、男子よりも親の敎大切なりと曰へることあり、余は此語を引用して、今言ふ短時間に終身受用すべき必要の事件を練習することに適用せんとす、此の點に付て論ずるときは、女子の



敎育は男子よりも苦き所あり、然るときは學科の程度に於ては、女子は男子より易き所ありて、勉勵の程度に於ては、女子は男子よりも難き所ありと心得て可なるべしと思ふ

三輪田高等女學校

舜水女史

女子敎育の聲、ます〳〵盛んなるにつれて、主意も目的も引札の活版摺同樣、何れも良妻賢母を看版にして、續々女學校の設立を見るに至れるが、出來る丈はまた潰れるのもある、盛なるもの必ずしも立派なものに非ず、潰れんとせるもの必ずしも不立派なるものに非ず、盛んなることは、生徒を多く集め得たるものとすれば、敎育家ならでも山師にても出來得ることなり、然り現今の私立女學校は山師の手に成るが多く、免狀が賣品となり、生徒が顧客となり學校は良妻賢母營業となるのである、それでも經費さへ續かば、何うにか斯うにか體面を保てるが現時の有樣である、であるから女學校らしき女學校は、極めて盛んなるものより、却つて潰れかゝらんとするものにあるかも知れぬ、近時女學生の風儀を云々するものあるが、學生よりまず學校を取締らねばなるまい、

かゝる心配の種を蒔くことに平氣なる多くの女學校中に、縱横いづれより見るも、些の非難する所なきは、先づ指を三輪田高等女學校に屈すべきである、同校は云ふまでもなく、三輪田眞佐子刀自の設立せられたもので、婦人としてどれ丈の事が出來るものであるか、その力を試めす爲に、刀自にとつて最も適當なる女學校事業を獨力で經營し、學校を一つの墓場と定められたのである、然し學校を立てるといふことは、誰に聞かせても先づ耳を傾くることであるから、存外事業としてはむつかしい事はない、去りながらそれは他力によることで獨力でとなれば、女學校の數多き東京に、幾校物に成つたのがあらう

か、他力によらねば、學校を一人で脊負ふだけの財力と、學殖と、德望がなければならぬ、刀自は數十年の苦鹹に、この三者を得られたのである、即ち女學校設立者として、現今他に比肩すべきものなき大資格を有して居るものである、

刀自は學校を建てるに、先づ地面を持たねばならぬと云ふので、去る三十五年二月、今の麴町四番町の學校敷地を、千坪二萬五千圓で買ひ得、長屋十軒を假教場として、開校することゝなり、同年九月、及び翌三十六年四月兩度に、一萬圓づゝ投じて校舍を建て、理化學特別教室、屋內體操場といふ大仕掛な設備も出來たのであつた、

然る所、刀自の德望を慕ひて、入學を望むもの忽ち市を成す有樣にて、假教場を開いた其日、既に滿員を告げたとのことである、女子を持てる眞面目の父兄が、いかに此種の學校の設立を待詫つゝあつたかゞ分る、即ち女學校の數に不足はないが、完全なのがないことを證明されたのである、美名の下に、政略の下に、生徒を集め得た學校は、新聞半段の記事にも葬らるゝことがあつて、盛者必盛でない、甚だ不安心なものであるが、同校の如きは、世に教育といふことの必要を認めて居る限りは、同校をして盛大ならしむるのみならず、更に同校より幾多の分身校を見るに至るであらう、

學校の主義は、創立者なる刀自の品行を中心として方法は拙でも愚でも、善いと信ずる事に向つて、身を以て人を率ひるといふのである、品行とは刀自の人格全體とも見るべきものである、刀自は儒教主義でも、國粹主義でも、新智識主義でも、一つに偏つたものでなく、其長所を發揮するに勤められ、學は和漢洋を兼ね、今では外國語を研究せられて居るとの事である、

刀自は世の中に無限の訓誡を垂るゝことを樂みとして、教師も緣故あり、且つ同趣味を持てるもの、就中教師としては、師範教育を受けたるものを可として、多く女子高等師範學校出身の人を採用せられて

居る、
そこで自然道具立が高等女學校令にあてはまるやうになり、三十六年四月文部省の規定によつて、五年卒業の高等女學校としたのである、
生徒は何れも單に免狀目的でなく、刀自の德望を慕うて入校するものが多いので、それには相當の緣故あり、信用ある人の紹介によつて來るものが多い、即ち學校の主義を信じて入學した生徒が多いから、學校と生徒の間は極めて親密で、自然生徒に對する命令もよく行はれる、それに生徒を吟味して入學せしむる所から、生徒の家庭も極めてよい、身分からいへば華族もあり、多額納稅者、將校、高等官等の父兄を持つて居るのも少くはない、自然贅澤の家に育つたものが多いが、一切綿服でなければ、學校の門をくゞらせぬことにして、大に質素の美風を養う居る、
學校の方針は形式に流れず、家族的にして、淡白に「あなたの髮はハイカラであるから斯うなさい」「さういふ衣服の着やうはをかしいから彼あなさい」といふ風に注意する、それは敎師が生徒に對して、受持が違ふからなど云ふことはなく、誰でも氣の付いたことは、どし／＼注意して貰ふといふことになつて居るさうである、一昨年卒業式の時に、一人の生徒が、美しき衣服を着て出校したのを、敎師が見付けて『折角着替へて來たのであらうが、學校の主義に反するから、着替へてお出なさい』とて其日限り學校を出る者にも、一日であるからといふて等閑に付せず、それを改めさせた、かくして生徒たる最後の日まで學校の命令が圓滿に行はれたのである、
同校は前記の如く、いつも入學志望者が、募集の數倍となるので、その志願者の住所によつて、それ／＼信用ある女學校へ紹介して居るとの事である、なほ同校は頓て法人組織にし、永久に殘るものにするさうで、校長、敎頭は無給金にて、それ丈けのものを設備費とすることゝなつて居るから、高等女學校としての設備は、何一つ不足せるものはないとの

事である、同校の今日ある、もとより校長刀自の力によるものなれど、今後百年の計を立つるは、令息元道氏に待たざるべからず、同校はこの母子あつてますく其眞價を發揮し得らるゝ事と信ずるのである、

記者は女子教育の爲めに校長三輪田眞佐子刀自、敎頭三輪田元道君の健康を祈る、

貧民窟の小學校

平和克復となりても、相變らず箸と茶碗とのために苦戰しつゝある、下層社會に生れたる子は、敎育も何もあつたものでなく、甚だみじめなるものあり、その一二例を擧げんに

（二）四谷鮫ケ橋附近

この貧民窟の小學校は、現在の生徒數三百四十一名（內男百八十五名、女百五十六名）にして、通學區域は附近二十六ケ町に及び、校長室町氏は鋭意不就學兒童なからしめんと、殆んど戸毎に就て調査奬勵すれども、何れも家計不如意の貧民の事とて學齡兒童を子守奉公に出し、又は內職を爲さしむるため、隱匿するもあれば、移轉して其儘無屆に廢學するもありて、調査に一方ならぬ困難を感ずる由、隨つて衞生法も不行屆き勝にて、昨年十一月校醫小林氏の檢査によれば、生徒中百分の三十六以上トラホーム、若くは結膜炎に罹り居り、學校にては每日午前午後の二回敎員交代に生徒のため、自藥を與ふるなど手當を施し、又每週三回（月水金）女生徒の方は女敎員小川安子、男生徒は男敎員交代にて理髮に從事し、校內に風呂場を設け、日を定めて一回十五人位宛沐浴せしむる設備あり、

生徒は何れも內職を以て家計を補ひ居れるが、其種類は莨卷、吸口、丸藥まるめ、提燈の骨削り、下駄の鼻緒くけ、麻裏の裏附け、元結其他數多あり、賃銀は最高額一ケ月三圓四五十錢最低額二圓二三十錢七八歲の兒童にても二圓以上の稼ぎを爲すものあれ

ば父兄が目前の生計に逐はれて、教育を忽諸にするも止むを得ざる事情あり、

父兄の職業は車夫八十一名、日雇人足四十七名、煉瓦職手傳及び土方十名其他にて線路工夫、納豆賣、公園の柴刈り建築場の板敷等種々雜多にして、一日の所得多きも六十錢を越えず、少きは十五六錢、それすら烏金を借りて、利息に捲上らるゝが多し、今年の正月は質草も盡きたりと見えて、例年より入質少く、貧民窟に名物の喧嘩も、酒を呑むこと少きがため、交番を煩はす程にも至らざりし、炭、石油の如きも近來は一錢買ひが多く、オカメ屋の殘飯とて兵營より持來るもの四錢位にて、大人も一日の飢を凌ぎ居れり、家賃は最高二圓五十錢のもの僅々三四戸、他は大概は九十錢にて、二組も三組も雜居せりと其狀態推して知るべし

（二）　下谷萬年町附近

四谷鮫ケ橋と對峙して、東京屈指の貧民窟といふべきは、下谷萬年町なるべし、然もこの附近は不良の徒多く住みて、小學校の生徒にて、警察署に拘留せらるゝ位は殆んど當然の如き有樣にて、殊に警察にて驚けるは、六七歳より十歳位迄の兒童は、窃盜罪にて拘引せらるゝや、これを二三人一つにして留置所に置かんか、彼等は首を鳩めて、逃出し策を相談するなど、甚だ惡智惠の發達したるものなりと、

こゝに建てられたる萬年小學校の生徒現在數は、七歳より十四歳迄四百一名（男百二十二名、女二百七十九名）にて、教授は午前、午後、夜の三度に分ち夜學生最多しと、そは彼等の生活に追はるゝより來るものにて、就中面白きは、晝は上野公園より、谷中の墓地等人の多く集まる土地、及び葬式の多かりさうなる邊に出で乞食し、夕刻歸り來つて、手足を洗ひ清め、何喰はぬ顏して出校し、翌朝になれば身體に態と穢きものを塗付け、一見乞食の風を裝ひて貰ひに出掛け、一日の貰ひ高は大概三十錢のよしにて、下手な職工となつて終日汗水をたらして勞働をするよりはと、却つて鼻高々と得意なるよし、

斯の如く乞食をするものに、何故學校へ通はせるか學問したればとて、乞食の足になるべきものにもあるまじ、と思へば、それにはそれだけの魂膽あり、實際彼等の父兄は、學問の値を認めて通學させるにはあらず、彼等の子供に學問をさせるに就ては『手紙も書けぬやうでは』といふにありて、其手紙と云ふは彼等の間に誰にも見すること能はざる秘密の通信用にて、これを下手に他人に讀まれては、身の終りとなる即ち子供に學問を授けしむるは、罪惡を働く便利の爲なるが多しと、

猶同小學校生父兄の身元はといへば、人力車夫最も多く、次に紙屑拾、荷車挽、人足、土工夫、空瓶空箱買、屑買、納豆賣、灰買、剝身賣、日傭人足といふ順序にて、其實は甚だ恐ろしき營業をなすもの十中八九なるよし、

簡易圖書閲覽場

東京府教育會にては、左の通り調査を終り來る廿日委員總會に附する筈なり、

一、簡易圖書閲覽場は、一般市民をして自由に圖書を閲覽せしむる場所とすること、

二、蒐集すべき圖書は、成るべく簡易にして、興味を有するものとし、實業思想及實業上の知能を得せしめ、且道德を向上せしむべきものを主とすること、

三、市は差向き市立特種小學校に極めて、簡易のものを附設し、將來市の直營すべき小學校には、較々完きものを附設すること、

四、市は各區に勸誘して各々一ヶ所以上の閲覽場を設置せしむること、

五、前記の場合に於て、市は最初開設に要する費用及び維持費に對し幾分の補助を與ふること、

六、學校に附設する場合には、其學校の職員をして事務を處理せしむること、

七、一般市民の集合し易き日時を選び、圖書説明會又は圖書講讀會を開會すること、

八、圖書貸附の方法を立つること、但し貸付の場合には相當の料金を徴收するものとすること、

九、入場者より閲覽料を徴收せざるものとする事、

十、市內在住の富有者に就て、金圓の寄附を求め、維持費の中に充用するものとすること、

十一、著者又は出版者に就て、新版圖書の寄贈を求め、藏書の增加を計る可きこと、

女子大學の教育學部

女子大學にては本年四月より新に教育學部を開設するに至りしが、其科程の一般を聞くにまづ

●教育學部●を第一部第二部に分ち

●第一部●は數學物理化學に重きを置き

●第二部●は博物に重きを置き

●兩部共通の學科●は倫理及社會學、心理と及教育、英語、手工、體操の五科にて外に

●隨意科目●として國文學、音樂の二科を設くその

●授業時間●は左の如し

倫理及社會學	二	心理及教育	四
數學物理化學（第一部）	一〇	博物（第二部）	一〇
英語	五	手工（園藝牧畜料理）	二
體操	二	國文學（隨意科）	二

外に音樂（隨意科）

●終業年限●は兩部共に三年

●入學資格●　無試驗にて入學し得べきものは身體健全品行方正年齡十七歲以上にして左の資格の一を有す

一　同校附屬高等女學校卒業生

一　修業年限五ヶ年の官公私立高等女學校の卒業生

一　師範學校卒業生

一　修業年限四ヶ年の高等女學校卒業後一年以上專攻科又は補習科を修めたるもの（但此項の者は學力を檢定する事あり）

一　專門學校入學者檢査規程により試驗に合格し尚一ヶ年以上の學歷を有する者（但此項の者は特別試驗を行ふ）

一　以上終りて二項に該當する者に課する特別試驗の科目は國語（講讀文典作文）算術物理化學の四科にして修業年限五ヶ年の高等女學校卒業程度

●學資●は左の如し

授業料	一學年二十七圓五十錢
校費	一學年五圓五十錢
受驗料	一圓五十錢
入學料	二圓

寄宿寮費　は食料毎月六圓外に寮費一圓

神田と私立女學校

神田區は都下學生の巣窟にして各種學校の五十三校の中に女子に關するもの丶みを記さば

島淵女學校(設立者島海瑩子)、神田共立女學校(同竹澤里子)、成美女塾(同家はな子)、國語傳習所(男女)(同杉浦鋼太郎)、東京產婆講習所(同濱田玄達)駿臺英和女學校(同早乙女キサ)、神田女子裁縫學校(同山下フク子)、東洋女醫學校(同高橋菊太郎)、高女佛英和學校(同オクスチヌザヨセプ)、女子高等豫備校(同杉浦鋼太郎)、東亞女學校(同田中弘之)、女子神學校(同佐藤秀六)、興風女學校(同山田倉太郎)、幼稚園褓姆傳習所(同岡部長職)、補習女學校(同小山環)、女子商業學校(同小田鋼太郎)、共立女子職業學校(同手島精一)

以上十七校は、兎に角其筋の認可の下に設立し居る各種女學校にて、此外尙ほ高橋五郎氏の模範英語學校は、男女とも收容して、教授しつ丶あり、猶此外に女學生を收容したるは、

私立日本音樂學校(設立者山田源一郎)、日本美術女學校(同山田興松)、女子計算員養成所(同黑岩某)、秋穗割烹教授所(同秋穗益實)、女子音樂傳習所(同多田彥之助)、高折音樂講習所(同高折某)、東京女子教育會(同近藤茂)、高等家政科研究所(同塚本濱子)、割烹教場(同龜井まき子)楓蔭女塾(同中井しう子)

以上は、最も能く女學生界に知られたる者なり、而も某校受驗科何々教授何々女塾など數へ來らば、之れ日も足らざるなり、これらの中、或は怪しきもの少からざるべし

◎**女子音樂學校開設**　過般市内二三の女學校が、文部省より閉鎖の命令を受けたる際神田錦町の日本音樂學校も亦同樣の命に接したる如く、取沙汰ありしが、右は事實なき事にて、同校は現に授業を繼續しつ丶あるのみならず、尙進んで今後の發展を期し居れり、唯音樂教授に於て、男女兩性の結合するは、教育家の一般に其必要を認むる所たるに拘はらず、輿論は今尙兩性共學の弊を唱へて休まざるより、同校にても世間の誤解を避くると共に、將來の發展を期する覺悟にて、今回其學則を變更し、男女兩生徒を分離し、各別個の學校を設立することゝなし、先づ女子音樂學校を開設したりと、



文學士 男爵 千秋季隆君選

夜梅

天

さきぬやとこゝろにかゝるさよ中に
梅のかをりそ夢さましける

本郷湯島天神町二丁目五番地 山口琴子

地

ふく笛のひゝきにゝほふ心ちして
梅か香ふかきはるの夜半かな

肥後國球磨郡多良木村 友永常子

人

小川そひ梅さく村のおほろ夜や
今宵誰が家に詩人生るる

能登輪島町勝田方 池野いさみ子

秀逸

うくひすの夢はいづこにゝほふらん
梅か香高しおぼろづきよに

大阪 木村春江子

いつかたのさかりなるらむうちかすむ
月にかをれるうめの追風

東京 松本まつ子

いとおらきうき世の風もしらぬげに
つきをむかへて梅は笑ひぬ

栃木 福田志計子

うぐひすのねくらときゝし梅か枝に
月も今宵のやとをしめたる

東京 岩谷淺子

さよふけてねさめうれしく我が宿の
隣の梅のはなのかそする

岐阜 山田ふさ子

なつかしく梅が香にほふ春の夜は
ねくらの鳥そうらやまれぬる

三河 永井さい子

うはたまの闇にそれとはみえれともに匂ひに梅の花そしらるゝ　秋田　細矢はる子

さくやいつこ賤か垣れをよろゆけは梅のにほひのなつかしき哉　對馬　青木まさを子

行きくれしところもよしやしら梅のにほふもゆかし月か瀬の里　伊賀　佐々木まさ子

うぐひすの聲するかたはくれはてゝ香のみのこれる梅林かな　大和　栗山たか子

弓はりの月もよひ〳〵やとるらん盃ひらの梅の盛りなりけり　大和　栗山俊子

あまりにも月はかすみて梅はやし花のしたふしせまほしきかな　埼玉　横田政子

咲そめし梅のにほひは見えれとも夜こそゆかめ月のせのやま　埼玉　横田秋子

さきにほふうめの花笠月さしてふしみのさとをゆくひとやたれ　埼玉　横田やな子

うち見れどいつれなるらん朧夜の月にゆかしく梅か香そする　岡山　小山松枝子

春の夜のかすめる月のかけさしてすみ盃の梅もかに匂ひけり　東京　青木ため子

うめが香にまよふは人と鳥のみか月もおもはゆくおぼろ勝なる　相撲　笹子茂子

十重廿重夜半のかすみの隔つれと梅かかもるゝひまはありけり　東京　大木忠子

香のみと人もおもひて訪ひぬらんおほろつき夜の山かけの梅　東京　敷島うた子

梅のはなさきそめぬれは今宵よりまきの板戸もさゝすれなまし　但馬　田尻保代子

　神戸　足立淺子

軍からでおのづからなる家土產のたもとににほふよるの梅が香　秋田　古瀬惟子

かくれなきかをさくりきてぬは玉のやみにもたをる梅のひと枝　東京　瀬藤ちよ子

ひとむらは雲かあらぬかしろたへのおほろ月夜に梅が香そする　薩摩　松原みれ子

よをこめて里のなかみち春ゆけばやみにもしろく梅のかそする　陸奥　相馬冬子

うぐひすの宿はといひし言のはのそゞろしのはるよるの梅かな　東京　林　豔子

薫られはゆきとや見まし月ヶ瀬のおほろつき夜の梅のさかりは　東京　林　環子

闇なからかほりゆかしき梅そのゝかたへ我やいまたとるらむ　津　神田みよし子

つもりたるゆきかとみれはやみの夜に庭に匂へる梅のしろたへ　東京　小林芳子

月おほろおもひふけゆく文机にうたよめとてやにほふうめか香　岩代　菅野和子

この夕べ折柄きますともがきに手燭して見するのきのはつうめ　大阪　田中靜子

あやなしとかこちたまひしちゝ上に見せばや夜のみ園生の梅　肥後　友永章子

まとにうつす月はなけれと春の夜の暗もさやかにかをる梅かな　三重　奥瀨かすみ子

逢ふと見し夢路はかなくさめ果てゝまくらに殘るれやの梅が香　東京　牛山粟子

闇の夜もむめの盛りとみるまてににほはぬ枝はなかりけるかな　京都　下川登美子

おほろ夜のかすみの奥に香をとめてしはし立よる梅の木のもと

ぬはたまのやみの夜風に嬉しくもいつこの梅そかをり来にける　岐阜　豊田ふゆ子

なか／＼にわが家なれともうめの花よるはゆかしき窓のうち哉　岐阜　中島梅子

あつま家の軒端の梅のさきしより香をよな／＼の友にれなまし　岐阜　中島葉子

よるも猶まなひの窓にかをりくる梅やいつこのさかりなるらむ　東京　大澤小松子

おはしまにおほろ月よのさし入て軒はのうめのかぜかをるなり　東京　大澤鶴子

梅の花それともみえぬやみのよもしろき薫りはまがはざりけり　東京　日暮郁子

暗の夜のそれとも見えれ梅の花きよき香にてぞしられけるかな　神奈川　中山菊子

おほろよの月さしいりし高殿にかをりをおくるうめやいづかた　東京　伊藤たけ子

夜は更てふみよむ窓に薫りくる梅のはやしやいつれなるらむ　東京　佐野ふき子

笛たけのよるのしらべにたぐへきてたもとにかをるうめの追風　東京　伊藤ふく子

さかりなるま垣の梅のかをるよはまなひの窓もさゝれざりけり　東京　佐野とみ子

花かめにさしたる梅の咲みちてよすがられやにかをりぬるかな　東京　伊藤とし子

今もなほかこそ高けれぬばたまのやみよの梅の色はみえれど　越後　松永繁子

朧月夜かけほのくらきそてかきのあたりましろに梅さかりなり　石狩　加藤壽嘉子

奈良　天野照子

袖にちる花のふゞきのみにしみて梅が香さむき夜のあらしかな　松山　田村多豆子

かけふみてゆきかへりしつ梅の花夜風ははるもさむけかれとも　山口　村上操子

てる月もおぼろに匂ふ梅か枝にきかまほしきはうくひすのこゑ　松山　上原のふ子

とも し火にやみもなき世は梅の花あやなきよるの物としもなし　福井　岩橋花子

かをる香にあやなき暗も思ほへす梅かこつゑをたつれてそ行く　京都　坪田りき子

月影はおほろにかすむ宵なからこゝろふけても見るむめのはな　東京　中島茂子

笛のれをたつれてくれはゆふつきのかけもわつかに匂ふ梅か香　愛媛　高橋茂子

梅の花さけるやいづこやみの夜のおのがゆくての風かをるなり　三河　柳原喜久子

春風に軒のうめの香かよふ夜はれやのくり月もさゝれさりけり　三河　柳原しづ子

おほろ夜にそれとも知らてさまよへは白梅かほる里にでにけり　千葉　鎌田清子

なぼろ夜をそゞろ心地にたゞずめばほのかににほふ軒の梅が枝　茨城　田山すゑ子

今宵こそめしひになりし心地すれ花はいつこと香にひかれつゝ　茨城　田山ふみ子

月させる軒端の梅はかをれともやとかるぬしのなきそうたてき　陸前　前田河みさを子

友かきと梅の木かけにかたらへは月も匂へるこゝちこそすれ　陸前　前田河千早子

まつきこし夜ごと／＼にふきおくるかをりゆかしき梅の初花

軒のはにかたわれ月のかげおちて紅梅にほふはるの夜半かな　東京　横野愛子

月かげにまがふものから春のよもにほひにしるき庭のうめがえ　三重　茨木みす子

寒行のかれの音こほる夜半の月につきかげかなる梅のひとえだ　大阪　山本伊勢子

香をしたひ花のありかをたつぬれば月や知らするしら梅のもと　茨木　綿引きし子

月落ちて花のありかはしられどもかをりそたかし梅のはつ花　茨城　赤塚しん子

ぬばたまのやみはおやなし窓の月に星かげならでかをる梅が香　肥後　佐々有隣子

暗のよはたれも雪とやながむらんのきはの梅のかをらさりせは　長野　岡田千穗子

くらくとも梅や嬉しとおもふらん月のかつらもうゑるよなれは　秋田　古瀬とよ子

わが宿のうめさきてつきいてしより板戸ひく手の重かゝりける　栃木　福田さと子

しら梅の香りしさとはおぼろよも月のてらせる心地こそすれ　東京　田中千代子

花の色はやみにそれとは分かれどもまくらににほふ宵の梅が香　茨城　佐藤八重子

いにしへの文のはやしをたどる夜に庭のうめがかことに床しい　東京　爾津梅子

春のよに庭のうめこそさきにけれ風のまに〳〵に匂ひおくれは　東京　爾津みち子

うたげをへて月のみすめるたかどのゝ軒端をめぐる庭の梅が香　埼玉　長島よし子

伊賀　釋[illegible]子

おぼろよに友かり訪へば友は居ず月にいろそふうめのみぞみむ　大阪　井上靜子

ふりつもるゆきかと見しはきさらきの月よりしろき梅のはつ花　東京　爾津櫻子

たか殿の琴のしらべもうちたえてうめがえ白うつきにほへり　大阪　池田英子

こよひはと窓の月おせばうめの花夜風にたかく香をそはなてり　越中　横谷八重子

ともしびをけしてふしどに入りてなほゆかしくかをる文机の梅　武蔵　青柳彌生子

さよ更てふみよむ窓の月をおせば思ひもかけずうめが香ぞする　東京　田中千賀子

花やてる月やにほふとしかすがにこゝろにかゝるよるの梅かな　丹波　大槻とく枝子

ちら〳〵と降りくるゆきに月影もおぼろにゝほふ梅の花かな　安藝　堂面千里子

小夜ふけてとふ人もなきやまさとにかをりゆかしく梅の花さく　伊豫　樋口寧子

ゆき暮れて立よる賤がひとつ家の軒端にゝほふしらうめのはな　下野　井上尚子

ふたとせのいくさかたりにふくるよのつきに香高き庭の梅かな　愛媛　樋口たか子

手折にし梅のひとえだ友としてひとりふみよむともし火のもと　愛媛　高橋もり子

月ふみて梅のはやしに思ふどちゆきつもとりつ歌かたりせん　大阪　黒田代音子

あかつきをまち渡るらんうぐひすのこよひは梅の花さかりなり　愛媛　小澤マス子

わがつまのかたみとなりし梅の花匂ふよ半こそうれしかりけれ

秋田 古瀬りく子

うくひすの聲はなやみぬいさよりて袖につゝまんよはの梅ヶ枝

繪葉書

天

岐阜縣稻葉郡北長森村 中島素子

故さとのけしきもそひて言の葉の
まことうれしも友のゑはがき

地

岩代國伊達郡小島村 菅野和子

弟かかきおこしたるはつたより
ふておもしろきこまのゑはかき

人

對馬國嚴原今屋敷町字山下廿八番戸 青木まさを子

さらてたにゝほふすみゑの梅か香に
風の便りをきくかうれしき

秀逸

三河 永井さい子

おこせつる人のこゝろの色さへも
見えてうれしき花の繪はかき

秋田 古瀬惟子

としたちしわした婚しと窓のとを
あくれはとゝく梅のゑはかき

肥後 友永常子

山水のけしきをさへもうつしけり
かりのはかきのせまき上にも

山口 村上操子

ゆきかひの鴫のゑはかきもゝはかき
かす多き世となりにける哉

陸前 前田河千年子

つくゞゝと繪はかきみれはふるさとの
老木の梅の花の香そする

越路 松永繁子

ゆかしさを言の葉草にほのみせて
色かてめたるとものゑはかき

大和 栗山たか子

ひとひらの便にそへてはなも香もうれしくみするけふの繪葉書

岡山 小山松枝子

なつかしくみやひの友のすさびかもこのゑはがきに心うつして

埼玉 横田やな子

あらし山花のさかりのさまみせて繪はかき便りけふも來にけり

埼玉 横田秋子

ゐなからにからの都もみつる哉思ひかけなき繪はかきだより

埼玉 横田政子

繪葉書の遠きたよりも其まゝに文字すくなにてことたりにけり
相州　鈕子茂子
たよりさへ趣味ふかき世や繪端書の繪に言足らぬ言をいはせて
津市　神田みよし子
花鳥のいろ音もこもるこゝちしていとゝゆかしきうつしゑの文
東京　林　艶子
摘みつるその繪葉書に知られける送りしとものこゝろいかにと
東京　林　環子
むらきものこゝろのみかは己か身のすかたも人に見する繪葉書
陸奥　相馬冬子
ゑはかきに思ふことをはなてつけて送るや遠きしへりやの野に
薩摩　松原みれ子
この里のこのやかたにそ宿りすとせこのは書のなつかしきかな
東京　瀬藤ちよ子
かんはしき其名のみかは繪すかたの外國までもとゝくうれしさ
秋田　古瀬とよ子
山さともみやこの花のたよりさへこのゑはかきにみるそ嬉しき
神戸　足立淺子
つきはなや人のこゝろをうつし繪のことの葉書のかをる世の中
東京　大木光子
とりかはすはかきの繪にもひな都かはれるさまの偲はるゝかな
津　神田政子
嬉しけにまたとりいてゝ少女子かくりかへしみる文のうつしゑ
神奈川　内野その子
我夫の無事のたよりに書そふる繪もなつかしく見いりつるかな
大阪　田中靜子
かきませし筆さへ淸き繪はかきに友のこゝろのいとゝうれしき
肥後　友永章子
かきしるす事はなけれと繪は書に友のおとつれうとからすせむ

三重　奥瀬かすみ子
繪に似たる戀もするかな繪はかきの文字美くしきぬし忍はるゝ
岐阜　中島梅子
手にとりて先うれしきはゑはかきのかはらぬ親のかけそ懐かし
東京　松本まつ子
言とへはいらへんはかり緑り子の笑ふゑはかき離かたくみそも
京都　下川登美子
旅にいます背子慰めんたよりにと葉書に繪さへ書きて送りき
東京　牛山素子
ゑはかきを送りおくられ友垣とたのしみあへる御代のうれしさ
東京　大澤小松子
とつ國の海山かける繪はかきをたえす手にして見ぬよなりけり
栃木　福田志計子
うつしゑに言の葉添へて送りこす便り嬉しき御代にそありける
東京　日暮郁子
とり〳〵に打捨かたくみゆるかなたよりうれしき春のゑはかき
東京　伊藤とし子
かゝみにて寫せしよりも嬉しきは我はらからににたるゑはかき
東京　佐野とみ子
またしらぬロシヤアメリカの海山を親しくも見る友のゑはかき
東京　伊藤ふく子
忘られぬまなひの友によくにたる此ゑはかきを見つゝ暮さむ
石狩　加藤齋惠子
交りの道もひらけて見も知らぬひとゝ繪はかきとりかはしけり
松山　田村多豆子
ことのはもそへすて贈る繪葉書に友のありかもしる世なりけり
松山　上原のぶ子
こゝの花かしこの月もゑはかきに寫して見する世となりにけり
東京　岩谷淺子

海にくがにたてし功を繪は書にみするも御代のひかりなりけり
千葉　鎌田淸子

亡き背子のゑがきし葉書取り出てゝ又も泣き入るあはれ毋刀自
茨城　田山すゑ子

水茎のあとも物いふこゝちして見るもうれしき友の繪はがき
大阪　木村春江子

何ごとも書かで贈らむ繪はがきにつたなき筆のくちをしきかな
三重　茨木みす子

めづらしき千里のみちもうつしゑの文の便りに見るぞたのしき
能登　高森いち子

すゝみゆくしるしも見えてめでたしや友のおこせし繪入葉書に
秋田　細矢はる子

かりがねの歸るすがたのゑは書のせこを待つみはことに嬉しき
伊賀　佐々木まさ子

日々にいて日々にめづらし繪端書のゑがける姿さまぐ\にして
長野　岡田千穗子

繪たくみのこゝろをこめしはがきにはそゆる言葉の花もなき哉
安藝　堂面千里子

うつしゑに文かく世とぞなりにけりなほゆく末ぞ思ひ知らるゝ
愛媛　高橋もり子

新玉のとしにちなめる繪葉書にけさのほきことうれしかりけり
東京　禰津梅子

まのあたりはりすのみやこみつる哉征にし兄のはがきたよりに
東京　田中千賀子

福壽草梅やさくらどしきのはなさきそろひたるアルバムのうち
丹波　大槻とく枝子

とりぐ\にこゝろこめたる繪葉書に水くきのあとうるはしき哉
岐阜　豐田ふゆ子

ふかみとりまつのゑがきてことたまの幸のひかりもみゆる玉章
大和　栗山俊子

鶯のこゑもそえたるこゝちしてめうのゑはがきまづ見つるかな
秋田　古瀬りく子

年のあさ松のいほりにおとづれてつるのはがきをみるぞ嬉しき
東京　大澤鶴子

とつ國のいろせの君におくるへくよきゑは書をもとめてしかな
東京　山口琴子

わすられぬ我父毋によくにたるゑはがきみるぞうれしかりける
東京　伊藤竹子

手に取りていつれはあれと心ゆくゑはがきはかり嬉しきはなし
東京　佐野ふき子

いそき行道もわすれてゑはがきをひさくみせにてひを暮しけり
奈良　天野照子

ひとひらのかみにものして玉章のあやをそふへく寫しゑはがき
福井　岩橋花子

花と散り蝶とゝひ來てにしひがし春のたよりとしらる繪葉がき
東京　中島茂子

敷しまのやまとこゝろの色こそも寫してみせむゑはがきの繪に
茨城　田山ふみ子

水茎のあとうるはしきはなれ馬のあらたま賀せる友の繪はがき
茨城　赤塚しん子

あら玉の年をいはふかはなれ駒の繪かける葉書うけしうれしさ
大阪　山本伊勢子

日のもとのひかりと見ゆる戰かんにわれ健在と背子はがきそふ
陸前　栁田河みさを子

繪はがきの繪をみることにおもふ哉こゝろの色の淺き深きをも
岐阜　山田ふさ子

つたなくもわが物したる繪葉書をしたしき友におくるたのしさ
大阪　池田英子

繪葉書をかはさんものとちかひてし友こそいとゝなつかしき哉
愛媛　小澤ます子

はやりもの多かる中に繪葉書は花もみもあるものにぞありける
奈良　山澤さよ子

うれしやと友のたよりを手に取れば日ころあそびし國の繪葉書

新體詩

入賞

快樂はつきず

越後西蒲原郡巻校　松永繁子

虎子が織つた藁蓆
十と七枚敷きつめて
　昨日煤はき今日晦日
　頬の鍋墨さと落し
のりつけ著物打ち著たる
　後姿の若い哉
湯豆腐一丁肴にて
德利の二合傾けて
　暮れ行く歳を送りつゝ
　お虎のとーさん上きげん
　富者きけよといひけらく
榮華は何ぞ金何ぞ
眠るに肱の枕あり
　老の此の身も一八子と
　かくてぞ永く世をすぎむ
快樂は盡きずあゝ此世

調のおもしろきを採る（愛水）

雪の朝

岡山　小山松枝子

國のとさむき朝どこに
一夜のほとに野も山も
昨日かもわが折かれし
木ごとに花の咲きにほひ
旭のかげのきらめきつ
よろこび走る犬の子の
四方の景色のめづらしく
お前の御簾をかゝげゝん
さてもうれしや銀世界
清きこころもに包まれて
梅の梢もわかぬまで
つくらぬ庭もをかしきや
子らがつくりし雪だるま
足あとごとに愛らしき
おばしま近くながむれば
昔の君のしのばれて

友を憶ふ

福井　岩橋花子

螢をあつめ雪をつむ
袖ふりはへていそしみし
果敢なき風に散りし花
思ひあかして幾年か
朝夕べの學びやに
まことの友や今いづこ
ふたゝび香ふ春やある
過ぎ來つれども中々に

忘られがたき情趣

月前の音樂

東京　槇野愛子

み空に高く月冴えて　匂ひけ高き白薔薇の
咲きみだれたるみ園生に　あゝなつかしき彼の君が
奏で給へるヴァイオリンの　音ぞかすかにきこゆなる

梅咲き宿

大坂　木村春江子

片山里の春の夜の　朧の月にさそはれつ
吹きくる風をしるべにて　梅咲く宿につきにけり

武運を祝して

伊豫　廣田政美子

君征きまして二とせの　長き月日も忠と義に
かためてかたき鐵身は　大砲小づゝの彈丸のみか
病魔の敵もあたりえず　けふ凱旋の勇ましき
武運のほどぞ芽出度けれ

流るゝ水を見て

播磨　横田春枝子

深山の奥の苔の下　くゞりて流るゝ谷水の
流れ〳〵て川となり　千ひろの海とかはる迄
いかなる辛苦をつくしけん　岩にくだけて身をとばし
人里近き小川では　水車のめぐりに身を切られ
よる晝絶えずよどみなく　にごりつすみつさま〴〵に
流れて末は海原の　浪に姿をかふるなり
業ひ多き世の人も　流るゝ水のそれのごと
たゆまずうまず勉めなば　いかに憂世はからくとも
今日のかなしみあすの幸　事なくとぐるもやすからん

小蝶

三河　柳原しづ子

そよ〳〵吹ける春風に　ねむれる蝶も浮かされて
雲井の空や野や原に　花をたつれて舞ひ狂ふ
ゆかしき羽衣ひらひらと　かさしてまへるその姿
病になやむもゝ人も　なれの舞にはほゝ笑まん
樂しくまへや永久に　静の使となりてこそ

曉

大坂　田中靜子

曉告ぐる鐘の音に　窓押しあけて眺むれば
銀河寒けき大空に　殘んの月のうすれつゝ
露を含める青柳の　葉かげに夜ぞ殘りける

わかつき

大和　栗山さつき子

けふを盛の白梅の　はなを惜みてよもすがら
影殘りたる有明の　月はゝかなく移り行
鐘より落るかれの音に　さめたる夢ぞうらみなれ

歡迎馬

東京　敷島うた子

よしや功はたてずとも　よしや譽れはあけずとも
遠き征途の二とせを　かちとき揚げて歸へる日は
なとてか人に劣るべき　あはれ黒駒いさめ駒
汝が古郷は忘れずて　まちつゝあらん野も山も
汝が厩にかれてより　清めておちんおそしとや
早くかへりてよき年を　なれも迎へよ厩にて

春の海

能登　池野いさみ子

潮路はるかに霞して　春はめぐりぬ海原は
南遠き若人の　優しき想こもらせて
漫々たりな浪紫　ねむれる母の懷に
めぐるなさけとこまやかに　夕あやぐも棚びけば
若き少女が柔胸に　きざす思の其れに似て
天降り給ひし姫神の　くしき化粧もあるらめと
そゞろ戀しうなつかしう　色紙にかきて一連の

低きしらべをよせにしが　その夜の夢は龍宮の
女王の胸にかよひけん　一日いそべのさまよひに
暖き空の胸にしみ　のぞみのかげを見てしより
水穴遠く潮路に　若やぎの香をたゞよはせ
幸なほこもる時の領と　海なづかしくなりにけり

短文

編輯局同人選

地賞

雨

大坂市北區中之島二丁目　田中靜子

雨は造化の衣服なり、天地これによりて美裝す、雨は宇宙の血液なり、萬物これによりて活く、たゞに造化の寶のみならず、倦怠せし人心は、直ちに勤勞なる精神となる、あゝ愛すべき雨なる哉、

人賞

埋火

岡山縣御津郡一宮村　小山松枝子

雪ふる朝も、月影凍る夜も、のとかに親まるゝは、この埋火の友よ、さるは、昔語りをあたゝめ、さしそふる櫻炭の名において、言葉の花も咲いて、丁度春の日の光にあたる心地がして、ふけゆく夜の寒さも覺えぬはこの友のまたものである。

梅咲ける朝

福井　岩橋花子

春としいへど冴えかへる、雪げの空の冷たさに、ふしど離るゝも懶くて、昨夜の夢くりかへし、越方そゞろ思ひ出る折柄、隙洩る風につれてえならぬ香の、枕に通ひぬ、あなやとて窓押開けは、こはいかに梅が梢の花咲けりとは。

今年の春

大坂　木村春江子

梅の花はや笑み初めて、匂ひゆかしき茶室に、打向ふ三人の姉妹鶯の初音にもたくへつべき優しき聲は、年下なる色白く愛らしき乙女の紅き唇よりもれ出でぬ、

「今年の春はうれしくつてよ兄さんはあすお歸り遊ばすのね」姉なる二人等しく打笑みてうなづきつゝ、そとまぶたを拭へり

雪の日

播摩　横田春枝子

雪の女神の白妙の、み袖ひろ返し給へばさながらに畫のうてなと化するに廣き世を見ませな、香爐峰の風流をくり返し給ふ奥方、羽衣ショールに埋れて、馬車で華族女學校に行ます姫君もあれば、眞柴背負ひて雪に足跡殘す乙女もあるを、

暖き團居

越後　松永繁子

名譽の戰死だと勇んで戰場へ御出なすつた兄様、神の守護かしれん、負傷もせられず凱旋なすつた、嬉しくて夢ではないかと思つたが、矢張夢ではない、柴折りたく爐邊に戰さ話をきくその樂し

い事つたら、父上も御笑なすつて、今日は一入嬉い、

ある日　　能登　高森いち子

窓下の文机に凭れつ、己が詩想の乏しきを喞ち居れば、春風訊れ來りて梅の香を室内に送りぬ、そゞろうき立ちて庭もに下りなんとせし時しもあれ、玉をころばすが如き鶯の一聲ホーホケキョー

床ばなれ　　岩代　菅野和子

年越ゆれと持ちし病の快癒捗々しからず、床に臥してのみ物想ひに心細うなりぬる頃日、不思議や今朝は頭輕く、心すが〳〵しければ、起き出て門川を久し振にて遡れば、若草萌ゆる野末は靉靆曳、亂鬢を飜る歟風暖う、鶯の聲さへ送りて、穗甦りぬ。

折にふれて　　愛媛　高橋茂子

文にまれ、歌にまれ、我愛する誌上に、只伊豫とのしるしさへ、こよなく嬉しき物を、まして同郡同村にて、日頃相親したしむ友のみ名を、天地人に見出しゝ折の喜ひ、はた何にかたとへんさなから我身のそれのごと、

白梅　　千葉　鎌田清子

あゝ清き名よ、あゝ氣高き名よ、白梅よ、汝れが清き愛らしき姿をもて、世に咲き出づるは、人に姿を、誇らん爲にはあらで、世の幾多の婦女子を、清き心に、導かんとてなるべし、あゝ白梅我も亦、汝が高き操、潔き心を師と仰がなん、

今宵の月影　　東京　槇野愛子

哀れ麗はしき理想の花や、今何處、無情の風に散らされて、はかなくも波風すごき荒磯に迷ふ捨小舟とはなりぬ、あゝされどいつか平和の岸に進みて、再び清き希望の花を咲かせて、亡き父母君の墓前に手向けまつらんとぞ、曇りなき今宵の月にちかひける

戰遊　　神奈川　中山菊子

いましも、程近き小山にのぼり、ブリキ喇叭をふきつゝ、紙旗押したて、よろこび滿面に、相たづさへて戰ごととして遊べる、小さき小供等の、いさましさよ、愉快さよ、願はくば男の子等、成長して幸あれ、猛き武夫となりて國の爲につくせ、

哀れ武ちやん　　東京　岩垣貞子

お母ちやん、私とところばかり、なぜ松たてないの、光ちやんのお家はもー松たてゝよ、おぞうにもたべてよ、ねーお母ちやん、どうしてなの？母は無言の儘、涙數行、無邪氣に指を折敷へてお正月を待つた武夫ちやんの心は、お父ちやんのかへらぬ旅に行かれたことも、お母ちやん憂ひに沈めるのも知らず、あゝ哀れ、

落花　　三河　柳原きく子

つれ〴〵なるまゝにそと小窓を開けば、軒の櫻は、折から吹きくる一陣の風に、ヒラリ〳〵と雪の如く散れる、枝に心のゝこらぬさま、時にのぞみて命をも惜まぬ我武夫のごとくいといさぎよし、

巖頭の夕　　大坂　橘かをる子

寛やひそむとばかり、音もなく沈める此處曲が淵、明日は誰が里に嵐の雨と降りゆくや、定まらぬ夕の雲のみだれみだるゝ彩鮮やかに、落葉うづたかき岩角にふせば、恐ろしき渦の我が影をまきて謂ひ知れぬ悲愁の胸に沸くめり、

短歌

入賞

春望　東京淺草區黒舩町　照内清子

見渡せば汐路はるかに打かすみ
鳥かしら帆の影ものどけき

初日　神戸　足立淺子
注連はへて清めし庭の若井つゝ汲みつゝあふくはつ日かけかな

新年河　但馬　田尻保代子
ものゝふの八十宇治河の濟き世にいかにのとけき年やたつらむ

同　陸前　前田河千年子
五十鈴河つきぬなかれの若水をくみてさゝけむとしのはしめに

同　陸前　前田河みさを子
末ひろく廣瀬の河のわかみつをおきなにくませきみにさゝけむ

同　長野　岡田千穂子
あら玉のとしたちしより山川のきよきをおのかこゝろともかな

同　東京　瀬藤ちよ子
去歳よりもひとしほまして聞ゆなり五十鈴の川の音のさやけさ

社頭新年　岐阜　中島榮子
神馬のいなゝく見れは星あかりたかはつとしをつけに來にけむ

山家迎年　岐阜　中島榮子
あら玉のとしをむかへて足引のかたやまさともみはたなびけり

同　埼玉　横田秋子
ひいらぎの垣ねに雪のかけみえてわか山さとにとしはきにけり

田家新年　埼玉　横田秋子
年たてはおとあらためてきこゆなりかと田のなかれ背戸の水口

新年風　東京　瀬藤ちよ子
門ことにたてしあさひの旗のへにふきかよひたる年のはつかせ

早梅　奈良　山澤さよ子
雪の日にふみよむ窓をうかゝひて咲けるに似たりうめのはつ花

梅　越路　松永繁子
咲きにけり雪のかきねにうめのはな三つ四つ二つ春をむかへて

山家春來　陸奥　相馬冬子
むら消の雪またらなるやま里もうめのにほひに春めきにけり

早春月　播磨　横田春枝子
なか〳〵に鴛鴦のふすまは寒くとも春とはかりに月はかすみぬ

春雨　能登　高森いち子
ふるさとにおくる文をはかきをれは小窓にちかく春のあめふる

春山　東京　禰津梅子
遠山のみれもふもともうすあゐのかすみの袖におほひぬるかな

春曙　東京　禰津みち子
見わたせはよもの山へかすみもきえて霞たなひく春のあけほの

春衣　東京　日暮郁子
さま〳〵に身にまとへとも春山のかすみころもにしく物そなき

春のうた　能登　池野いさみ子
桑のはたやはなさくうへにかすみたり十戸の村のありあけの月

山霞　神戸　足立淺子
霞たつなみ路にうつるかゝみ山またうらわかきはるのおもかげ

庭梅　東京　禰津梅子
我庭の梅さきそめしあしたよりうくひす鳴かぬひはなかりけり

立春　東京　禰津たみ子
春たてはよもの山のは雪なからはやも棚ひくはつかすみかな

待花　東京　禰津梅子
咲ぬまのはなをまつちの山ごえにいくたひみやる隅田つゝみを

泉　大坂　田中靜子
やま水のつきぬながれをくみ見ればむかしゝのふの泉なりけり

海　神奈川　中山菊子
音つるゝ千鳥のこゑにながむれど霧にかけなきをちのうなはら

霜　澁谷　林田糸子
散りしける木の葉に霜の置きはへてほの〳〵しろき朝月夜かな

古郷雪　大和　栗田たか子
はらふへき人もなければあさちふのにはに殘れるふるさとの雪

峰初雪　肥後　友永常子
おのか色を空にゆつりてはれにけりはつ雪しろきみねの松はら

衾　肥後　友永章子
雪にゝたる綿のいりしとおもほえす夢あたゝけきあつふすま哉

鞠　千葉　鎌田清子
まり歌に倦みていねたるをさな子の置きし手鞠に日は長閑なり

盆栽　京都　下川登美子
なきちゝの手うゑたまひしひら鉢にしのふ小草の露そこほるゝ

勸學　奈良　大野照子
たゆみなくゆきと螢のいそしみをつみてこゝろの玉みかけかし

赤十字看護婦　陸奥　相馬冬子
くにのためつくすまことのひとすらにしめせ女の赤きこゝろを

凱旋　伊豫　岡田政美子
かち閧をあけてかへらむ君のみかむかふみ親のいさましきかな

手を失へる軍人によする　澁谷　林田糸子
失ひしみてには神のましまさむこゝろ安かれますら夫の友

社頭杉　奈良　山澤さと子
年を經し杉の並木の間よりかすかに見ゆるあけのたまがき

竹不改色　肥後　友永章子
雪霜にみとりをかへぬひとふしは千代ふる竹のこゝろにはして

六十賀　陸前　前田河千年子
かへりさきまたかへりさく梅か枝の齢やきみとゝもにかならん

六十賀　陸前　前田河みさを子
松か枝にすこもる田鶴の雛みれは六十路よりこそ數へ初めけめ

亡き友　東京　槇野愛子
東風ふかはともに咲かんと契りてしつほみはあはれ秋を名殘に

折にふれて　丹波　大槻とく枝子
いかにせん心はかりはゝやれともさはり多かる我身かなしも

折にふれて　能登　高森一子
郵便とこゑすることにおもふかないとなつかしき君のたよりと

折にふれて　三河　桝原きく子
くれなゐの雲美くしくぜにうけて少女やさしきゆふくれのうた

折にふれて　東京　林田糸子
うなゐ子の軍歌のこゑも遠くなりていり日さひしき並木松はら

戰死者に代りて　大坂　黑田代音子
いさぎよくちるこそ花のこゝろなり南の山にかほりとゝめて

題しらず　東京　山口琴子
かしこしな松と竹とにしめかけてみよをてらせる朝ひ子のかけ

俳句

入賞

春月　大阪曾根崎　井上繁子
海原や浪より外は春の月

初日影障子にうつる梅かほる　下野　井上倫子
ぬく被布の袖に花ある梅見哉
水涸れていつこ河童の住み所　大阪　柳政子

凩や苗木畑を吹き荒らす
掃煤や手傳人の盜喰
拂煤や疊をあけて叩うつ
かたけきて布團つかゆる戸口哉
浮寐する鳥の上にも花の春
たゝかれて春のかをりや芹薺
故らに掛けぬ手ふりや水祝
苦さひて昔ながらのすしや哉
目出度しやさて目出度しや松の内
又一つ歳を加へてまつのうち
納豆屋聲かんはしろ雪の朝
いさゝかのとそに醉ひけり春の朝
白雲はおのか心をしめしけり

神戸 足立淺子
大阪 田中靜子
越路 松永繁子
東京 岩垣貞子

和歌兼題

三月{春の野 夢　四月{名所花 寫眞　五月{卯花 渡し守

小説　五頁以内
短文　百字以内
和歌　兼題外にて、雜題及春季の歌
俳句　春の句何にても
新體詩　これも春の題及詠史、雜事、雜感

右懸賞募集す（第七十五頁參着、なほ別項投書規則に背くものは沒書）

投書規則

▽一　投書者は歌文の側に、一々宿所姓名を明記せられたし、單に名、又は號のみのものは採らず、

▽二　字體は楷書にして、おくり假名は平假名にせられたし、雜誌への原稿を手紙でも書かれるつもりにては困る、草書に變體いろはの多きものは採らず、

▽三　文も歌も、題の改まる毎に、用紙を改る事、此規則によれば葉書にても差支なし、相成るべくは半紙に認めて、開き封（第四種郵便物として）にておくられたし

兼題和歌は『はがき』にてもよけれど、一題つゞ別に認められたし、一枚に數人の作を記したる如きは採らず、

投書はすべて女子に限り、以上の規則も要するに女子らしき投書の仕方、所謂書生流にあらざるを、其人柄とゝもに採りたき也。

新刊紹介

▽家と女　巖谷小波山人著

流麗する山人獨特の筆にて、家庭に於ける婦人を東西南北、上中下、左右、縱横あらゆる方面より評述して、或は堅くなり、或は噴出させ、一度卷を開けば、讀了を辭するを得ぬ面白味を感じ、而も鹿爪らしき賢妻良母說を見るより、遙に功能ある庭訓と稱するを得べし、製本頗る美（定價金七十五錢、隆文館發行）

▽假名の手ぶり　多田令子女史著

多田親愛翁歿してより、假名文字に妙なる人、僅に大口鯛二氏あるのみ、斯界大に寂寞を感じたりしが、令子女史父翁の衣鉢を襲ぐに及んで、俄に冬天紅花の美を見る思ひあらしめたり、本誌の簽題に女史の手に成るものにして、讀者諸君は其筆蹟の雅麗を知り玉はん、本書は女史が特に意を用ひて揮毫したるものゝよしにて、他に比類なき好個の假名手本なり、製本も在來のと違ひて甚だ優美なり（定價金十八錢、大阪東區北久寶寺町明昇堂發行）

▽早稻田文學　一月の卷

本誌の再刊は、讀書界の相場を狂はせるものにして、之を手にすることを廣く長く樂まれたるなるべし、島村抱月氏の『囚はれたる文藝』、是非一讀せれば本誌讀者の資格なきものなるべく、田中博士の『劇樂の表情法』は眞に讀んで價あるものなるべく、岡田博士の『川柳史料』は博識を知るに足るものなるべく、幸堂得知、中村春雨、藤田泣菫、東儀鐵笛、水谷不倒、小川未明、繁野天來、饗庭篁邨、德富蘆花、綱島梁川、坪内逍遙諸氏の顏の揃ひたるは珍とすべきものなるべく、本欄と彙報欄と二つに分けて、本欄には作家の甲乙をつけず手當り次第に並べ、而も島村氏のを初めに載せたるなどは異彩なるべく、彙報欄の我田に近き方に水を引きたる消息、殊に音樂界に於て然るを見るを得べきは早稻田一流なるべく、兎に角結構なるべき雜誌也、（每月一回、定價廿錢、金尾文淵堂發行）

寄贈書目

女子文藝（第一卷第一號）	東京	大日本樂書會
成功（第八卷第二號）	同	成功雜誌社
女學世界（第六卷第一號）	同	博文館
新國民（第三卷第四號）	同	大日本國民中學會
なでしこ（第六卷第三號）	同	大日本女學會
中學講義錄（第二學期第六號）	同	大日本國民中學會
婦人と子供（第六卷第一號）	同	フレーベル會
慶應義塾學報（第九十九號）	同	慶應義塾
教育實驗界（第十七卷一號）	同	育成會
產科婦雜誌（第七十三號）	同	日本產科協會
日本の家庭（第二卷五號）	同	同文館
婦人世界（第一號）	同	實業之日本
六合雜誌（第三百一號）	同	日本ゆにてりあん弘道會
女重寶記（女學世界定期增刊）	同	博文館
國學院雜誌（第十二卷第一號）	同	國學院
流行（第三年第一號）	同	白木屋
成功城（成功臨時增刊）	同	成功雜誌社
婦女新聞	同	婦女新聞社
東京經濟雜誌社（每號）	同	同社
家庭週報（每號）	同	櫻楓會
愛國婦人（每號）	同	愛國婦人會
教育時事（每號）	同	教界時事社
婦人世界（第五十六號）	大阪	浜寧婦人會

讀落し玉ふ勿れ

次號より左の通り懸賞募集す

小說　甲賞　八圓　乙賞　五圓

和歌　天賞　五圓　地賞　三圓　人賞　一圓
　　　秀逸　廿錢（課題及課題外とも）

短文、新體詩、俳句、
　　　天賞　五圓　地賞　三圓　人賞　壹圓

本誌第百七十三頁參看、賞金には價格相當の書籍券を呈す、小說は此限にあらず

本年四月十五日發行を始めとし、時々本誌の臨時增刊をなすべし、

女鑑第十六年第五號（四月十五日發行）

臨時增刊　**家事節用**

定價一冊　金貳拾錢

其內容に至つては、大に實用に資し、家庭より、一刻も放すべからざる重寶記にして、他に比類なき好讀本たるべきことを豫約し置く也、

寄書に就て

本誌は廣く寄書を歡迎することは、別項懸賞募集にても知らるゝ事なるべきを、往々草稿を示さずして豫め斯る文を草するが、揭載するか否やなど問合さるゝ向あり、兎に角本誌の爲に金玉の文を投じて光彩を添へ玉はん厚意ある方は、まづ原稿を示されたきものなり、〆切期日は、懸賞募集せるものは揭載を望まるゝ雜誌發行の前月十日迄、其他は前々月末日迄の事

營業部の取次

◎雜誌前金　本誌は前金拂込の方には部數により相當の割引を付しあるに、往々後拂にもこの前金價格を利用せらるゝ向あり、以後は規定通り前金拂込の方に限り實行する事に定めたれば、是迄未拂の方は普通代價を以て送金せられたし、

◎臨時增刊　本誌の購讀者諸君は、來る四月中旬發行の增刊雜誌をも購讀せられたくもし、御不用の方は御手數ながら營業部宛四月中に御沙汰ありたし

口繪の解說

◎松島　芭蕉をしてアヽ松島や松島やの外、句も及ばずと筆を投げしめし天下の絶景、紙面に髣髴として浮び出でたるもの、

◎柳原伯爵の家庭　本誌の爲に高說を吝まれず、每號紙面に光彩を添えられたる、伯爵柳原義光君の家庭にして、右は令夫人花子、中は令孃にして、長は福子、次は德子、左は伯爵の君、

◎秋元子爵の家庭　本號卷頭に卓說を揭げたる子爵秋元興朝君の家庭にして、右は子爵、中央は令孃光子、左は令夫人宗子、抱かれたるは令孫順朝の君なり、

◎蕾の花　可憐の幼童、少女、この行末やいかに多望なるべき、

◎三輪田高等女學校　本誌に紹介したる同校の遊戯場なり

◎馬と舟　二圖ともに、男爵德川厚君の撮影にかゝり一は本年の干支に因みたるものにて、一は赤羽附近荒川出水を寫したるものなり、ともに好個の畫姿を得たるものならずや、

◎愛國婦人會　近時非常の盛況を呈せる同會の役員を撮影せしものにして、前より一列の右より數ふれば、一は岡部子爵夫人、四は鍋島侯爵夫人、五は岩倉會長、六は毛利公母堂、七は近衞公母堂、九は小笠原子爵夫人、二列の一は松平男爵夫人、五は千家男爵夫人六は松前子爵母堂、七は高木博士夫人、九は清浦男爵夫人、三列の一は濱尾總長夫人、五は奥村五百子、七は佐藤博士夫人、五列の三は鳩山春子、四は棚橋絢子、五は中山幸子の諸氏なり、

◎愛國婦人會京都支部の事業　前號に記載せる經木眞田講習の卒業式を撮影したるものなり、

定價

一冊	前金貳拾錢
三冊三ヶ月分	前金五拾七錢
六冊半分	前金壹圓拾錢
拾貳冊一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁　三十二行	金八圓
一頁　六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵劵代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十九年一月廿九日印刷

明治三十九年二月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社

右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　橋本忠次郎

印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十番地　河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　株式會社　國光社

（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

女學及家庭書類

島田佳矣 野口駿尾 共著 ◎ 女子技藝編物模様圖案 全五冊 定價 松ノ卷四十錢 櫻ノ卷五十錢 藤ノ卷五十錢 菊ノ卷五十五錢 梅ノ卷五十五錢 郵稅各二錢

棚橋絢子著 ◎ 女道叢話 全 定價金三十錢 郵稅金四錢

三輪田眞佐子著 ◎ 女子之本分 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

三輪田眞佐子著 ◎ 女子處世論 全 定價金二十錢 郵稅金四錢

磯部武者五郎著 ◎ 家計簿記法 全 定價金十五錢 郵稅金二錢

藤野天城著 ◎ 女子小觀 全 定價金二十錢 郵稅金四錢

堀内新泉著 ◎ 女樂師 全 定價金卅五錢 郵稅金六錢

松川霓州著 ◎ 結婚と家庭 全 定價金十五錢 郵稅金四錢

堀内新泉著 ◎ 家庭の鑑 全 定價金十八錢 郵稅金四錢

女鑑編輯局編 ◎ 新編 ひめかゝみ 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

書名	著者	冊數	定價	郵稅
◎日本米穀ノ將來	岡勇次郎著	全	金三十錢	金六錢
◎國際貿易論	川崎直衛譯	全	金六十錢	金六錢
◎臺風雜記	佐美錄三著	全	金三十錢	金四錢
◎奢侈亡國論	白耳義リーシ大學教授ラヴレー氏原著 文學士寺內淳二郎譯	全	定價郵稅共 金十二錢	
◎德川の孔明	陸軍大臣寺內正毅題辭 隈□之序 甲□輔編	全	定價郵稅共 金十五錢	
◎日露の英雄	山崎忠和著	全	定價郵稅共 金二十二錢	
◎銀行簿記學	倉庫銀行頭取中村清藏序 中村佐平著	全	金五十錢	金六錢
◎土佐日記燈	故富士谷御杖述	全三冊	金一圓五十錢	金十五錢
◎慶長以來國學家略傳	井上賴圀校訂 小澤政胤著	全	金一圓五十錢	金十錢
◎豪吟集	弘田正郎編	全	金八錢	金二錢
◎鐵血宰相語錄	幸田露伴序 村上濁浪譯述	全	金三十錢	金四錢
◎江川坦庵	在法科大學 矢田七太郎著	全	金三十錢	金四錢
◎石田三成	水主天姥著	全	金三十錢	金四錢
◎山崎合戰	塚原澁柿著	全	金卅九錢	金六錢

人道

明治三十九年二月一日發行　每月一回一日發行　第拾六年第貳號　明治卅五年三月十二日第三種郵便物可認

東京築地活版製造所印刷